



Saltobaru Archaeological Museum of Miyazaki Prefecture



宮崎県立西都原考古博物館

研究紀要

第9号

劉 益昌

日本学者の台湾考古学研究 1

吉村和昭

西都市石貫出土の横矧板鋌留短甲 21

犬木 努・近藤麻美

西都原古墳群に埋置された「碑石」—西都原古墳群大正調査の基礎資料（1）— 31

藤木 聡

大正時代の西都原202号墳（姫塚）の発掘調査 52

甲斐貴充

韓国江原道海岸部の古墳見学記 61

安藤正純

日向国の溜池に関する考察 67

島木良浩

体験「カラムシから布をつくろうⅡ～紡錘を使って糸を撚る～」 78

嶋田史子

【資料紹介】都城市香禅寺地下式横穴墓出土鉄鏃に残る縫い目のある平絹 84

2013.3

宮崎県立西都原考古博物館
Saltobaru Archaeological Museum of Miyazaki Prefecture

序

これは、宮崎県立西都原考古博物館の平成24年度における研究紀要であり、総合科学の要であるこの一年の考古学を深化する取組をまとめたものです。

開館以来9年目、さらに古事記編さん1300年の節目の年を迎え、これまで伝承されてきた神話も大切にしながら、歴史を見つめ、宮崎県民をはじめ多くの皆様の御支援を受けて、館運営に携わる全職員が一丸となり、考古学に特化した館事業の一層の充実に向けて日々努力を重ねているところです。

中でも、考古資料等の調査・研究は、当館の事業を根本から支える不易で重要な活動であり、職員一人ひとりがたゆまず研鑽に努め、取組を進めているものです。

本年度もさまざまな角度から検討し、こうした調査・研究の成果を刊行できる運びとなりました。皆様の御批判や御指導を賜り、展示や講座等のさらなる充実に資することができれば幸いです。

また、本書は館外の研究者の方々からも御寄稿いただいております。このような連携は、本県の歴史の解明や当館の発展の可能性を広げていく上で欠かせないものであり、この場を借りて、御多用な中御執筆いただいた方々に深く感謝申し上げます。

おわりに、所載論文等の執筆にあたり、資料や情報の提供に御協力いただきました各関係機関や日頃より当館の運営に互助力をいただいている多くの方々に、この場をお借りして厚くお礼申し上げます。

宮崎県立西都原考古博物館長 中 野 通 彦

日本学者の台湾考古学研究

劉 益 昌 (台湾中央研究院歴史語言研究所研究員)

1 台湾考古学の二つの伝統

台湾の考古学は、文献中に考古資料の記載が見られる清代にまで遡ることができるが、これは単に古物やそのほかの発見を記録しただけで、科学的な考古学は日本統治時代初頭の1896年に始まったと言える。政治的な要因から台湾考古学の発展過程には二つの異なる学術の伝統が存在することになった。その一つは、日本統治時代初頭19世紀末以来、鳥居龍藏を初めとする日本人研究者によって築かれた伝統であり、もう一つは、戦後1948年末に中国から移ってきた安陽考古発掘団を主体とする考古学の伝統である。もちろん戦後1960年代から、当時の最新の考古学訓練をアメリカで受けた第一陣の学者たちによって、台湾に新しい考古学概念がもたらされ、大規模な考古学研究計画が進められたことが、恐らく当時の台湾考古学研究を変えた基本的な原因であろう。¹ しかしながら、前述の二つの伝統は、今日の台湾考古学において依然として不可欠な要素であり、台湾考古学研究の方向性に影響を与え続けている。

日本統治時代、初期の台湾総督府は統治の必要性から、武力によって反抗を鎮圧する一方、施政に必要な各種学術調査と研究に着手した。台湾原住民を主な調査対象とする人類学もその重要科目の一つであった。当時の人類学は概ね形質人類学、考古学、言語学及び文化人類学の四大分科からなっていた(宮本延人口述、宋文薫、連照美編訳 1998)。これらの調査者の台湾での仕事は主に台湾総督府と日本政府に代わって行う各種資源、資料の調査であり、統治者が殖民地統治するのに必要なあらゆる知識を体系的に捉えるための一環であったと言えるが、当然ながらこれはまた学術調査、研究の一部でもあった。この学術的伝統の中で考古学は原住民(台湾蕃族、高砂族)を対象とする調査作業ではあるが、自ら築いた学術が、鳥居龍藏に始まり、森丑之助、宮原敦を経て、さらに日本統治後期の台北帝国大学土俗人種学教室の移川子之藏、宮本延人、及び鹿野忠雄、国分直一ら研究者へと継承されていった。彼らが考古学遺跡の調査記録を共同で作成し、主に先史時代の人々と原住民との関係を研究し、民族学、民俗学、形質人類学など多分野の面からも比較研究することが主な研究の伝統となっていたのである(劉益昌 2006)。この研究の伝統は台湾考古学研究に影響を与え続け、1990年代以降、考古学の研究のため日本に留学した一部の学者の間では依然としてこの伝統が見られたのである。

1948年から1949年にかけての国共内戦が原因で中国から台湾に撤退してきた大勢の軍人文官の中に、中央研究院歴史語言研究所考古組の学者がいた。これら安陽殷墟考古発掘隊で主な研究をしていた考古学者はその後の台湾考古学の発展に決定的な影響を与えた。李濟は考古学研究と発展の青写真を作り、台湾大学に考古人類学系(現在の人類学系)を設立した。高去尋は中国考古学と古代史研究の基礎を作った。また石璋如氏は台湾考古学のフィールドワーク、現地調査に対する影響力がもっとも大きい。その主な原因は石氏が実地で台湾考古学の教育と研究の仕事に従事していたからである。

そのため考古学研究の方法、特に現場での作業の研究方法を次世代の考古学者に伝授し明確な層位学観念に基づいた台湾考古学の伝統を形成した（劉益昌2004）。

II 日本人学者の台湾における考古学研究の歩み

台湾考古学の科学的研究は、日本統治時代初期より始まったが、その後歴代の研究者たちにより台湾考古学の発展の歩みがまとめられている。最も古いものは戦後初期の金関丈夫、国分直一による「台湾考古学研究簡史」（1950、1979）である。日本統治時代の台湾考古学は3つの時期に分けられ、第一期は、1896年の芝山岩遺跡の発見及び1897年の伊能嘉矩と鳥居龍藏による圓山貝塚への注目に始まり、台北帝国大学に土俗人種学教室ができるまでである。明治30年代、鳥居龍藏と森丑之助は東海岸と山地の先史遺跡に焦点を移し、大正から昭和初期にかけて森氏と鹿野忠雄が行ったフィールドワークによって、台湾全土にわたって得られた遺物の数が激増している。この段階は先史時代の遺物や遺跡が台湾全土各地で発見された時期である。第二期は、台北帝国大学土俗人種学教室創設から1938年までであり、この期間には1930年の墾丁石棺埋葬遺跡、蘇澳区新城の石棺遺跡、埔里盆地の大馬璘遺跡等の発掘調査が含まれる。

第三期は、1939年1月に行われた、移川子之藏、宮本延人、金関丈夫及び国分直一等の学者による台湾西海岸南部二層行溪南岸の大湖貝塚発掘調査以降、1949年に金関丈夫と国分直一が日本に帰国するまでである²。1996年、国分直一氏は筆者の招待に応え、「台湾考古百年記念検討会」に参加し、「Prehistoric archaeology in Taiwan during the Japanese occupation in retrospect」（Kokubu1996年）を発表した。これは日本統治時代の台湾における考古学の概況を略述したものである。その後1999年には「台湾先史考古学の一世紀」を発表した。同稿において氏は、前述した日本統治時代を三期に分けた考え方を取り上げるとともにその補足説明を行ったほか、戦後半世紀における台湾先史考古学研究について自らの視点を提出している。氏は、「1 日本人研究者の在台研究時代」、「2 著名な中国人考古学者、民族学者の来台」、「3 フィールドワークの展開」、「4 文化系統の編年研究の完成」、「5 近年の問題意識の展開と深まり」という五つのテーマによって、戦後50年にわたる台湾考古学研究を述べており、この論説は台湾考古学の発展全体を体系的に明らかにするものと言えるだろう。

台湾人考古学者が台湾の考古学の発展について検討を始めたのは1990年代初期からだった。そこでは考古学史の時期的な区分の考え方も提起されている（劉益昌1992）。最近筆者は再び台湾考古学史について詳細な検討を加え、考古学の発展と台湾社会の変遷の面から考古学史を考察した。そこで筆者は大まかに日本統治時代を二つに分け、戦後を三つに分けて、改めて台湾考古学の発展過程を考察した。戦前の日本統治時代は、ごく少数の中国人学者が台湾にデータ収集のため現地調査に来ることはあったが、おおむね日本人学者によって研究が進められた。戦後部分については台湾人学者による研究の解説が主体となり、外国人学者による研究についてはあまり触れなかった。わずかに張光直^{ツァン グァンヂウ}に従って台湾に来た外国人学者（日本人小山修三^{こやましゅうぞう}も含む）について述べたのみである。従って筆者は、海外の国又は地域の学者による台湾研究の内容については詳述することができなかった

(劉益昌2011)。そのため台湾考古学の発展の歩みを完全に説明するには至っていない。

上述した学史研究の成果によって、日本統治時代初頭以降に日本人学者によって台湾で行われた考古学研究及びその大きな貢献を改めて見つめなおすことができるだろう。以下、各時代区分を時系列で説明していく。

1 日本統治時代（1896年～1945年）：発見と基礎

この時代については、日本統治時代の台湾考古学研究を対象として、1928年に台北帝国大学が創立された年を境として前後二期に分けて、日本人学者の研究成果を議論する。台北帝大設立を境とした場合、実際には1920年代における台湾の変容を説明することは難しい。大正9年（1920年）には台湾で街庄（行政区画）改正が実施されたため、各種の近代的なインフラが逐次整備されていった。その後、1922年12月29日に台湾総督府が「行政諸法台湾施行令」を發布し、日本本土で実施されていた36の法令も台湾で施行され、それと同時に高等教育を進めるために台北高校が創設された。1926年には日本本土で台湾での大学創設のための予算案が議会で承認され、教官の海外研修、学校予定地の買収、校舎の建設等準備作業が逐次進められた。そして1928年に台北帝国大学が創立したわけである。これは台湾での近代的高等教育の始まりであった。大学にはまず文政学部と理農学部が設置され、その中の文政学部に土俗人種学教室（Institute of Ethnology）ができた。この講座の教授はアメリカのハーバード大学に留学した人類学博士移川子之藏教授であった。博士の専門は大洋州（オセアニア）比較民族学の研究で、学術研究の提唱以外に、台湾総督府とは異なる種族分類の意見も提出した。それは学術研究の本質を示すものだった。こうした経緯から、筆者は1928年の台北帝国大学設立を境に日本統治時代を前期後期に分けた。ただ、この境界ははっきりとしたものではなく、1920年代を通して徐々に変化、形成されていった。1928年の台北帝大の設立は、その代表的な転換点というだけである³。

(1) 日本統治時代前期（1896年～1928年）：植民地統治に必要な知識の体系構築期

台湾は日本の最初の植民地であった。1896年は統治が始まって2年目にあたり、初期の総督府が統治の必要から行った学術調査には、原住民研究を中心とする人類学、民族学が含まれ、考古学の調査作業も広義の人類学の範疇に含まれていた。そのため、初期の考古学研究においては専ら台湾原住民の調査研究をしている学者に依存していた。これらの調査者の台湾での主な仕事は、台湾総督府及び日本政府に代わって各種資源、資料の調査を行うことだった。つまり、統治者が植民地経営に必要とする様々な知識を体系的に構築する一環として行われていたと言える。当然これは学術調査、研究の一部分でもあった。この時期の重要な学者には烏居龍蔵、森丑之助及び宮原敦が含まれる。それ以外に、遺跡を記録した研究者や、遺跡に関わる調査者として、伊能嘉矩、田中正太郎、佐藤傳藏、佐山融吉、河野常吉、河野廣道、中野勇が含まれる。これらの調査の大部分は考古学とは専門が異なる学者が他の調査研究活動も同時に行いながら残した記録である。

この時期の遺跡は主に台北盆地と山間地域で発見されたものだったが、一部には東海岸一帯で見つかったものもあった（森丑之助1902：89-95頁、1911：17-19頁 鹿野忠雄1929：30頁、金関丈夫、国分直一1950：10頁）。その主な原因として、台北が政治の中心で、学者たちの居住地だったことと調

査対象地域が原住民分布の多い東部山間地域だったことによる。当時の代表的学者である鳥居龍藏は、台湾の考古学遺跡は先史時代の人類が残したものであると述べ、これらの遺跡を一体誰が残したのか、はっきりと断定はできないが、日本国内とは異なって、マレー系 (Malay) か、ネグリート系 (Negritos) か、パプア系 (Papuan) かもしれないとした。しかし出土した土器類からマレー系の可能性が指摘された (坪井正五郎1897: 116-117頁、金関丈夫・国分直一1950年: 10頁)⁴。つまり、台湾原住民と同じオーストロネシア語系の民族が残した遺跡ということになる。

考古学遺跡と言え、当時の考古学者は遺跡とは遺物の出土した場所のことだと考えた。考古学の遺物の意義は過去の人類が作り出したものやどんな生活をしていたのかを証明することである (李光周1985: 15頁)。したがって、重要なことは遺物が出土した地点の報告だった。しかし、少し時代が下ると少数ではあるが、さらに深く掘り下げた研究が生まれた。その例が圓山遺跡から出土した大礮石と貝塚の研究である。台北医学専門学校の宮原敦教授は、発見された大礮石と石器の関連性から、石器製造の意義を説明するとともに、石器の品質と時代の新旧との関係を説明しようと試みた。同時に報告においては、貝塚から出土した貝類が主として半淡水半海水に生息する貝類であったことから、地質学者による台北盆地形成過程に関する推論を補強材料として、圓山貝塚がおおよそ3000年前に形成されたものであると推定している (宮原敦1919: 113-124頁)。このほかに、古くから記録に残されている伝説との関連性の視点から、貝塚遺跡の性質を説明し、遺跡が古代において貝貨を製造する場所であり、貝塚が貝貨製造の原料と残渣の堆積によって形成されたと考える学者も現れた (尾崎秀真 1926)。これは学者が遺跡に関連した学術的テーマを考え始めたことを如実に物語っている。

この時期には発見される遺跡の数も徐々に増えていき、1902年森丑之助の全台湾遺跡統計によると93箇所であった (森丑之助1902)。1911年森氏の再調査統計によって、169箇所まで増えた (森丑之助1911)。東京帝国大学が出版した遺跡統計では台湾の遺跡数は57箇所 (東京帝国大学編1928: 536-544頁) となっているが、同時期、1929年、1930年の鹿野忠雄の統計を例にとると、234箇所となっている (鹿野忠雄1929、1930)。その数値には大きな開きがあるが、主な原因としては、鹿野忠雄の数値がこの時期台湾の考古遺跡について全面的な調査を行った結果であって、多くの新しく発見された遺跡の数も含まれていることが挙げられ、この数については信頼性がある。

(2) 日本統治時代後期 (1928年－1945年): 学術研究の黎明期

1928年、台北帝国大学に土俗人種学 (民族学) 教室が創設された。決して学生を大勢集められる講座ではなかったが、関係書籍や教材資料室などの設備も整っている研究講座であった。この教室の創設までの過程においても文政学部内の地位においても、この講座は重要なものとされ、その学術研究の意義は深かったと言える。この講座の創設に関わった助手・宮本延人氏は、1983年の回顧録の中で「土俗学・人種学は史学科の中の一つの講座であった。史学科にはさらに東洋史、西洋史、南洋史、日本史の四科があった。土俗人種学は単なる講座であり、独立した科ではなかった。課程でもただ土俗人種学一科目があっただけだったが、この講座の建物は、他の講座のそれより何倍も大きく、研究を中心とする講座だったと言える。しかし、これは当時の日本政府の南方政策とも関係のある機関だっ

たようだ。」と述べている（宮本延人口述 宋文薫、連照美編訳1998：50頁、54頁）。

講座の教授である移川子之藏は、米ハーバード大学出身の人類学博士（1917年）で、大学在学中は物質文化の研究に関心を抱き、太平洋諸民族に関する研究を志し、卒業後は南太平洋島嶼域地区での研究に従事していた。研究のテーマは太平洋群島に住む諸民族の文様であった。移川氏は英語に精通し、アメリカの学界とも親密な往来があり、オーストロネシア系民族の研究に造詣が深かった。それで、1926年、台北帝大創設が決定すると、命を受けてヨーロッパへ赴き大量の人類学、考古学関連の書籍を購入し、研究の基礎を築いたのである（宮本延人著 宋文薫、連照美編訳1998年：23-28頁）。

1928年、台北帝大土俗人種学教室が誕生し、まさに学者の鑑のような移川教授の下、この教室では1928年から1945年までの17年間、安定した長期的調査研究が行われることとなった。その間、宮本延人、馬淵東一^{まぶちとういち}などを指導しながら、台湾民族誌の名著である『台湾高砂族系統所属の研究』（移川子之藏等1935年）を書いた。また、博物館の建設（陳列室の設置）にも関わり、総督府博物館の研究と所蔵品展示にも加わった。ただ、考古学に関する研究はまだ系統的には進められておらず、屏東墾丁、蘇澳新城、花蓮花岡山、高雄大湖等の遺跡発掘作業以外は、例えば現在の苗栗県泰安鄉山地区の二本松遺跡など僅かな発掘調査しか行われていなかった。そのほかの多くの遺跡は台湾原住民族誌調査の折に発見されたものばかりで、特に立霧溪、曾文溪上流、楠梓仙溪上流、荖濃溪上流など、山間部の原住民居住地域などで多く発見されている。多くの遺跡の記録が集められたが、ほとんどが発表されず、僅かな資料が土俗人種学教室の資料収蔵室に納められただけであった。この時期、土俗人種学教室で最も重要な論文は、移川子之藏氏の「『バツ』を繞る太平洋文化交渉問題と台湾で発見された類似石器に就て」（1934年）と、宮本延人氏の『台湾先史時代概説』（1939年）の二編である。移川氏は、物質文化を比較する観点から、台湾で出土した磨製匙状の大鋤と南太平洋ポリネシア原住民族が戦闘用の武器として使っていたパトゥ（patu）が非常に似ていることを説明し、両者の間に何らかの関連性があると考えた。これは当時の広大な視野を有する異文化比較研究の実例である。一方、宮本氏の文章は、台湾で発見された貝塚や石器、土器等の各種遺物については書かれているが、その遺跡がどのような文化体系に属しているかというところまでは論じられておらず、遺跡、遺物の描写のみが主な内容になっている。しかし、この時期、学者はすでに政府の植民地政策の道具となることを避けて、純粋に学術研究の段階に入っていたことがわかる。そして考古学遺跡に対しても、規則的な調査と発掘が行われるようになっていた。花岡山と新城遺跡調査の報告内容を見ると、遺跡の地形描写、遺跡、遺物及び結論などの章立てから成っていることから、考古学研究の報告の基礎的な形式が当時既に出来上がっていたことがわかる。ただ唯一欠けているのは、地層、堆積物に関する詳細な描写や実測図である。この時期、考古学の報告や論文の形式は既に初歩的な完成を見たと言っていい（宮本延人1931・移川子之藏、宮本延人1933）。

しかし、この時期の台湾の考古学の大きな発展は、必ずしも台北帝大の校内で生み出されたわけではなく、地方の独立した研究者において生み出されたのであった、その中で最も重要な人物が二人いる。一人は1925年、中学の時に来台し、台北高校に進学し、帰国後東京帝大、京都帝大で学んだ鹿野

忠雄である。もう一人は台湾で育ち台北高校に進み、その後帰国して京都帝大に進み、1933年に教師として再び台湾に戻った国分直一である。このほかに、金関丈夫⁵、平山 勲、石坂 莊作、金子 寿衛男等、民間の学者や考古学愛好者もかなりの数の考古学調査、研究を行っていた。鹿野氏は初めは動植物学や生物地理学、地形学などに興味があったが、台湾原住民社会と先史学にも興味を持っていた。そして、1933年に博士号を取得後、調査の仕事を行うために再び台湾に戻ってきたのである。鹿野氏の著作発表の年代から分かるように、1930年代以降、彼は台湾原住民と先史時代の文化との間の関連性についての研究を深めていった。鹿野氏が行方不明になったあとで出版された『東南亜細亜の民族学先史学研究』上巻の序文において、彼は「台湾原住民の研究は、将来東南アジア全域に研究範囲を広げる時にきっと役立つ」と述べている。そして、「今後は大陸区域と島嶼区域をいっしょに関連づけて考え、お互いの密接な関連性を考えるべきだ。こうしたことはこれまでは差し迫った研究課題ではなかったが、台湾本島はこの二つの区域の間に存在するわけで、まさに最良の資料の宝庫となるであろう」と述べている（鹿野忠雄1946：3頁 楊南郡⁶訳註1988年：30頁）。鹿野氏が言う東南アジアとは、おおむねインド東部アッサムからインドシナ半島のビルマ、タイ、ベトナム等の「大陸区域⁶」と、フィリピン、マレー半島、インドネシア及び太平洋諸島の「島嶼区域」とから成っている。台湾は当然その両区域の間にあるのであり、彼が台湾で考古調査を行った主な場所は、台湾東部地区と山間地域で、その主な研究目的は初期の民族調査で得られた知識と先史学の資料を結びつけて推論を導き出すことであった。著書『東南亜細亜の民族学先史学研究』下巻において、東南アジアの民族学資料と先史学資料はそれぞれが独立して存在するものではなく、お互いに少なからぬ関連性があるのは疑いのない事実である旨述べている（楊南郡訳註1988年：288頁）。こうして考古学と民族学の研究が結び合わされて「歴史考古学」、「歴史民族学」、「民族考古学」が生み出され、初期の鳥居龍藏、森丑之助による研究方法が引き継がれるとともに、主として遺跡の記録や遺物の分類、そして原住民民族誌の調査研究により、先史時代の遺物の製作や使用法などが考察され、さらに一歩進んで先史時代の文化の起源と伝来過程や、台湾原住民族各種族の文化移動と交流などについて時代を遡って追究、研究するまでになった。鹿野氏は、地理学と地形学の訓練を受けたことによって、先史時代の文化層序の研究に関わりのある層位学の面で、他の学者に比べて突出している。明確な層序関係のある遺跡は発見されていないものの、彼は限られた資料を利用して、近隣の東南アジア、アジア大陸で出土した資料との比較研究を行い、台湾先史文化層序を縄文土器等の七つの文化層に設定し、これら文化の基層は大部分が大陸系の文化であり、最後の段階のフィリピンの鉄器文化のみフィリピンから伝来したと考えた（鹿野忠雄1952 宋文薰訳1975）。この観点は当時の台北帝大系が取っていた南方起源説とは大きく異なっている。

もう一人の重要な研究者である国分直一氏は、生後間もなく両親と台湾に渡り定住し、後に台北高校に進んだ。鹿野忠雄とは入学が前後したが、その後京都大学東洋史学科を卒業し、考古学、民族学の教育を受けた後、1930年代初期に台南女子中学に教員として赴任し、1943年に台北師範学校に転任した。鹿野忠雄とはしばらくの間共に調査をしたことがあった。その鹿野からの深い影響もあって民

族学と考古学を結び合わせた総合研究の方法へと傾倒していった。彼は当時、南部地域で教鞭を執っていた台南州立二中の金子寿衛男、高雄中学の土屋 恭一^{つち ききういち}など、数人の中学教師と協力して、西海岸南部平原と丘陵地域で多くの考古遺跡を発見した。その中の最も重要な発見は二層行溪南岸の大湖遺跡と澎湖島良文港遺跡であり、その遺跡調査を通して、国分、金関丈夫の両者は同時に黒陶、彩陶、有肩石斧、有段石斧などから、北方文化との関係を検討した（国分直一1941年・1943年 金関丈夫1943年）。国分らは台湾先史文化層序に関して鹿野忠雄と同じ見解を持っていたが、その説明を戦後の1956年まで正式に発表しなかった。1954年、金関丈夫と国分直一は、第二次世界大戦後期から1949年夏に日本へ引き上げるまでを振り返り、台湾先史考古学の仕事の概要を次のように評している。

「この時期、我々は台湾先史土器編年史を作成していて、遺物に代表される文化の系統に注意を払っていた。同時に先史遺跡相互間の系統関係の解析や、インドネシア系原住民族文化との関係の解析も非常に重視していた。当然我々の努力は十分ではなかったが、もし台湾の先史遺跡の系統を多少なりと明朗にすることができたなら、どれほど慰めになることだろう⁷。」

この仕事の内容の叙述は非常に謙遜した表現になっているが、日本統治時代の50年と戦後の数年間において、日本人学者が台湾考古学に対して非常に大きな貢献をなしたことは事実である。しかし、日本統治時代の考古学者には基本的に制限があって、学者の研究内容から分かるように、当時既に相当数の考古遺跡が発見され、先史文化層序も初歩的な確立がなされていたものの、文化層序の構築においては遺物の比較分析に大きく依存していたため、地層の層位の証拠は比較的少なかったのである。こうした事実は、国分直一によってのちになされた日本統治時代末期研究への批判からも窺い知ることができる。同氏は、「台湾先史時代靴形石器考」の追記「靴形石器追考」において次のように述べている。

「日本時代の研究中、何が一番足りなかったかという点、発掘調査から主要土器と関係のある文化層序を分析する能力だった。異質な土器が混在しているとき、層序性の把握ができない限り、靴形石器もまたそうだが、土器とその他の文化的要素との関係も把握できない。ここにおいて、われわれは、遺跡類別に示された靴形石器と、その他の技術的な諸要素の組み合わせからでは、考古学上の総合的理解を成すことができなかったのである。⁸」

総合的に見て、日本統治時代において、1928年から1945年までの17年間に台北帝国大学土俗人種学教室によって行われた考古学関連の調査、研究は比較的少ない。墾丁遺跡をはじめ、蘇澳新城、花岡山、大湖等の遺跡が発掘されたが、詳細な発掘の報告は多くはなく、関連する発掘方法や地層関係によっても、先史文化層序の地層における相関関係を説明できていない。逆に、台北帝国大学土俗人種学教室との関係が薄かった鹿野忠雄氏が1940年代初期に遺跡の全面調査における若干の試掘と遺物の比較を利用して、7層の先史文化層序の概念を導き出しており、実際の層位の証拠はないものの、考古発掘と遺物比較研究を基にして明確な文化層序概念を提示している。鹿野忠雄、金関丈夫両先人の影響を受けた国分直一は、西南台湾平原、丘陵地域で新たに発見された考古遺跡を利用して、遺跡の位置と地形の変遷との関係を一から見直し、石器の質が同じ種類（橄欖石・玄武岩）であることから、

西南平原と澎湖群島は先史時代前期から密接な関連があることを突き止めた。

筆者は長年台湾の考古学を研究してきて、日本人学者が台湾に残した大量の資料、基礎的な考え方、台湾考古学の発展に与えた大きな影響に対して、深い感慨を覚える。当時の学者の考古遺跡と出土品に対する認識は、遺跡が過去の人類が創ったものとその人間活動遺留物であるという証明を越えて、さらに進んだ解釈で、先史時代文化と種族との関係までも検討しようとした。とくに民族関係、ルーツ、広範な文化の比較研究などが、台湾の考古学の視野を大きく広げたと言える。

2 戦後前期（1945年－1980年）：継承と発展

1945年、終戦直後、台湾では必要に迫られて、各機関や学術組織では日本人の専門職や教師を留任させ、1948年～1949年まで戦後の台湾の復興に協力してもらうことになった。従って、筆者は、その1945年～1949年の3年余りの短い期間を特殊な段階とみなして、1949年8月以降と分けて説明する。

(1) 継承（1945年－1949年）：台湾残留日本人学者による学術の継承

戦後、元台北帝国大学土俗人種学教室は、台湾大学歴史学系民族学研究室に改められた。中国の騒乱による不安もあって、民族学、考古学の教学、研究などは、留任した日本人教授宮本延人と東北大学出身の台湾人学者陳紹馨氏が受け持った。1947年には国分直一が教学研究に加わった。同時期には医学院解剖科教授金関丈夫や、理学院地質学系教授早坂一郎も留任となっている。そして、これら留任日本人学者は、1949年8月に日本に戻るまで、台湾考古学研究の中心的存在だったと言える。その間、国分直一は歴史学系教授として「台湾先史時代概論」を講義するとともに、学生を連れてフィールドワークに出たり、小規模な発掘作業も行っており（国分直一等 1950年）、その学生の中には、のちに台湾で著名な考古学者となる宋文薰と劉斌雄も含まれていた。

留任し研究に従事した時間は僅か4年弱だったが（1945年10月から1949年8月）、金関と国分の両氏はそれでも、台湾の考古学研究をあきらめなかった。国分直一は台湾大学歴史系教授に転任してから、宮本延人の指導の下、戦争によって損傷した元土俗人種学教室の資料展示室と収蔵室にあった民族学、考古学の資料を整理した。同時に金関丈夫と共同で「台湾先史時代生活図譜」を作成し、1948年の台湾省博覧会に出品し、日本統治時代の台湾考古学研究の成果を利用して、台湾先史時代の人類の生活形態と風俗習慣を系統的に描写した（金関丈夫・国分直一 1979：305-312頁）。展覧会終了後は立石鉄臣及び陳奇禄と協力して台湾公論報が刊行した「台湾風土」に「台湾原住民（族）工藝図譜」というコラムを發表した。立石、陳が挿絵を、国分氏がその解説をそれぞれ担当し、これらの資料はのちに『台湾考古民族誌』にも収録された。その中には多くの先史時代の資料と民族誌資料との比較がなされ、民族学と考古学が結びついた重要な例となった。『えとのか』という雑誌の中にも類似した考古遺物の解説コラムが見られるが、恐らくは『台湾風土』の影響を受けたものであろう。

この期間、金関、国分の両氏は調査と発掘を続行する以外に、同時にかなりの量の考古学調査報告と論文を書いた。その中で最も重要なものに「台湾先史時代靴形石器考」（1949）と「台湾考古学研究簡史」（1950）がある。前者は台湾地区で出土した各類型の靴形石器を収集分析したもので、型式学の観点から分類され、周辺地区との比較研究も進められた総合的な文章である。後者は考古研究の

視点から日本統治時代の考古研究の時期区分と時期別特色の全面的な検討を行ったものであり、台湾を離れる前に書かれた総括となるものであった。この期間の研究から、二人の遺跡と遺物に対する見解が前段階と一致していることが見て取れる。

1948年末、中央研究院の考古学者が台湾を訪問した。国分は中国の学者と初めて接触した感想を「戦後台湾の史学民族学界」（国分直一1951）の中で述べている。その一文を読むと、当時の推測しがたい政治的状況と、文化交流が盛んに行われている状況とが同居している戦後初期の雰囲気を感じ取ることができる。国分氏は、敏感で切迫した政治的圧力が如何に学術と文化の人事面に影響を与えるかを目の当たりにする一方で、台湾で展開された日本、台湾、中国、三地域の学術と文化交流を身を以て経験した⁹。これは一つの継承と変化の時代を示すものであり、1949年、台湾大学に考古人類学系ができてからは、台湾の考古学研究は中国から移ってきた安陽考古学者があとを継いで、考古学研究を導いていくこととなった。ここに至り、日本人学者が築き上げてきた考古学の伝統はついに中断することになった。

（2）発展（1949年－1980年）：日本人学者帰国以後を引き継ぐ

1949年8月、留任していた日本人学者は全て日本に引き揚げた。実際にフィールドワークを必要とする考古学や民族学から言えば、元々台湾を研究の中心に据えていた日本人学者は突然フィールドワークの場を失ってしまったわけである。ただ、彼らは、長期にわたって蓄積された学術研究記録や経験を生かして、その後も研究を全うすることができた。考古学で言えば、金関丈夫、国分直一がその後最も多くの台湾考古学研究の成果を挙げ、そのほかに宮本延人、^{澤井清足}が若干の論文のみ発表している。

国分直一の愛弟子の^{きのしたなつこ}木下尚子教授は、国分氏の学術理論と形成発展を区分したが、ただ第一期である戦前の在台研究期間（1933年～1949年）における国分氏の台湾での学習と調査研究についてのみ言及し、ほかの三期間の部分においては台湾での研究活動について言及していない。ただ、文章中の最後において、国分氏が台湾考古調査に対して、強烈な使命感を持っていたことを述べ、氏が次のように考えていたとしている。

「収集した資料について、報告書を書かなければ、それは学問を成したとは言えない。広く世に應用され利用されなければ、ただの積み重ねられた資料の塊に過ぎず、何の意義も見出せないし、遺跡の中にそのまま残しておいたほうがまだましだ。一旦考古学調査として掘り起こしたなら、新しい一面を示さなければならない。発掘計画と綿密な資料報告書がなければ、自然のまま残されていた遺跡をただ、破壊しただけに過ぎなくなってしまう。一度発掘に着手したら、最後まで責任を全うしなければならない。これは良心的な事業であると言ってよく、自らを励ましつつ行うべきである。成果はすぐには現れないが、じっくりと考え、日本に帰っても研究が続けられるように準備をしておかなければならない。」（木下尚子2011：35頁）

従って、国分氏は帰国後、すぐ自らが台湾で行った調査報告を逐一発表し、『台湾考古誌』（金関丈夫、国分直一1979）、『台湾考古民族誌』（国分直一1981）としてまとめ上げた。その中には遺跡調査

報告書も含まれる。即ち、基隆湾沿岸の大沙湾・社寮島、台中市大肚溪北岸の营埔遺跡、屏東県小琉球島の大寮・蕃仔厝・烏鬼洞遺跡、台東県卑南遺跡、高雄市寿山の内惟龍泉寺・内惟洞窟・桃仔園遺跡、小岡山遺跡、澎湖県良文港遺跡、花蓮県立霧溪口遺跡（現在の崇徳遺跡）、南投県東埔遺跡等の報告書である。これらはいずれも調査資料と研究成果が詳細に書かれており、台湾考古学界にとって基本資料及び研究論文となっている。もちろん研究成果を記した論文集の中には総合的な論述も含まれている。例えば、台湾貝塚の分布、靴形石器、有肩石斧、黒陶、石包丁、貝輪、橄欖石・玄武岩石器の分布とその意義などについての考察などである。またもちろん文化的類縁関係についても考察されており、台湾とアジア大陸との関連性を指摘すると共に文化の系統を確立し、台湾を總体的に理解したものと言える。こうした研究に従事していた人が少なかった台湾考古学界において、大きな意義と影響を与えたのである。

次に1950年の金関丈夫との共著「台湾考古学研究簡史」以来、国分氏はほとんど定期的に台湾先史考古学の発展を回顧している。そのたびに新しい段階における考古学界の人々の概況を紹介しているほか、関連する研究テーマについて新たな材料を補足したり、研究の新しい切り口を紹介したりしている¹⁰。それはまるで台湾の考古学の最新の発展過程を理解することを通じて、国分氏のいまだ捨てがたい台湾考古学研究に対する情熱を発散させているかのようである。この期間の主要論文は以下の通りである。

「戦後台湾における史学民族学界」『東洋史研究』11巻12号、2-16頁、1951年。『台湾考古民族誌』（1981年）に収録。

「台湾先史考古学における近年の工作」『民族学研究』18巻1-2号、67-81頁、1954年。『台湾考古誌』（1979年）に収録。

「台湾における考古学研究の進展」『考古学研究』24巻3-4号、254-258頁、1977年。

「台湾先史考古学の展開」『台湾考古民族誌』、17-37頁、1981年。

「台湾先史再考」『台湾考古民族誌』、38-62頁、1981年。

「台湾先史考古学の一世紀」『先史学、考古学論究Ⅲ白木原和美先生古希記念呈献論文集』、355-376頁、龍田考古会、1999年4月。

これら一連の文章で、日本統治時代の台湾考古学、先史研究に関して、国分氏は自分や同時期に台湾にいた日本人学者を台湾の考古学史上一体どのような位置づけをしていたのであろうか。1954年、国分氏は戦後から1949年夏の本国引き揚げまでの期間を次のように回顧した。

「この期間、我々は台湾の先史時代土器の編年研究のために、遺物が代表する文化系統に注意を払い、同時に先史時代遺跡間の相互関係を考察し、併せてインドネシア系先住民文化との関係にも深く考慮した。もちろん我々の努力はまだ足りなかったが、多少なりとも台湾先史時代遺跡の系統を明らかにできたとしたなら大きな慰めである。特に台湾先史考古学の研究概要に関連した評価というのは、学問的基礎を確立した意義をだいたい説明することができ、」こうした資料は台湾考古学者にとっても非常に重要な意義をもつものである。そのため筆者はかつて、台湾考古学の学習過程で、これらの

基本的な資料が大いに役に立っていること、そして金関、国分両氏の台湾考古学に対する見解からも多くの研究の方向性を学ぶことができた旨述べたことがある。

この時期、坪井清足も、戦争中台湾南部の高雄鳳鼻頭遺跡がある駐屯地に服役して、塹壕を掘る過程で重要な文化層を発見し、遺物も出土したことを、第八次太平洋科学会議・第四次極東先史学・人類学会議（Proceeding of the Fourth Far-Eastern Prehistory and the Anthropology Division of the Eighth Pacific Science Congress Combined）において鳳鼻頭遺跡に関する重要な論文（Tsuboi, Kiyotari 1956）として発表している。同様に宮本延人も戦後、台湾先史文化と原住民のエスニックグループとの関連性に関する論稿と、墾丁寮遺跡の発掘報告書等数編の論文（宮本延人1963年）を発表し、台湾考古学界に重要な参考資料を提供した。晩年、台湾での研究に関する回顧録（宮本延人口述、宋文薰、連照美編訳 1998）では、台北帝国大学時代の土俗人種学教室の設立過程や調査に関する重要な資料を台湾学界に提供した。坪井清足も文化遺産に関する論文（坪井清足1986a）と回顧録（坪井清足1986b）の中で、1950年代に書かれた高雄鳳鼻頭遺跡、潭頭遺跡及びそれらの出土品などに関する資料を改めて発表した。これらの資料は全て、現代の台湾考古学研究者にとって学術史上及び学問研究上非常に重要な意義を持っているのである¹¹。

III 現代日本人学者による研究

1980年代前後、日本考古学界の台湾研究には大きな変化があった。かつて台湾に居住し、台湾を研究した学者たちもやがて年老い、金関丈夫は1983年に逝去し、宮本延人も1987年にこの世を去った。その間、金関丈夫、国分直一による台湾考古学に関する重要な著作が1979年、1981年にそれぞれ編集出版された。宮本延人は、回顧録の形で記録を残した以外は、この時期の研究論文は僅かである。坪井清足は昭和27年に発表した著作を再出版した（坪井清足1986b）。

この時期の先人学者たちは、研究資料と調査機会が原因で、台湾考古学研究からしだいに遠ざかっていった。ただ一人、国分氏だけが台湾考古学、先史学に対してその研究を継続し、台湾学界とも引き続き関係を維持し、のみならず、彼の教え子たちにも影響を及ぼしている。

次に日本考古学界は1977年に東南アジア考古学会を創設した。東南アジア研究を中心とする学者の中にも台湾考古学に対して興味を持つ者が出てきた。そして、台湾を東南アジアの範疇に位置づけて考え、台湾に来て調査をしたり、関連する文章を発表する者もいる。同時に台湾が地理的に沖縄に非常に近いことから、沖縄においても双方の関係に注目する学者もいる。もちろん、南方文化の研究者の中には、日本文化の南方伝來說への関心から、台湾についても研究対象とする者もいる。このようなことから、日本の現代考古学者もやはり、台湾考古学の研究が必要であると考えているのである。

1 国分直一と教え子たち

この当時の国分氏は東シナ海域を囲む民族と文化交流の研究に注力していた（木下尚子2011年）。しかし、台湾に対する関心も依然見受けられる。国分直一、藤田修司^{ふじたしゅうし}編集の雑誌『えとのす』（1974年-1987年）では、その創刊の目的を日本海と東シナ海の海上の道を探り、日本民族の文化への融合

と折衷の過程を分析することであると述べている（木下尚子2011：31頁）。その中には数頁を使って台湾研究に関する特別稿を載せたりしている。例えば、宋文薰教授と金子エリカは台湾東部巨石文化を議論した（宋文薰教授1976、金子エリカ1978、1979）。そして、もちろんその後継者も現れ、台湾東南海岸島嶼蘭嶼の考古調査を報告している（米沢容一1984、1985、1986）。

国分氏はこれまで長期にわたって台湾の考古学研究に関心をもち、その時間は非常に長く、1990年代半ばごろまで及んでいる。そして引き続き、台湾で行われる記念講演に招かれたり、学術研究会に参加している。その中で1996年には筆者の誘いを受けて、中央研究院主催の『台湾考古100年記念会』に参加し、台湾考古学史に関する論文を発表した。

国分直一本人のほかにも、教え子である劉茂源^{リウマオユエン}、木下尚子もその学術理論を継承し、台湾研究に関心を注いでいる。二人は1988年－1989年、熊本大学の白木原和美教授がリーダーとなった「台湾島東海岸の先史遺跡」計画に参画し、その研究を分担している。この研究計画の目的はルソン島北部からバシー海峡地域の先史文化と沖縄県南西諸島の先史文化との関係を明らかにし、特に南方文化が北上する過程の台湾島東海岸での状態の検討である。そのため台湾の東海岸に来ては多くの考古遺跡を調査し、文化遺物も多数採集して、『台湾島東海岸先史学資料集』を編纂した（白木原和美1990）。その中には数多くの重要な遺跡の資料が収められており、日本人学者の台湾に対する理解が顕著に現れている。

2 東南アジア、南方文化研究者

この時期、国分直一及びその教え子たち以外に、日本考古学界にはもう一つの、これまで台湾とは全く関わりがない日本人学者による学術グループがあった。このグループも研究テーマに基づいて台湾考古学に関する研究を行っていた。

1977年1月27日、日本東南アジア考古学会が八幡一郎^{ヤマトイチろう}、小林知生^{こばやしともな}等11人を発起人として成立した。この会は南山大学教授小林知生を会長として、総勢50名の会員からなり、東南アジア地域の考古学を主な研究の範囲として発足した。したがって、台湾もその範囲に含まれており、台湾出身の徐韶韻^{シウシャウイン}女史も会員の一人として加わっていた。その後、1981年度に国分直一も学会会員になった。成立以来、学会は台湾研究にも関わり、1982年5月4日に開かれた第6回大会では宮本延人に講演を要請し、宮本氏は、「台湾原住民族の土器について」¹²と題した講演を行った。その後、学会員佐々孝^{ささこう}、米沢容一^{よねざわよういち}が台湾に赴き、調査活動を行った（佐々孝1984：10-13頁、米沢容一1984、1986、1989、1990）。その際には、国立台湾大学の宋文薰教授の研究室を訪ねたほか、中央研究院を訪問して、筆者と台湾考古学をテーマに議論を交わした。また、そのほかに東南アジア考古学会は発足以降、台湾の考古学者を例会に招待して発表をさせている。例えば、1986年2月1日第43回例会には、台湾大学教授宋文薰を招き、「台湾東海岸の考古学」¹³と題する講演会を開いた。また第10回大会にも宋教授を招待し、「台湾出土の玦状耳飾り」（宋文薰1987年：15-17頁）が発表された。その後も台湾の学者を会に招待しては、台湾関連の研究の発表を求めた。また、『東南アジア考古学会会報』の最近号には、筆者が2010年早稲田大学で行った講演内容を少し手直しして、発表した『台湾考古学における近年の研究概要』

(劉益昌2011: 1-16頁) が掲載されている。つまり、東南アジア考古学会の立場から見れば、フィリピンを研究する学者は通常、台湾の考古資料にも関心を持っているので、台湾とフィリピンの間の関係を少しでも議論できるのである。近年はさらに環南シナ海地域との関連性にまで範囲を拡張するようになっている。ただ、これまでに日本人学者と共同で研究をした台湾の学者はまだ少なく、単に相互訪問を行っているに過ぎない。

それから、台湾研究に関して、日本人学者にあっては沖縄県の学者が主に沖縄と台湾の間の関連について言及している。それは、沖縄県の先島諸島の先史文化体系と北方の琉球本島以北の文化とは異なっているというもので、そのため、沖縄の学者は先史文化の体系的相互関係を探し出す上で、沖縄とは地理的に近い台湾或いは南方島嶼を、重要区域と考えた。その中の一人が沖縄国際大学の^{たかみや ひろ}高宮広衛教授である。高宮教授はこれまでに、台湾大学宋文薰教授を通して、たびたび台湾に赴き、調査活動をし、その調査結果を共同で発表した(高宮広衛、宋文薰、劉益昌1998年・高宮広衛、宋文薰1999・高宮広衛、宋文薰、連照美 2001、2002)。その主な目的は、琉球と台湾の関係について議論し合うことであった。そのほかの学者もほとんどが同様の見方であった。最近の若い学者の一人である^{ごとう 雅彦}後藤雅彦も台湾に招かれ、会議に参加し、「沖縄考古学の現状と台湾考古学との接点」を発表した。その後この論文は加筆修正後に中国語訳されて発表された(後藤雅彦2008)。ただ、後藤氏は台湾の考古学資料に対して決して特別理解が深いとは言えず、引用している台湾考古資料も多くない。また、全体的な台湾の先史文化研究の現状に対する理解についても見落としている部分がある。したがって、提出された琉球台湾等区域間の関連性についても明らかに遺漏がある。もちろん他にも多くの沖縄の学者が沖縄、台湾の関係について議論を交わしているが(例:^{おおいま 永宣}大浜永宣1999)、ここでは一つ一つ紹介は差し控える。

今日の東南アジア考古学研究の考え方を以って見れば、実際にはもっと早くからあった黒潮文化の会の会員が行った日本文化の南方文化をルーツとする研究が、さらに台湾と沖縄と日本本土との関連性をあきらかにしようとした。この研究会は黒潮で繋がっているルソン、バタン群島、蘭嶼、台湾東海岸、琉球、九州南部の調査研究、及びルソン島から台湾東海岸を通して、琉球、鹿児島まで行く航海実験を通して、金関丈夫、国分直一及び^{ささき 高明}佐々木高明の三人の学者が関心を持っていた日本文化のルーツでの南方的文化の要素をはっきりさせようとした。黒潮文化の会の研究の中でも考古学の発見が議論されている(黒潮文化の会編1977、1978、1979)が、この研究は環台湾東部海域の民族学、民俗学の議論にとっても更なる意義がある。

IV 結論 東アジアと東南アジアとの関係

1 日本人学者の貢献

木下尚子教授は、国分直一氏の学術成果に対する評価について、国分氏が考古遺跡調査を通して台湾考古学の基礎を確立し、民俗調査を通して台湾及び日本の民俗学に貢献をなした旨指摘している(木下尚子2011: 34頁)。

日本統治時代の50年間における日本人学者の貢献は、主に考古遺跡の調査記録を残したことによって、台湾考古学研究の基礎を確立したことである。基礎資料の発表と更なる研究によって、日本統治時代末期の1940年代初めになると、台湾先史文化の層序確立の一步を踏み出した（鹿野忠雄1944）。先史文化層序を確立することで、前からあった考古資料がどの区域の考古資料なのかをはっきりさせて、資料を完全なものにすることができ、それがひいては比較研究を進めることになった。

当時の学者には文化層が重なった複数の考古遺跡を発掘調査する技術はまだ確立されていなかったが、文化遺物の比較研究を進めることで、対応する文化層序を得ることが可能になった。同様に、台南地域で考古遺跡が大量に発見されてから、文化遺物の特徴の比較研究に加え、台南台地の隆起過程によって生じた高度の違いに基づくことによっても、対応する文化層序を断定することができるようになった¹⁾。こうした研究は全て日本人学者の台湾考古学に対する初期の研究段階の貢献がなければ叶わなかったことである。したがって、日本人学者が台湾考古学の初期研究段階において成した貢献はまさに「台湾考古学の基礎の確立」であったと筆者は考える。

次に現代の学術環境は考古学が総合的な学問であることを証明している。多くの学科に跨った研究や地域間の比較研究をしなければ、さらに広範な比較研究はできない。現代の日本人学者による台湾研究に触発され、台湾の考古学者は、東アジア島嶼弧地帯に属する琉球弧とフィリピン弧とが交わる場所に台湾があるという地理的条件に加えて黒潮と季節風の影響にも思考をめぐらし、人類が移動する上で台湾が有すべき地位について説明するようになったと言えるだろう。台湾人学者は、戦前の鹿野忠雄から始まった特に台湾-フィリピン間を結ぶ研究や、現代の東南アジア考古学会の学者によるフィリピン研究といった日本人学者による研究に触発され、沖縄、台湾、ルソン島の相互間の関連性を特に考えるようになったと言える。とりわけ日本人学者が早くから東南アジアで実際に考古学調査研究を始めていたことは、台湾の学者が模範として見習うことができる点だと考える。

2 将来の展望

前述した台湾の地理的位置から、台湾は、東アジアと東南アジアの間という特殊な位置にあると同時に、アジア大陸と太平洋の間にある大きな島であるとも言える。また、人々の活動の面から見ると、この島は、大勢の人々を養うのに十分な大きさである。また山地も、様々な生態環境が形成されるのに十分な高さを有し、海拔が比較的高い山岳が海辺からそう遠くない。そのため、海上を航行する人々にとっては、見つけやすい重要な指標となった。考古学者の研究意義の面から言えば、地理的位置と学術テーマを通じて、日本と台湾との間の研究の関連性が説明できるだろう。以下にいくつかの要点を挙げる。

- (1) 台湾は環東アジア海域の南半圏に位置する。つまり東シナ海の南側にあって、台湾海峡を通じて南シナ海とつながっている。東は沖縄、九州へとつながり、国分直一氏が提唱した環東アジア地中海域文化と民族交流の概念によって、先史時代から近世初期に至るまで、人々は、アジア大陸と琉球、日本の九州との間に介在する台湾を通じて、それぞれの間を相互に往来していたと理

解することができる。最近、木下尚子は、「13～14世紀の琉球と福建」という研究テーマにおいて、13～14世紀の海上貿易のありようから、琉球国が成立した主な原因を探っている（木下尚子編2009）。実はこの研究テーマは福建と琉球との間にある台湾北海岸地域と必然的に関連するものであり、王淑津女史と筆者はかつて淡水河口南岸の大坵坑遺跡から出土した12～14世紀の陶磁器を利用して、このテーマの関連性を説明した（王淑津、劉益昌2010）。

- (2) 台湾島の南半分は環南シナ海域の東北部の角に当たり、台湾海峡を通じて東シナ海やアジア大陸とつながっている。つまり南シナ海域から見れば、東南側半分はフィリピン（ルソン島・パラワン島）で、ボルネオ、マレーシア等群島の西側は北に向かってインドシナ半島のカンボジア、ベトナム中南部とつながり、東側の北方には台湾本島がある。また、南シナ海域西北側半分は中国の福建、広東、海南諸省及び、ベトナム北中部へとつながり、真東には台湾本島がある。山形真理子、西村真次などの考古学者が既に実証しているが、先史時代以来、人々は両大弧状区域の海陸交通を通じて密接に往来していた。台湾はその南シナ海両大弧状区域の地理上のちょうど結節点に当たり、両区域の異なる特徴を併せ持っている。日本人学者による近年の東南アジア研究の成果である豊富な資料からも、こうした研究の趨勢を充分支持できる。

- (3) 東台湾海域は、フィリピンと沖縄との間にあって、黒潮を通じて交通路ができていて、黒潮圏区域と言える。この区域の人々の往来は、日本文化南方起源説と関わっている。長年、日本人学者は、民族学から考古学の資料に至るまで様々な資料を収集し、南方文化が北上したと考えられる経路や痕跡を探し求め、日本（九州）、琉球、台湾の間の関係を明確に説明している。従って、台湾の学者も特に東台湾海域の研究の重要性を提唱している（黄智慧2010）。実は、これらの研究は古くは1930年代末期に行われており、40年代初めの日本統治時代には鹿野忠雄が既にこの説を提唱していた。しかも、彼はフィリピンと台湾の関連を深く掘り下げて研究し、自らバタン群島や蘭嶼、緑島などに調査に赴き、両者の密接な関係を解き明かそうとした。今日では東南アジア考古学会の学者も同じ経路をたどるべく、東台湾海域と黒潮経路を研究テーマに取り組んでいる。

- (4) 近世の歴史上、ヨーロッパ人が東に来たことで引き起こされた世界体系の変化は、貿易システムの面から言えば、オランダ人によって開拓された東アジア交易ルートが、16～17世紀以来、日本（九州）、台湾、インドネシア（バタビア）へと接続されたことである。この磁器を主たる品目とした交易ルートについては、既に多くの日本人学者が研究を行っており、近年では、台湾の考古学者とも共同でこの学術テーマの研究が進められている。これは単純な日台間の学術研究の領域を超えて、世界的な体系にまで広がるものと言えよう。そして、日台双方の学者は既に、資料や学術的議論の往来を通じて、お互いがそれぞれの研究に欠かせない関係となっている。今後

もさらに学术交流と共同研究を進めていき、東アジア、東南アジアに跨る海域の世界史的課題を解明しなければならない。

- (5) 近現代考古学は、最近になってやっと世界各地で考古学論議が始まったばかりである。台湾はと言うと、筆者はかつて台湾の近現代化が始まったのは清朝末期の1885年に劉銘伝^{リウミンツァン}が台北に機器局を建設した時であるべきだと指摘した事がある（劉益昌 2010年）。この時代の歴史研究上、近現代考古学に関して言えば、1895年に台湾が日本の殖民地となって劉銘伝の近代化の過程を引き継ぎ、鉄道、道路を敷設し、港を建設し、山林原野を開拓し、水道などのインフラを整備することによって、台湾の近代化の第一段階が完了した。1920年の街庄（行政区画）改正に至って、さらに台湾の近代化都市計画が実施されることとなった。近年台湾の考古学者の間で、劉銘伝が台北機器局を建設した場所、つまり日本統治時代の台湾の鉄道部の所在地に対して、考古発掘が進められた（劉益昌等 2012年）。それから花岡山遺跡上層の花蓮港小学校に残っている遺跡に対しても詳細な研究がなされはじめた。また日本統治時代初年から台湾に入ってきた日本製陶磁器は第二次世界大戦期間まで日本統治経済を具現していたため全て重要な研究課題となっている（劉益昌、趙金勇^{チウキンユウ} 2010、趙金勇、鍾亦興^{チュンイク} 2012）。この部分は台湾と日本の特別な関係が作り出した研究テーマである。

当然、上記の5つの課題のほかに考古学上まだ多くの共同で考察しうる研究課題がある。例えば遺跡の保存、保護、或いは、遺跡を国民教育の基本素材とすること、そして、遺跡を通して国民に国家意識を持たせるなどは日本の考古学界では早くからよく議論されているテーマであるが、台湾では政治的な問題からこのテーマについてはほとんど考えられたことがない（劉益昌 2006）。将来的には、日本では既に解明された課題も多くなっているはずである。それらが提供されれば、台湾学术界や国の文物資料行政にとって大いに学ぶところとなるだろう。

【参考文献】

- 大浜永亘 1999 『八重山の考古学』 沖縄：先島文化研究所
- 王淑津、劉益昌 2010 「大盆坑遺址出土十二至十四世紀中国陶瓷」 『福建文博』 2010：45-61.
- 木下尚子 2011 「国分直一がのこしたもの」 『全方位的民族考古学者国分直一国際学術研討会議事手冊』：87-98、国立台湾大学主辦、2011.9.22.
- 木下尚子編 2009 『13～14世紀の琉球と福建』 熊本：熊本大学文学部
- 白木原和美 1990 『台湾島東海岸先史学資料集』 熊本：熊本大学
- 米沢容一 1984 「台湾、蘭嶼の考古学の踏査（一）」 『えとのす』 23：110-116.
- 1985 「チチブチブノイナボとヤミ族」 『えとのす』 26：143-148.
- 1986 「台湾、蘭嶼の考古学の踏査（一）」 『えとのす』 30：148-149.

- 宋文薰 1976 「台湾東海岸の巨石文化」『えとのす』6:145-156.
- 1987 「台湾出土の玦形耳飾り」『東南アジア考古学会会報』7:15-17.
- 宋文薰、高宮広衛、連照美 2002 「澎湖考古調査」『歴史文物月刊』108:37-49、台北:国立歴史博物館
- 佐々孝 1984 「台湾見聞録-民族考古の旅」『東南アジア考古学会会報』5:10-13.
- 李光周 1985 「對於台湾考古研究的若干認識」『台湾文献』36 (3/4):15-23.
- 尾崎秀真 1926 「台湾歴史の博物学的研究」『台湾時報』第8号:51-72.
- 林朝榮 1960 「台湾西南部之貝塚与其地史学意義」『国立台湾大学考古人類学刊』15/16:49-94.
- 坪井正五郎 1897 「鳥居龍藏氏よりの通信」『東京人類学会雑誌』13 (141):116-118.
- 東京帝国大学編 1928 「台湾」『日本石器時代地名表』:536-544、岡院書刊第五版、東京:東京帝国大学
- 坪井清足 1986a 『埋蔵文化財と考古学』東京:平凡社
- 1986b 『古代遺跡-ある考古学徒の回想』東京:草風館
- 金子エリカ 1978 「台湾東海岸の先史巨石遺跡再考(一)」『えとのす』10:165-170.
- 1979 「台湾東海岸の先史巨石遺跡再考(二)」『えとのす』11:150-154.
- 金関丈夫 1943 「台湾先史時代に於ける北方文化の影響」『台湾文化論叢』第一輯:1-16、台北:清水書店
- 金関丈夫、国分直一 1954 「台湾先史考古学における近年の工作」『民族学研究』18 (1/2):67-80、日本民族学会
- 1979 「台湾考古誌」東京:法政大学出版局
- 金関丈夫、国分直一原著、陳奇祿、宋文薰訳 1950 「台湾考古学研究簡史」『台湾文化』6(1):9-16.
- 金関丈夫、国分直一原著、張樑標訳 1949 「台湾先史時代靴形石器考」『人文科学論叢』第一輯:73-100.
- 金関丈夫、国分直一原著、譚繼山訳 1990 『台湾考古誌』台北:武陵出版社
- 宮本延人 1931 「花蓮港花岡山の遺跡」『南方土俗』1(1):63-74.
- 1939 「台湾先史時代概説」『人類学先史学講座』10:1-57、東京:雄山閣発行
- 1963 「台湾の南端墾丁寮石棺群遺跡」『東海大学紀要』文学部 第4輯:25-42.
- 宮本延人口述、宋文薰、連照美翻譯・編輯 1998 『宮本延人口述:我的台湾紀行』台北:南天書局出版社
- 宮原敦 1919 「台湾台北圓山に於ける巨大なる砥石並に貝塚に就て」『人類学雑誌』34(4):113-124.
- 高宮広衛、宋文薰 1999 「台湾台東麻竹嶺遺跡採集の狭刃型石斧二例」『南島文化』21:1-10、琉球:沖縄国際
大学南島文化研究所
- 高宮広衛、宋文薰、連照美 2001 「澎湖群島の考古調査」『南島文化』23:93-111、琉球:沖縄国際大学南島文化
研究所
- 高宮広衛、宋文薰、劉益昌 1998 「台湾中部南投県における先史遺跡の調査」『南島文化』20:1-24、琉球:沖縄
国際大学南島文化研究所
- 黄智慧 2010 「東台湾海」文化圏の視点から見た与那国の島際関係史『与那国町史第二巻民族編』:34-51、与那
国町史編纂委員会事務局編、沖縄:与那国町役場
- 後藤雅彦、邱鴻霖訳 2008 「從沖縄考古学的現状看与台湾考古学的接点」『考古人類学刊』68:137-148.

- 移川子之藏 1934 「バツ」を繞る太平洋文化交渉問題と台湾発見の類似石器『台北帝国大学文政学部史学科研究年報』第二輯：431-449、台北：台北帝国大学
- 移川子之藏、馬淵東一、宮本延人 1935 『台湾高砂族系統所属の研究』台湾總督府編、台北帝国大学土俗人種学研究室調査、東京：刀江書院
- 国分直一 1941 「台湾南部に於ける先史遺跡とその遺物」『南方民族』6(3)：45-62.
1942 「澎湖島良文港に於ける先民遺跡に就いて」『南方民族』6(4)：50-56.
1943 「有肩石斧、有段石斧及び黒陶文化」『台湾文化論叢』第一輯17-45、台北：清水書店
1951 「戦後台湾における史学民族学界一主として中国内地系学者の動きについて」『東洋史研究』11(2)：160-171.
1981 『台湾考古民族誌』東京：慶友社発行
1999 「台湾先史考古学の一世紀」『先史学、考古学論究Ⅲ白木原和美先生古稀記念呈獻論文集』：355-376.
2011 『日本民俗文化誌 古層とその周辺を探る』台北：国立台湾大学図書館。
- 張光直編 1977 『台湾省濁水溪与大肚河流域考古調査報告』中央研究院歷史語言研究所專刊之七十、台北：中央研究院歷史語言研究所
- 張衡訳、坪井清足原著 1954 「鳳鼻頭＝台湾南部出土彩文赤陶与黒陶之一史前遺址」『公論報：台湾風土』182期、8月2日
- 鹿野忠雄 1929 「台湾石器時代遺物発見地名表（一）」『史前学雑誌』1(5)401-404.
1944 「台湾先史時代の文化層」『学海』1(6).
1946 『東南亜細亞民俗学先史学研究 第Ⅰ巻』東京：矢島書房
1952 『東南亜細亞民俗学先史学研究 第Ⅱ巻』東京：矢島書房
- 鹿野忠雄原著・宋文薰訳 1975 『台湾考古学民俗学概観』台北：台湾省文献委員会
- 森丑之助 1902 「台湾に於ける石器時代遺跡に就て」『東京人類学会雑誌』18(201)：89-95.
1911 「台湾に於ける石器時代遺跡に就て（上）（中）（下）」『台湾時報』第19号：17-19 20号：7-10 21号：23-25.
- 劉茂源 1971 「台南県国母山遺址試掘予報」『中国民族学通訊』12：13.
- 劉益昌 1994 『鳳鼻頭遺跡的範圍与文化』鳳山：高雄県政府
2004 「世変与伝承 史語所在台湾考古学研究」『中央研究院歷史語言研究所七十五周年記念文集』73-88, 南港：中央研究院歷史語言研究所
2006 「台湾考古学与原住民研究」『国立台湾大学考古人類学刊』66：70-93
2010 『台湾全志住民志 考古編』南港：国史館台湾文献館
2011 「台湾考古学における近年の研究概要」『東南アジア考古学会会報』31：1-16
- 劉益昌、坂井隆、劉俊昱（劉益昌等 2012）
2012 『台北捷運松山線G14北門站新設A出入口搶救考古發掘計画期末報告書』日本企業・前田建設工業株式会社台湾支社の委託による研究報告。

劉益昌、許勝発、陳政勳、朱宏建（劉益昌等 2010）

2010『国定遺跡鳳鼻頭文化内涵暨生態環境調查研究計画報告書』高雄県政府文化局の委託を受けた台湾打里摺文化協会による研究報告

楊南郡訳注、山崎柄根著 1998『鹿野忠雄：縦横台湾山林の博物学者』台中：晨星出版社

Kokubu, Naoichi 1996 Prehistoric archaeology in Taiwan during the Japanese occupation in retrospect, 『台湾考古百年記念検討会以論文及工作報告』：3-5 中央研究院歴史語言研究所

Tsuboi, Kiyotari 1956 Feng-pi-tou : A Prehistoric Site in South Formosa That Yielded Painted band Black Pottery, proceeding of the Fourth Far-Eastern Prehistory and the Anthropology Division of English Pacific Science Congress Combined : 277-302

【註】

- 1：1964年張光直がアメリカから台湾に戻り、エール大学人類学部副教授として、台湾大学考古人類学部副教授宋文薰と協力して「台湾先史文化史研究計画」を進め、集落考古学、生態考古学、文化生態学及び当時のアメリカ考古学界の新しい視点を持ち帰って、台湾考古界が新しい方向へ向かうように促した。1972-74年張光直は再び台湾に戻りエール大学、台湾大学や中央研究院の共同研究として、「台湾省濁水大肚兩河流域自然及び文化史研究計画」を進めた。この主な目標は濁大兩河川流域に古くから住む住民の歴史やそれと自然環境との関係の研究である（張光直1977）。この計画と前述の「台湾先史文化史研究計画」によって、台湾考古学研究の方向性が変わり、また戦後アメリカで人類学を学ぶ第二陣の考古学者が育てられた。これらの計画が今日の台湾考古学に与えた影響は大きく、本来の二大伝統に大きな変化を生ぜしめ今の新しい研究の方向性と伝統を生み出した。
- 2：本稿は当時、陳奇祿と宋文薰による中国語訳の形で発表された。1979年、国分直一によってその中国語訳が日本語に訳し直され、さらに追記部分が合わされて、『台湾考古誌』に収録された（金関丈夫、国分直一1979）。
- 3：台湾考古学研究では、1925年鹿野忠雄が台湾台北高校の理系に入学し、すぐ山地の地形、動植物、原住民及び考古学遺跡調査を始めた。通称「蕃通」と呼ばれた森丑之助が1926年台湾から日本への帰航の途上で投身自殺した。同年鳥居龍蔵が『台湾の巨大石造物』を発表、これは鳥居龍蔵台湾考古学における最後の著作となった。以上のことから、1926年を以って区分することがさらに適当と言える。
- 4：『東京人類学会雑誌』の記録では坪井正五郎が提出したとあるが、これは鳥居龍蔵が当時の東京人類学会会長だった坪井正五郎に宛てた手紙だった。
- 5：金関丈夫は当時台北帝国大学医学部第二解剖室教室講座教授であった。考古学者ではなかったが、民俗学、考古学共に造詣が深く、国分直一はその学問に対する考え方の影響を深く受けて、終生彼に師事した。
- 6：現在の解釈ではこの大陸区域はおそらくアジア大陸東南沿海部、即ち現在の中国の浙江省南部、福建省、広東省、及び広西省の一部の武夷山・五嶺以南を指している。
- 7：金関丈夫、国分直一「台湾先史考古学における近年の工作」『台湾考古誌』（東京・法政大学1979：48頁）。

- 原文は『民族学研究』18巻1-2号（1954）に発表。また、中国語訳に、譚繼山^{タンゼンサン}訳 陳昱^{チンイク}校訂『台湾考古誌』（台北・武陵出版有限公司1990：78頁）。
- 8：国分直一「靴形石器追考」『台湾考古誌』東京・法政大学1979年：234頁～235頁。中国語訳に、譚繼^{タンゼン}訳 陳昱^{チンイク}校訂『台湾考古誌』（台北・武陵出版有限公司1990：257頁）。本稿では中国語訳から引用した。
- 9：国分直一は当時來台した饒宗頤と会っている（国分直一 1981：8頁）。
- 10：この時期、国分氏はプライベートの時間を利用して來台しては、考古調査や発掘を続けていた。ただ、台湾の法律では外国人が無断で発掘調査や遺物を採取することは禁じられており、一度は台湾省政府もこの事態を問題視したが、1969年、省政府が中央政府に特別に遺物採集に限りて許可を求めたという公報が載せられた（劉茂源1996）そのため、それ以後の国分氏の訪台は通常学術訪問の形で行われた。
- 11：筆者は1990年代中期から鳳鼻頭遺跡の研究を始めたが、初期の段階では、坪井清足が1986年に既に1956年の会議の論文を再度発表されていたことは知らなかった。そのため1994年に筆者が発表した「鳳鼻頭遺跡の範囲と文化」（劉益昌1994）には、それが引用されていない。そして、近年になって新たに完成した調査報告書「国定遺跡鳳鼻頭遺跡文化と生態環境調査研究計画報告」においてようやくこの重要な著作を引用するに至った。
- 12：『東南アジア考古学会会報』第3号：1頁
- 13：『東南アジア考古学会会報』第6号：17-19頁
- 14：この考えを国分直一は1940年前後から持っていたようだ。戦後台湾大学で「台湾先史時代概論」の教鞭を執っている時、教学資料として提出した（林朝榮^{リンチャウヤウ} 1960 宋文薰のノートから引用）。

日本語訳：澤田媛薫

訳文校訂者：坂井隆（考古学者、台湾大学芸術史研究所准教授）

白井進（日中翻訳者、台湾大学歴史学研究所修士課程修了）

西都市石貫出土の横矧板鋌留短甲

吉 村 和 昭

1 はじめに

宮崎県立西都原考古博物館に西都市‘名貫’出土という古墳時代の短甲片が保管されている。この資料は考古博物館の設立前、同地にあった宮崎県総合博物館西都原資料館から移管されたものである。

この資料は、『宮崎県総合博物館 西都原資料館収蔵品目録』の「4. 古墳関係資料目録」に132番「短甲破片／出土地・採集地：西都市大字三宅名貫／数量：1／収蔵経緯：（西都市）／登録番号：L51」として掲載されている（宮崎県総合博物館1982 20頁）。出土地・採集地が大字三宅名貫と記されているが、大字三宅には名貫という小字は存在しない。これは以下に記す通り、大字三宅石貫のことであり、この記載はおそらく出版時の校正漏れなどに起因するものであろう。

この短甲片の収蔵経緯について、宮崎県総合博物館に保管されている目録類を調べると、西都原資料館開館時に、西都市が所蔵資料を寄託するに際して作成した『（寄託契約書別添目録）西都原資料館寄託資料目録』（昭和43年3月1日付）という目録があり、ここには「51. 鎧破片／数量：10／西都市大字三宅石貫部落」と記されている（西都市1968）。さらに宮崎県総合博物館で作成した「寄託考古資料台帳」（44.4起）をみると、台帳番号51に「考古－古墳／武器／鎧破片／10／西都市石貫部落／寄託／西都市／昭和43年3月1日」と記録されている（宮崎県総合博物館1969起）。

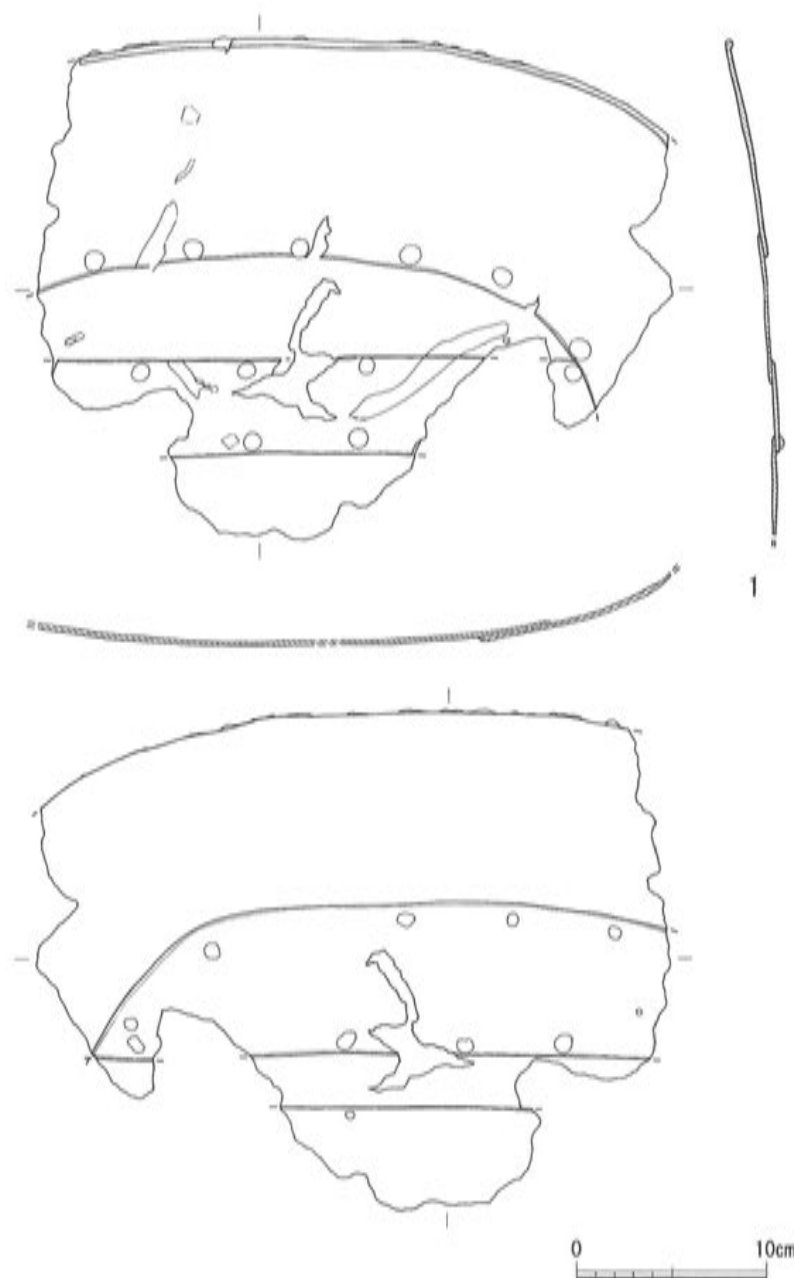
以上がこの短甲片の出土地・採集地と収蔵経緯に関する資料である。これらにより、短甲片が西都市大字三宅石貫で発見されたこと、その破片数が10点であることがわかる。

筆者がこの資料に接した際には、「L51?52 鎧破片、柄頭」の紙片とともに、短甲片と刀剣片（L52）がコンテナに収められていた。短甲片はいずれも同一個体である横矧板鋌留短甲のものであった。

2 短甲片の検討

横矧板鋌留短甲であるこれらの破片は、検討の結果そのいくつかが接合し、6片（うち2片は錆着）となった。以下、破片それぞれについて詳述する。なお、このたび本資料の検討にあたっては三次元レーザー計測を実施した¹⁾。実測図はそのデータを基本とし、肉眼観察による検証を加えた上で作成した。さらに、それぞれの破片の位置関係も、三次元データ上における検討を踏まえて決定した。

1（第1図）は後胴中央上半部、押付板から長側第1段までの破片であり、タテ26.4cm、ヨコ33.5cmを計る。押付板は左側の約3分の1と、右側の外縁が脇に向かい大きく下降する付近から欠損する。後胴中央部での上下幅は11.5cmである。覆輪は鉄折り返しである。下縁の鋌の心々間距離は5.6cmを計る。竪上第2段（地板）は幅8.1cmである。内面を観察すると、鉄板が外観と相似した形状に截断されている状況が看取できる。竪上第3段の帯金は幅4.9cmを計る。上端で4本、下端で2本の鋌が残存する。その心々間距離は上端5.6～6.2cm、下端5.6cmとなり、竪上第3段の使用鋌数は上下とも6乃至7本と推定される。なお、鋌頭径は1.0cmである（以下の破片においても同様である）。図示したように外面に所々ワタガミ緒が遺存している。竪上第2段の左端部にはワタガミ緒を固定する革紐が遺存する。X線写真では、左右両端に斜めに配置される2孔一対のワタガミ緒孔が認められる。



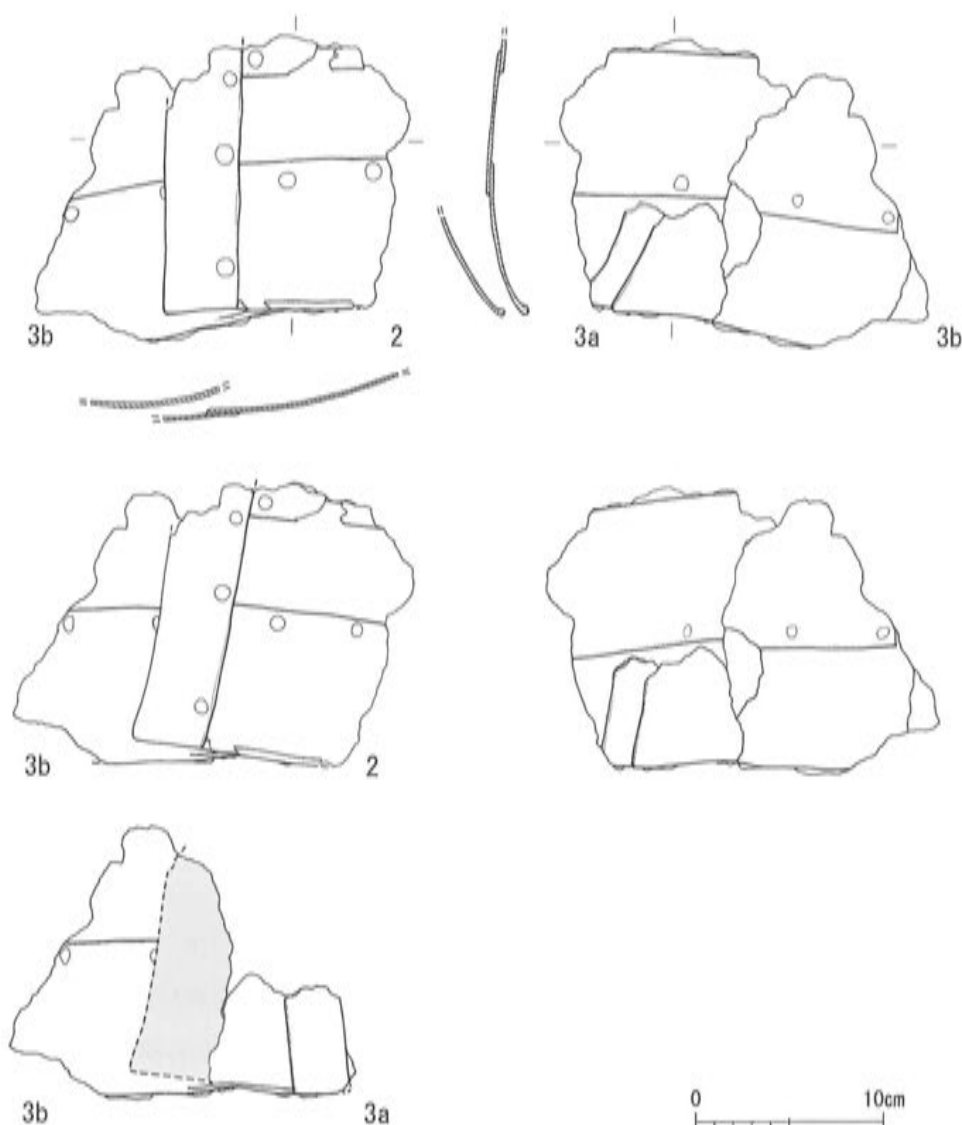
第1図 短甲破片実測図(1) (S=1/4)

いる。タテ14.5cm、ヨコ18.1cmを計る。aはbと接合するが、表面の観察が不可能となるのであえて接着しないままとしている。bは長側第3段と裾板からなる。覆輪（鉄折り返し）が遺存する。aは裾板と蝶番板の破片である。裾板下縁には覆輪（鉄折り返し）が遺存する。蝶番板は幅3.6cmで、前胴側の蝶番板よりやや幅が狭い。下縁に覆輪を施さない。なお、後胴側の蝶番金具は残存範囲外に装着されていたと推定される。第2図中段の図（外・内面）は3を正面にして実測したもの、さらに下段は破片2を除去した図である（網掛は錆着で不明部分）。

4（第3図-4）は前胴・後胴の左脇連接部上半にあたる。豎上第1段（押付板）・長側第1段（地板）・同第2段（帯金）からなるタテ9.5cm、ヨコ14.0cmの破片である。押付板と長側第2段帯金の接続位置は左脇中央部の同じラインにある。一方、長側第1段の接続位置はこれらより2.4cm後胴寄りとなっている。各

2（第2図-2）は右前胴右脇下半の破片である。タテ14.6cm、ヨコ13.5cmを計る。内面に3b（同図-3b）が錆着している。第2図上段の図（外・内面とも）は破片2を正面において実測したものである。長側第2段（帯金）下半から同第4段（裾板）と蝶番板からなる。長側第3段（地板）の上下幅は7.6cmを計る。裾板の高さは8.0cmであり、覆輪は押付板同様、鉄折り返しである。なお、蝶番板下縁は折り返さない。蝶番板は幅3.9cmを計る。蝶番金具は遺存していない。2段に蝶番金具が配されるとして、その下段の1枚は蝶番板破片上に存在する可能性が高い。この部分またこれに近接する前胴長側第3段においてその痕跡を探ったものの、X線写真においても判然としなかった。なお、内面については、破片3bとの錆着のため、観察不可能な部分がある。

3（第2図-3a・b）は後胴右脇長側第3段（地板）・第4段（裾板）の破片である。a・b 2片からなり、bは2の内面に錆着して

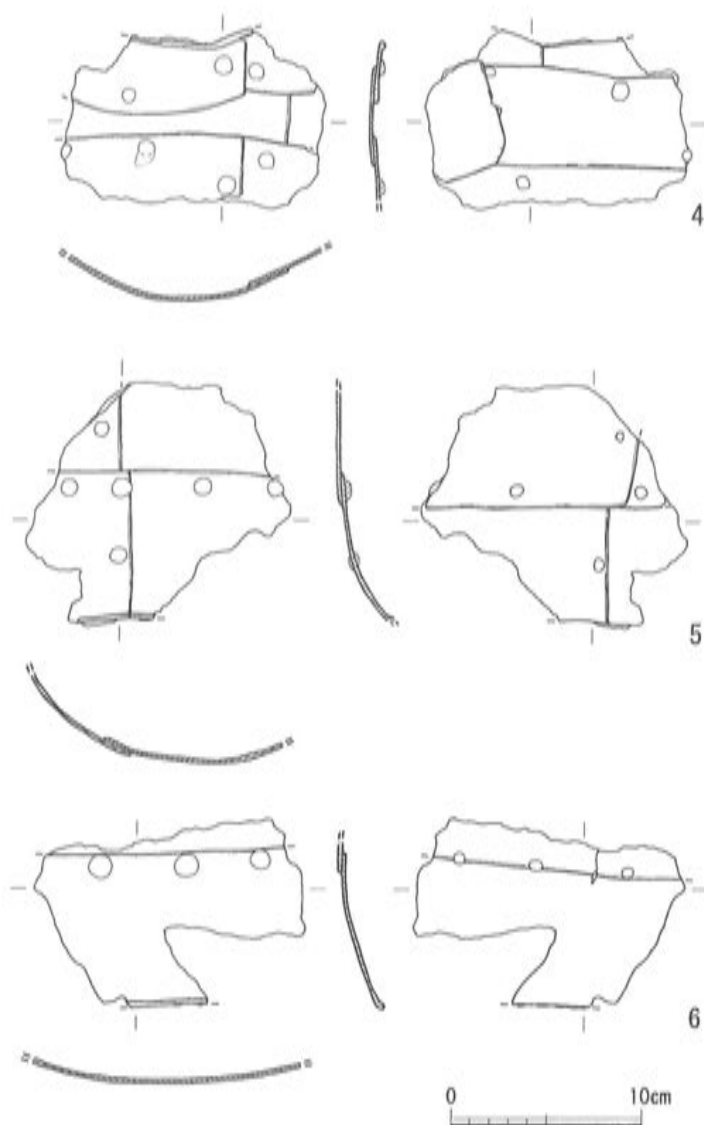


第2図 短甲破片実測図(2) (S=1/4)

段後胴の鉄板が前胴側の鉄板の内側に重なる通有のあり方を示している。押付板は比較的その幅が狭く(最大4.0cm)、前後の接続も1釘である。長側第2段の帯金は下半を欠失しており、その幅は不明である。

5(第3図-5)は4の下方の位置、前胴・後胴の左脇接続位置下半の破片である。タテ12.9cm、ヨコ14.0cmを計る。ただし、両破片には接点がない。長側第3段(地板)・第4段(裾板)の破片である。前・後胴の各段での接続は、破片4同様、後胴側の鉄板が前胴側の内重ねとなる通有のあり方を示す。裾板は4との位置関係では、やや後寄りと推定される。釘が長側第3段に1ヶ所、裾板上辺の長側第3段(地板)との接続位置に4ヶ所(後胴寄り3釘の心々間距離4.0cm、前胴側2釘間2.6cm)、さらに裾板同士の接続にも認められる。下縁には覆輪(鉄折り返し)が遺存する。

6(第3図-6)は長側第3段(地板)と第4段(裾板)の破片で、タテ10.0cm、ヨコ14.3cmを計る。第3段は上半を欠失している。裾板は水平方向の曲率が緩い。裾板上辺に3釘が認められる。その心々間距離は4.0~4.3cmである。下縁の覆輪(鉄折り返し)は長さ4cmの範囲のみ遺存する。この破片の位置は後胴中央付近と推定される。その根拠は次章において詳述する。



第3図 短甲破片実測図(3) (S=1/4)

右側接点、豎上第3段帯金の位置と幅などが一致した⁴⁾。もちろん垂直・水平両方向の線も一致した。そのため、これ以外の破片も同様に三次元データ上で位置合わせをおこなった。その結果が第4図である(薄色の短甲が比較のベースとした短甲(六野原古墳群出土か)、濃色の破片が本資料である)。第4図は4方向の図で示しているが、いずれの破片も三次元データ上での位置決定であり、平面的な一致だけでなく、垂直・水平方向の一致を重視した。左脇下半の破片である5の位置が上半の破片4の直下ではなく後胴側に寄ることも水平方向の曲率の一致が大きな根拠である(ベースとした短甲も裾板連接位置が一致している)。さらに、小さな裾板破片6の後胴中央への位置づけも、水平方向の曲率の一致が根拠である。前胴裾板の可能性も検討したが、前胴は曲率が高く、この破片と整合しなかった。さらに両側に位置する破片5と後胴右脇破片3に挟まれる微妙な位置関係は、三者の破片を通じて鉾の心々間距離がほぼ同様となる位置を選択した。

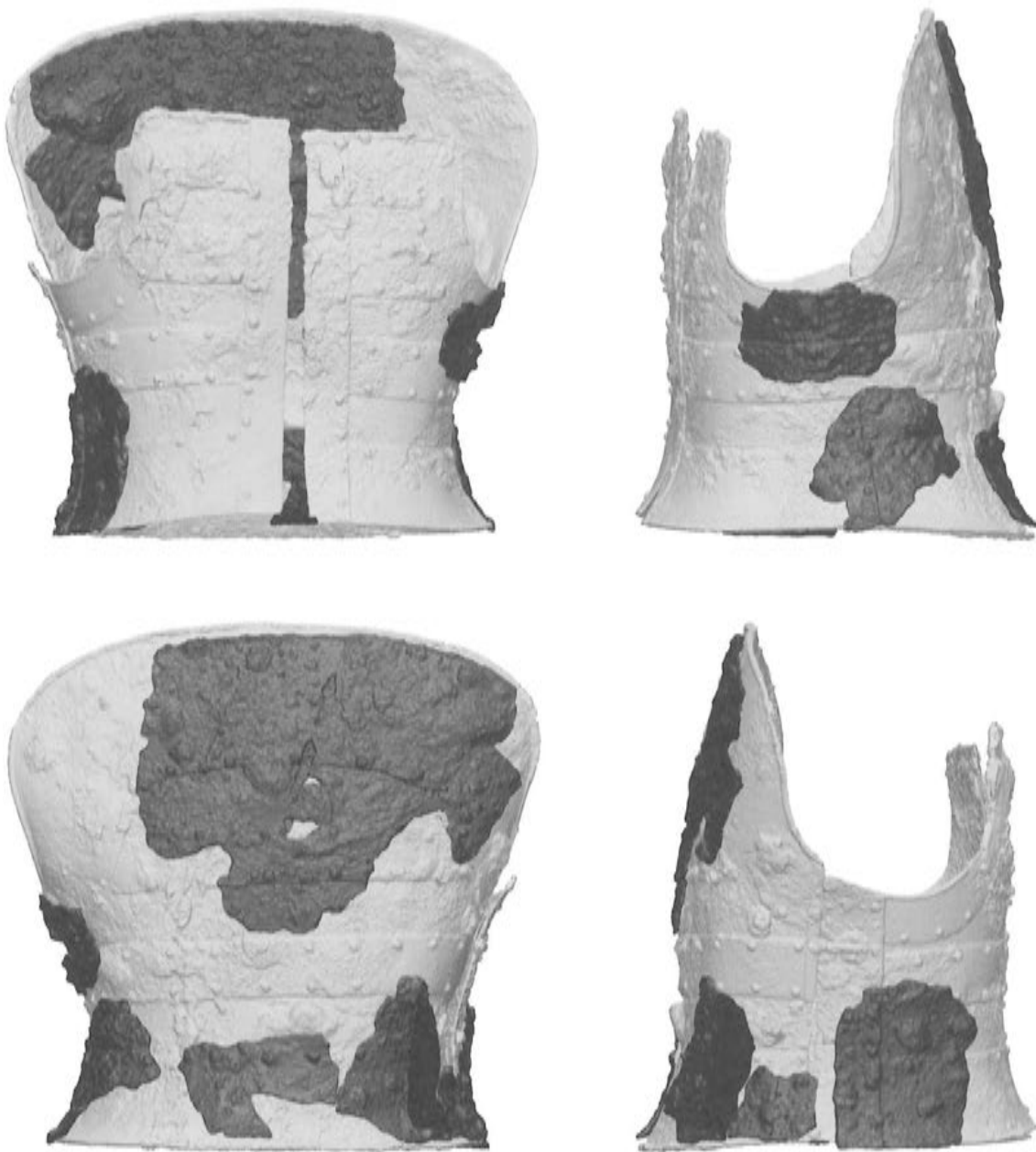
上記のプロセスを経て、全体像を復元したのが第5図である。豎上3段、長側4段の7段構成、右前胴開閉式の横矧板鉾留短甲である。蝶番金具は不明である。なお、復元図では前胴7段で表現している

3 構造の復元的検討

前章での観察結果を踏まえ、短甲の構造的な復元をおこなう。復元にあたっては三次元データを計測した利点を生かし、1領の短甲を構成するそれぞれの破片が、三次元的にもっとも確からしい位置となるよう、検討を重ねた上で配置を決定した。

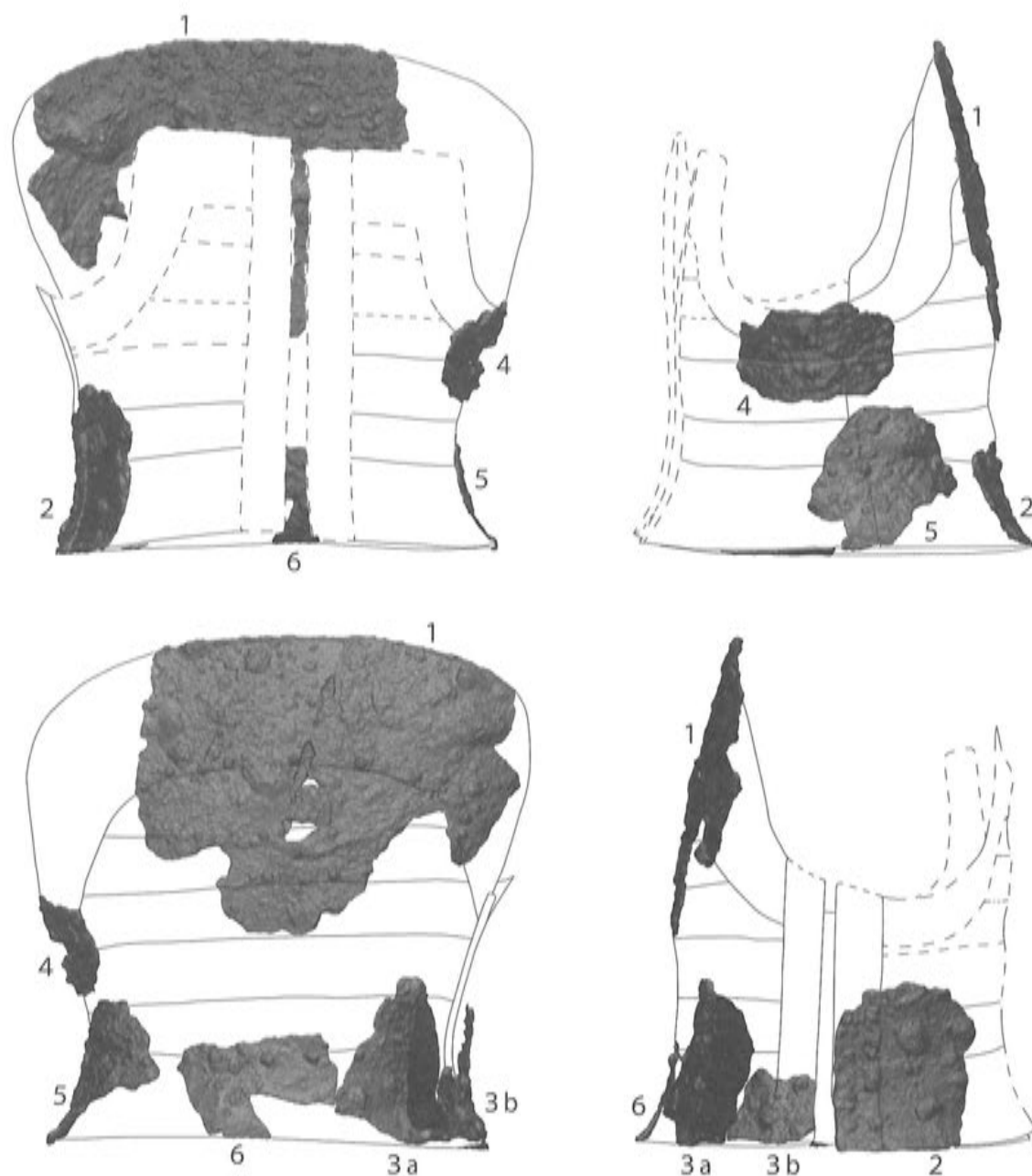
具体的には、これまでに蓄積した完形品の、あるいは完形に近い短甲、とりわけ横矧板鉾留短甲の三次元データ²⁾を参照し、もっとも類似したデータを選び、これをベースに位置関係の復元をおこなった。

まず、もっとも大きな破片である破片1(後胴押付板~長側第1段)を代表として既存の三次元データとの比較をおこなった。この部位は短甲ごとに特徴の相違が比較的現れやすい。その結果、宮崎県東諸県郡六野原古墳群出土かとされる横矧板鉾留短甲(瀬之口・石川1944)³⁾がもっとも類似した様相を示した。例示すると、押付板下辺の曲線、押付板と豎上第3段帯金上辺の



第4図 類似した短甲の3次元データ（薄色）上での各破片の位置検討（S=1/4）

が、前胴はほとんど遺存していないので、前胴6段の可能性も残されている。帯金は上下幅があきらかなのは後胴縦上第3段のみ（破片1）であるが、4cmを超える幅広のものである。そこでの使用鉾数は上・下段とも6乃至7鉾と1桁であり、さらに使用される鉾の鉾頭径は1.0cmと大きい。したがって、この横矧板鉾留短甲は5世紀後葉・末の少鉾式（吉村1988）に属するものである。そのほか特徴的な点は、蝶番板が前胴側だけでなく後胴にも装着されていることである。蝶番板の両側使用は5世紀中葉を前後する時期に集中する（田中1978 37頁）が、その後、全くなる訳ではなく、少鉾式段階の横矧板鉾留短甲にも認められることはすでに指摘したところである（吉村1988 36頁）。類例には奈良県宇陀市池殿奥5号墳前方部南棺出土例（井上・仲編1988）、京都府宇治市二子山古墳南墳2号短甲（杉本



第5図 西都市石貫出土横矧板鉾留短甲復元図 (S=1/4)

編1991)、福岡県朝倉市小田茶臼塚古墳出土例 (柳田1979)、同県八女市真浄寺2号墳出土のうち釣壺3
鉾留番金具のもの (岩崎1960・横田編1982) などが挙げられる。

4 出土地について

この短甲の出土地について、「西都市大字三宅石貫部落」を超える情報は持ち合わせていない。不時
発見とすれば、地下式横穴墓からの可能性が高いようにも思われるが、特定できていない。

この資料が西都市の目録に記録された昭和43 (1968) 年以前の石貫における古墳 (地下式横穴墓) の
発見・発掘情報について、石川恒太郎氏は『地下式古墳の研究』 (石川1973) の中で、「昭和36年10月か

ら39年2月までに、同市石貫で7基の地下式古墳が発見されたが、42年にさらに3基、43年に1基が発見されたから・・・」（石川1973 15頁）と記し、その出典を「昭和39年2月21日付け西日本新聞宮崎版、その他。」と挙げている（同 195頁）。現在、宮崎県立西都原考古博物館には、同氏のスクラップブックが保管されており、そこには西日本新聞の記事⁹⁾、これと同内容の昭和39年1月22日(水)付け毎日新聞の記事が遺されている。前者には西都市石貫のミカン畑で3基の地下式横穴墓が発見されたこと、昭和36年10月以来、同地で発見された地下式横穴墓が計7基となったこと、日高正晴氏がうち1基を調査中で、土器5点、銅環(耳飾)が発見されたことなどが記されている。後者もほぼ同内容で、土器が杯1、埴1、鉢形の土師器1などであることが書かれている。記事からみて、発見されたのは6世紀代のものであり、ここに5世紀代の短甲が含まれることはまずない。それ以前に発見された地下式横穴墓についても、後者に「一年前に直刀と横瓶が発見された」という記述があるが、これも6世紀以降のものと思われる。なお、42年と43年の発見例についてはまだ調べを進めていない。ところで、現在の石貫という小字は、西都原の台地中段域で稚児ヶ池の北方、石貫神社を中心とした地区である。ただし、茂山護氏のご教示によれば、昭和30、40年代当時、石貫はもっと広く、西都原古墳群がある台地上、高取山方面へ抜ける市道が走る西都原99号墳を中心としたあたりまでも指していたとのことである。とすれば、この短甲の出土古墳(地下式横穴墓)の所在は現在の狭義の石貫に限定せず、台地上も含めた広い範囲で考えておく必要があろう。いずれにせよ、出土地の探求は今後の課題としたい。

5 まとめ

本稿では宮崎県立西都原考古博物館に保管されている横板板鋸留短甲片について検討し、これが少鋸式に属し、5世紀後葉・末の所産であることを論じた。南九州、とくに地下式横穴墓への甲冑副葬は古墳時代中期後葉・末にほぼ限定される(吉村2003)が、本資料は地下式横穴墓、高塚古墳どちらからの出土であるかはあきらかではないものの、同様の範疇に位置づけることができよう。なお、出土地については、調査不足もあり、特定には至らなかった。今後の課題としたい。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、以下の方々に御教示、御指導を賜りました。記して感謝申し上げます。甲斐貴充、小林謙一、茂山 護、永友良典、北郷泰道、粕木郁朗(五十音順・敬称略)。

とりわけ昭和44年4月より西都原資料館の担当者であった茂山護氏には貴重なお話を窺うことができました。ちなみに「寄託考古資料台帳」(44.4起)は茂山氏の筆によるものです。

短甲のクリーニング、接合、X線撮影は嶋田史子さんのお手を煩わせました。挿図、図版の作成にあたっては垣内喜久子さんの援助を得ました。三次元レーザー計測は株式会社アコードに依頼し、同社の嘉納和之氏、田畑徹也氏が計測と編集解析を担当されました。とりわけ嘉納氏には筆者の度重なる要求に応じていただきましたこと、とくに記して感謝申し上げます。

なお、本稿は平成23年度～25年度 科学研究費助成事業(学術研究助成基金助成金) 基盤研究(C)「三次元レーザー計測を利用した古墳時代甲冑製作の復元的研究」(研究代表者:吉村和昭)の成果の一部である。

註

- 1) 計測は平成24年7月25日に実施した。計測にはコニカミノルタ社製 VIVID910を使用した。編集解析には3D Systems社製RapidformXOSを、原図用の下図作成にはアドビ社製PhotoshopCS5、IllustratorCS 5を使用した。なお、PCスペックは、Epson社製Endeavor Pro4700 Windows 7 Professional 64bit (インテルCore i7-880プロセッサ (3.06GHz)/3次キャッシュ: 8 MB, メモリ16GB) である。
- 2) 現在までに筆者が収集している短甲の三次元計測データは宮崎県内出土例に限られる。
- 3) 宮崎県立西都原考古博物館図録『日韓交流展 日韓の武具』に六野原6号墳あるいは1号地下式横穴墓出土横板鋌留短甲①として掲載されている短甲(甲斐編2008 27頁)を指す。なお、この短甲の帰属は、六野原古墳群・地下式横穴墓群出土であるかどうかも含めて再検討中である。
- 4) もっとも完全に一致した訳ではない。たとえば押付板の後胴での高さ・左脇部の幅、覆輪の相違(ベースとした短甲では鉄包覆輪)、裾板がベースとなる短甲では後胴で下方へ延びるが、本資料は全体に高さが変わらない、螺番板の幅が異なるなどの相違点もある。
- 5) 西日本新聞の記事の日付は、石川氏の記述とは異なり、昭和39年1月23日(木)である。

参考文献

- 石川恒太郎 1973『地下式古墳の研究』帝国地方行政学会。
- 井上義光・仲富美子編 1988『野山遺跡群Ⅰ』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第56冊 奈良県立橿原考古学研究所。
- 岩崎 光 1960「八女地方の古墳・終末期と副葬」『九州考古学』第10号 九州考古学会 11頁。
- 甲斐貴充編 2008『日韓交流展 日韓の武具』2008年度日韓交流展展示図録 宮崎県立西都原考古博物館。
- 西都市 1968『西都原資料館寄託資料目録』(寄託契約書別添目録 昭和43年3月1日付)。
- 杉本 宏編 1991『宇治二子山古墳発掘調査報告』宇治市文化財調査報告書第2冊 宇治市教育委員会。
- 瀬之口傳九郎・石川恒太郎 1944「六野原古墳調査報告」『宮崎縣史蹟名勝天然記念物調査報告』第13輯 宮崎縣。
- 田中新史 1978「御嶽山古墳出土の短甲」『考古学雑誌』第64巻第1号 日本考古学会 28-44頁。
- 日高正晴・茂山 護 1975「東立野の地下式九号墳」『宮崎考古』第1号 宮崎考古学会 10-14頁。
- 宮崎県総合博物館 1969 起「寄託考古資料台帳」(44.4起)。
- 宮崎県総合博物館 1982『宮崎県立総合博物館西都原資料館収蔵資料目録』。
- 柳田康雄 1979『小田茶臼塚古墳』甘木市文化財調査報告第4集 甘木市教育委員会。
- 横田義章編 1982『九州歴史資料館 収蔵品目録』1 九州歴史資料館。
- 吉村和昭 1988「短甲系譜試論—鋌留技法導入以後を中心として—」橿原考古学研究所紀要『考古学論攷』第13冊 奈良県立橿原考古学研究所 23-39頁。
- 吉村和昭 2003「地下式横穴墓出土の甲冑」『古代近畿と物流の考古学』学生社 159-168頁。



写真1：破片1
(左：外面、右：内面)

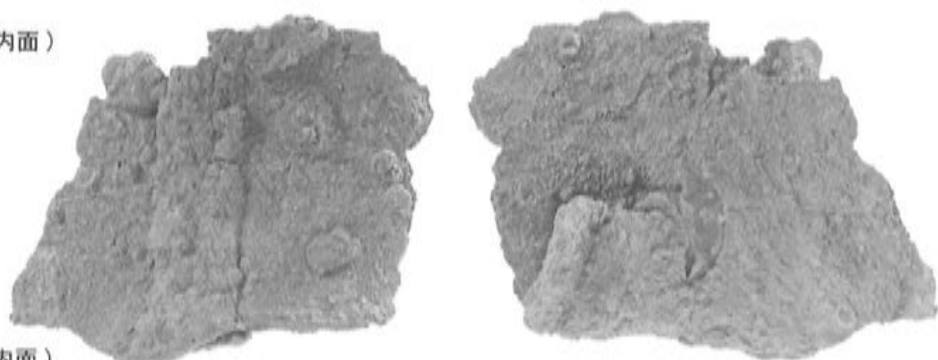


写真2：破片2・3
(左：外面、右：内面)

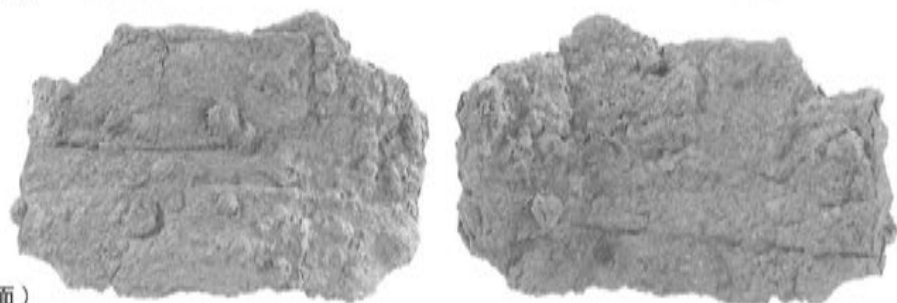


写真3：破片4
(左：外面、右：内面)

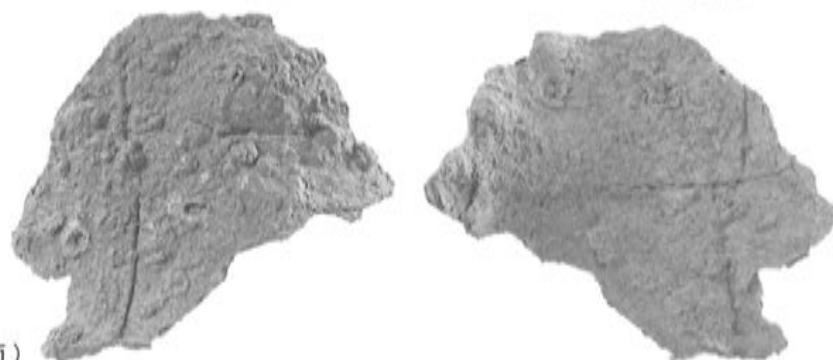


写真4：破片5
(左：外面、右：内面)

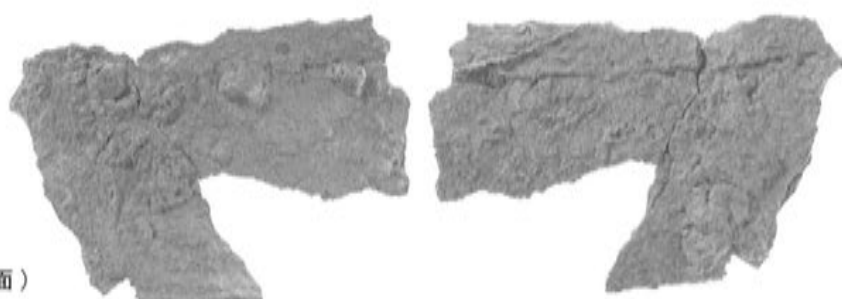


写真5：破片6
(左：外面、右：内面)

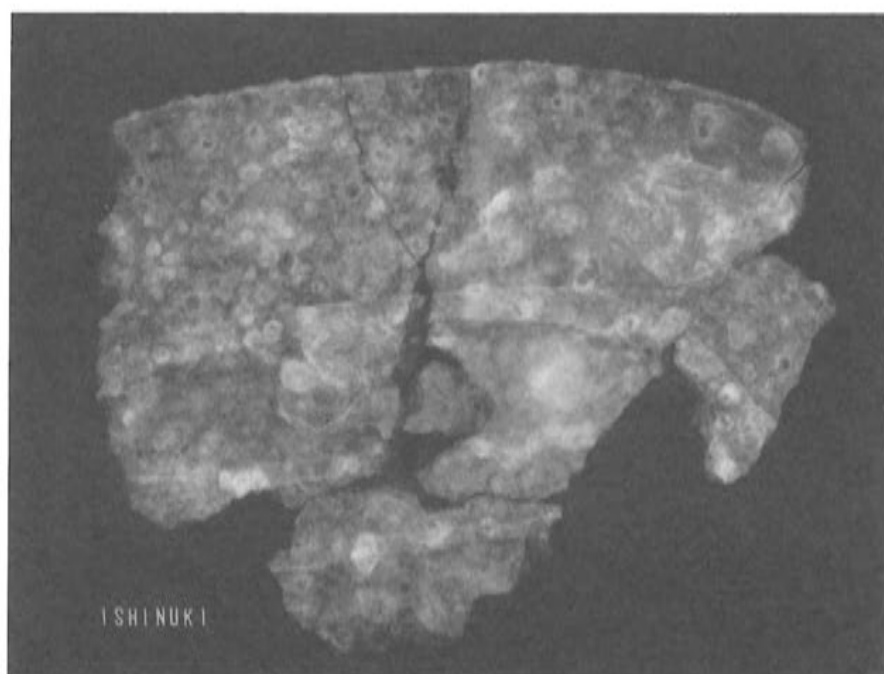


写真6：
破片1 X線写真(合成)

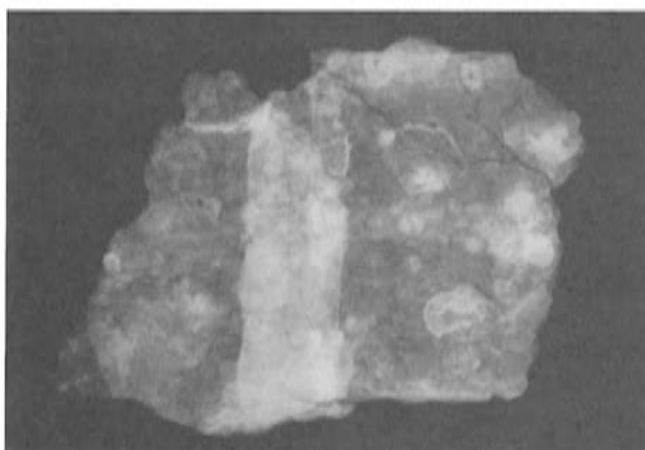


写真7：
破片2・3b X線写真

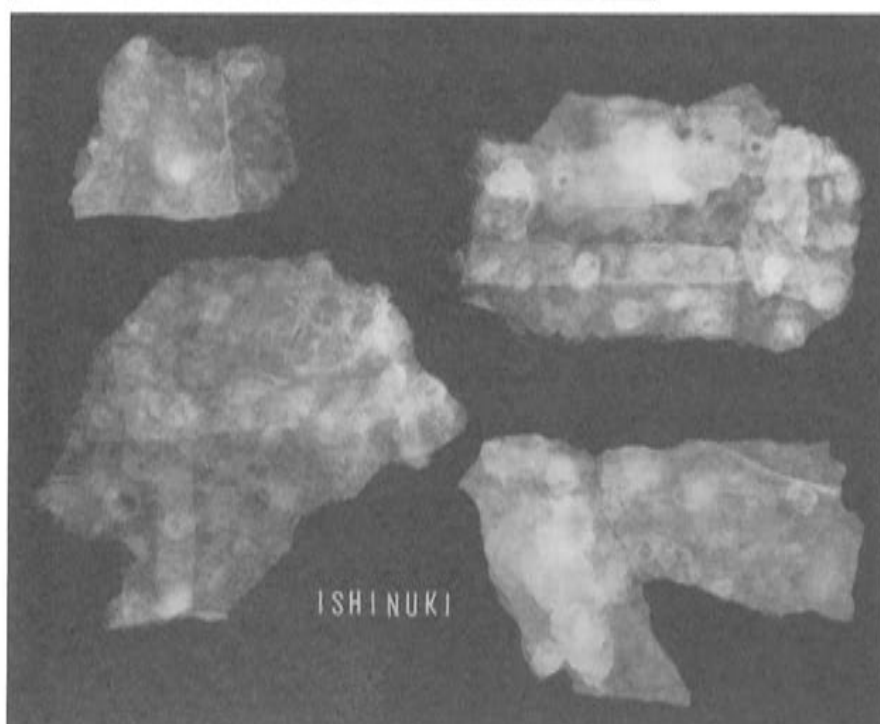


写真8：
破片3a(左上)、4(右上)、
5(左下)、6(右下)
X線写真

西都原古墳群に埋置された「碑石」

—西都原古墳群大正調査の基礎資料（1）—

犬 木 努・近 藤 麻 美

1 はじめに

西都原古墳群では、平成7（1995）年度より、国庫補助事業として保存整備と活用促進を目的とした発掘調査が継続的に実施されている。墳丘および周溝の調査が中心であるが、大正時代に埋葬施設の発掘調査が行われた古墳については、調査坑の内部に限って再発掘が行われている。大正調査の際には、埋葬施設の調査終了後、調査坑内に「碑石」（註1）が埋置されたことが知られている（宮崎県1915b）。これまでに、平成調査では、西都原13号墳・170号墳・171号墳・202号墳において、各1点、合計4点の「碑石」が確認されているが（註2）、上記各古墳の発掘調査報告（石川2001、松林2003・2004、犬木ほか2008・2010）では当該「碑石」の詳細についてはほとんど記述されていないのが現状である。小稿では、各「碑石」についての基礎情報を提示するとともに若干の検討を行うものである。

2 平成調査で検出された「碑石」の概要

（1）西都原170号墳〔旧称：西都原111号墳〕出土の「碑石」（第1・2・9図、写真図版1）

西都原170号墳は、西都原古墳群の北西側に位置する直径約60mの円墳である。大正元（1912）年12月に埋葬施設などの発掘調査（西都原古墳群第1次調査）が実施された（宮崎県1915a）。「碑石」は、平成17（2005）年度に行われた平成の発掘調査において、墳頂部中央に位置する大正時代の調査坑内から検出された（犬木ほか2008）。河原石で周囲および上部を被覆する。蓋石・本体（註3）とも凝灰岩製である。171号墳・202号墳に埋置された「碑石」と同種の石材と思われる。蓋石は縦36.2cm、横24.5cm、厚7.5～9.7cm、本体は縦36.7cm、横24.5cm、厚11.5～13.0cm。蓋石下面および碑面は平滑に仕上げるが、蓋石の側面（四周）・上面および本体の側面（四周）・下面には、粗い整形痕が全面に残る。碑面には8行にわたって合計115文字が刻まれており（第9図）、各文字には朱彩が施される。他の「碑文」に比べて彫りがやや細く浅い。碑面に向かって右側面には、朱筆による「百十一号」という文字が微かに残る。大正調査の報告書（宮崎県1915b）に記載された碑文の内容との相違は次の通りである（註4）。〔2-2〕（碑）冢（報）園、〔3-10、4-11〕（碑）処（報）處、〔3-12〕（碑）樹（報）樹、〔3-15、5-6〕（碑）発（報）發、〔5-1〕（碑）刀（報）一、〔5-2〕（碑）劍（報）劒、〔6-10〕（碑）増（報）増、〔7-4〕（碑）室（報）國、〔7-7〕（碑）館（報）館、〔7-8〕（碑）囁（報）囁、〔7-10〕（碑）関（報）關。

（2）西都原171号墳〔旧称：西都原112号墳〕出土の「碑石」（第3・4・10図、写真図版2）

西都原171号墳は、西都原古墳群の北西側に位置する一辺約30mの方墳である。女狭穂塚古墳のすぐ南西側に隣接し、同古墳の陪塚と考えられる。大正元（1912）年12月に埴輪列などの発掘調査（西都原古墳群第1次調査）が実施された（宮崎県1915a）。「碑石」は、平成11（1999）・12（2000）年度に行われた発掘調査において、墳頂部中央に位置する大正時代の調査坑内から検出された（註5）。河原石で周囲および上部を被覆する。蓋石・本体とも凝灰岩製。170号墳・202号墳に埋置された「碑石」と同種の石材と思われる。蓋石は縦36.4cm、横24.4cm、厚9.0～10.3cm、本体は縦36.2cm、横24.2cm、厚12.2～14.0cm。

蓋石下面および本体上面は平滑に仕上げるが、蓋石の側面（四周）・上面および本体の側面（四周）・下面には、粗い整形痕が全面に残る。碑面には8行にわたって合計119文字が刻まれており（第10図）、各文字には朱彩が施される。大正調査の報告書（宮崎県1915b）に記載された碑文の内容との相違は次の通りである。【4-4】（碑）四（報）四、【4-6】（碑）樹（報）樹、【4-9】（碑）残（報）残、【4-12、5-14】（碑）發（報）發、【5-1】（碑）既（報）既、【5-4】（碑）証（報）痕、【5-17】（碑）ズ（報）ス、【6-7、7-4】（碑）国（報）國、【6-9/13、7-6/10】（碑）学（報）學、【6-15】（碑）師（報）師。

（3）西都原202号墳【旧称：西都原11号墳】出土の「碑石」（第5・6・11図、写真図版3）

西都原202号墳は、西都原古墳群の南側に位置する全長約50mの前方後円墳である。大正元（1912）年12月に埋葬施設などの発掘調査（西都原古墳群第1次調査）が実施された（宮崎県1915a）。「碑石」は、平成23（2011）年度に行われた発掘調査において、後円部墳頂部中央に位置する大正時代の調査坑内に埋置された状況で検出された（註6）。河原石で周囲および上部を被覆する。蓋石・本体とも凝灰岩製。170号墳・171号墳に埋置された「碑石」と同種の石材と思われる。蓋石は縦50.3cm、横27.5cm、厚6.0～8.5cm、本体は縦50.3cm、横27.5cm、厚7.0～9.7cm。蓋石下面および本体上面は平滑に仕上げるが、蓋石の側面（四周）・上面および本体の側面（四周）・下面には、粗い整形痕が全面に残る。碑面には9行にわたって合計149文字が刻まれており（第11図）、各文字には朱彩が施される。碑面に向かって右側面には、朱筆で「十一号」と記されている。大正調査の報告書（宮崎県1915b）に記載された碑文の内容との相違は次の通りである。【2-2】（碑）円（報）圓、【2-10】（碑）凡（報）凡、【2-18】（碑）處（報）處、【2-20】（碑）約（報）一、【3-10】（碑）琬（報）琬、【3-13】（碑）瑠（報）瑠、【4-4】（碑）器（報）器、【4-7、6-6】（碑）發（報）發、【5-15】（碑）處（報）處、【6-3】（碑）器（報）器、【7-7、8-4】（碑）国（報）國、【7-9/13/18、8-6/10】（碑）学（報）學、【7-21】（碑）黒（報）黒。

（4）西都原13号墳【旧称：西都原2号墳】出土の「碑石」（第7・8・12図、写真図版4）

西都原13号墳は、西都原古墳群の南東側に位置する全長約80mの前方後円墳である。大正5（1916）年に埋葬施設などの発掘調査（西都原古墳群第5次調査）が実施された（宮崎県1918）。「碑石」は、平成9（1997）～11（1999）年度から行われた発掘調査において、墳頂部中央に位置する大正時代の調査坑内に埋置された状況で検出された（註7）。河原石で周囲および上部を被覆する。蓋石・本体とも凝灰岩製。なお、同じ凝灰岩でも、170号墳・171号墳・202号墳に埋置された「碑石」と比べてやや軟質で砂質の印象を受ける。蓋石は縦42.0cm、横27.0cm、厚5.5～7.0cm、本体は縦42.0cm、横27.0cm、厚6.0～8.6cm。蓋石下面および本体上面は平滑に仕上げるが、蓋石の側面（四周）・上面および本体の側面（四周）・下面には、粗い整形痕が全面に残る。碑面には11行にわたって合計154文字が刻まれており（第12図）、各文字には朱彩が施される。なお、本碑文については、大正調査の報告書に記載がない。

3 「碑石」についての若干の検討

西都原古墳群の大正調査の報告書は合計3冊刊行され（宮崎県1915a・1917・1918）、その合冊（補訂）本が大正15年に刊行されている（宮崎県1926）。1冊目の報告書には、宮崎県が作成した「調査記録」が収められており、申告祭や復旧工事のほか「碑文」についても詳述されている（宮崎県1915b）。同文献によれば、第1次調査【大正元（1912）年12月～同2（1913）年1月】の終了後、1月9日より

復旧工事に着手し、「埋込ミ碑石、灰石、幅一尺、長一尺二寸、厚サ三寸、刻字ハ更ニ朱ヲ以テ染メ之ヲ発掘地底ニ仰置シ別ニ同形ノ灰石ヲ以テ之ヲ覆フ碑文ハ調査者一行ノ案スル所田村事蹟調査員之ヲ書ス」とある（同前38頁）。小稿で取り上げた各「碑石」の埋置状況・検出状況と一致する。

さらに同文献には、第1次調査の対象となった合計12基の古墳に埋置された「碑石」の碑文が記されている（註8）。小稿で取り上げた4基のうち、西都原170号墳・171号墳・202号墳の「碑石」が該当する。報告書に記載された文面と実際の碑文との異同については前記の通りである。

一方、西都原13号墳については、第5次調査〔大正5（1916）年〕において発掘調査がなされているが、碑文の内容については調査報告書にも記述されていない。第2次～第6次調査については、他の古墳についても「碑石」の記述はないが、大正時代の調査古墳の中には「碑石」が埋置された古墳が多数含まれている可能性がある（註9）。

第1次調査終了時に埋置された「碑石」3点については、調査内容や記述内容の違いにより文字数にも若干の違いがあるが、文字の大きさの使い分けや行頭の下げ方など、碑文としての書式は統一されている。余白や行間の均整もとれており、文案およびレイアウトに適合する寸法の石材を発注したことがうかがえる。なお、報告書（宮崎県1915b）には宮崎県事蹟調査員・田村正一が「之ヲ書ス」とあるが、「碑石」3点の「文字」に見られる微妙な差異は、田村正一の書跡が碑面に転写（あるいは直接墨書）され、刻字される過程で生じたものかも知れない。

それに対して、第5次調査終了時に埋置された「碑石」1点については、前記3点と比べてやや異質な印象を受ける。同じ凝灰岩でもやや石質が異なっている上に、調査者氏名以外の行頭を全て揃えるなど、総じて書式に対する配慮が乏しく、余白や行間もやや狭くバランスを欠く。前記3点の碑文とは明らかに筆跡が異なり、書体はやや弱々しい印象を与える。第5次調査が行われた時点の宮崎県知事は、西都原古墳群の発掘調査を発案・企画・主導した第13代・有吉忠一から第14代・堀内秀太郎に交代している。第1次調査時の碑文からは、西都原古墳群の発掘調査に対する有吉忠一の並々ならぬ意気込みと気概が読み取れる一方、第5次調査時の碑文から、調査開始後5年ほどの間に当初の熱気が早くも失われている状況を読み取ろうとするのはいささか穿ち過ぎかも知れない（註10）。恐らく、石材加工および刻字を担当した石工職人の技量も反映していると思われる。

「碑石」の“評価”はさておき、合計3冊刊行されている大正調査の報告書のうち、第5次調査の内容を纏めた3冊目の報告書（宮崎県1918）は、2冊目の報告書（宮崎県1917）とともに、発掘調査報告書としての構成・内容という点において、1冊目の報告書（宮崎県1915）と比べて、かなり見劣りすると言わざるを得ない。鳥居龍蔵を中心として行われた第2次調査については不明な点が多いので措くとしても、西都原における第1次調査と、第3次以降の調査を“日本最初の古墳の学術調査”として同列に扱うには若干の躊躇を覚えるのである（註11）。

4 おわりに

大正元（1912）年に西都原古墳群の調査が開始されてから100年が経過した。平成7（1995）年以降、西都原古墳群の発掘調査が“再開”され、多大な成果を上げている。大正調査の出土品についても地道な調査研究が少しずつ進められているが（石川1988、高橋1993、古谷ほか2005、犬木2007、犬木ほか

2008・2010、犬木・近藤・金行2011、犬木・近藤2012、犬木2012など）、さらに本格的・総合的な検討作業は今後の課題として残されている。また、西都原古墳群の大正調査を、文化財行政草創期の事例として近代史の中に正しく位置づける作業についても、近年ようやく緒に就いたばかりである。

小稿は、西都原古墳群において検出されている4点の「碑石」について基礎情報を提示したに過ぎないが、これらの「碑石」は、西都原古墳群の発掘調査が構想され実行された、明治後期から大正初期という時代の空気を伝えてくれるという意味において、紛れもなく近代史の“文化遺産”である。次の100年間を見据えて、これらの「碑石」が有効に活用されていくことを祈念する。

謝辞 「碑石」の調査に際して、宮崎県立西都原考古博物館の福田泰典氏、甲斐貴充氏、藤木 聡氏のご高配を得ました。なかでも藤木氏には、西都原202号墳や西都原284号墳〔旧「無号B塚」〕の調査状況についてご教示いただいたほか、西都原170号墳や西都原13号墳の調査についても貴重な情報を提供していただきました。心より感謝申し上げます。

付記 「碑石」の図面（断面図・拓本）は今回新たに作成し、掲載写真も新たに撮影した。「碑石」の断面実測は犬木・近藤、拓本採取は犬木・近藤、写真撮影は近藤の協力を得て犬木が行った。また、「碑石」断面図のトレースは近藤、挿図の版組は近藤の協力を得て犬木が行った。本文の執筆は、1・3・4を犬木、2を犬木・近藤が行った。本稿は、平成24年度大阪大谷大学特別研究費による研究成果の一部を含む。

【註】

- 1) これまで「碑石」「石碑」「石板」などと呼称されてきたが、大正調査の報告書（宮崎県1915b）にしたがい、小稿では「碑石」と呼称する。
- 2) このほか、平成24（2012）年度に実施された西都原284号墳〔旧「無号B塚」〕の発掘調査でも、墳頂部の大正調査坑内から「碑石」が検出されている。同古墳は、大正6（1917）年に浜田耕作・梅原東治によって発掘調査が実施されている（西都原古墳群第6次調査：宮崎県1918）。西都原古墳群における「碑石」の検出例としては5例目となる。当該「碑石」については調査担当者である藤木 聡氏のご教示を得た。
- 3) 小稿では、碑文が刻まれ下に置かれた石材を「本体」、その上に置かれた石材を「蓋石」と呼称する。
- 4) 大正調査の報告書（宮崎県1915b）に掲載された文面と実際の碑文の間に見られる正字・旧字・本字・別体・略字などの相違については、組版時の文選によるものも含むと思われるが、それらも含めて異同を示しておく。なお、[a-b]は、碑文における「a行目、（その行における）b文字目」を示す。また、(碑)は碑文に刻まれた文字、(報)は大正調査の報告書中の文字（宮崎県1915b）を示す。「―」は碑文あるいは報文中にその文字がないことを示す。
- 5) 西都原171号墳の「碑石」については、報告書第2分冊（松林2004）の図版6に検出状況の写真が掲載されているのみである。同「碑石」の埋置状況については松林豊樹氏からご教示いただいた。
- 6) 著者両名は、大阪大谷大学文化財学科として調査に参加した平成21（2009）年度に後円部墳頂部中央の大正調査坑の掘り下げを行っているが、その年の調査は「碑石」を被覆する河原石を検出したところで終了した。その後、平成23（2011）年度に実施された河原石の除去および「碑石」の検出状況については、調査担当者の崎田一郎・藤木 聡両氏のご教示を得た。なお、西都原202号墳の調査成果については、平成24（2012）年度中に報告書が刊行される予定である（藤木ほか2013）。
- 7) 西都原13号墳の墳丘および埋葬施設についての報告書は未刊であり、「碑石」の埋置状況や検出状況については、概報（長津1997）において、ごく簡単に記述されているのみである。

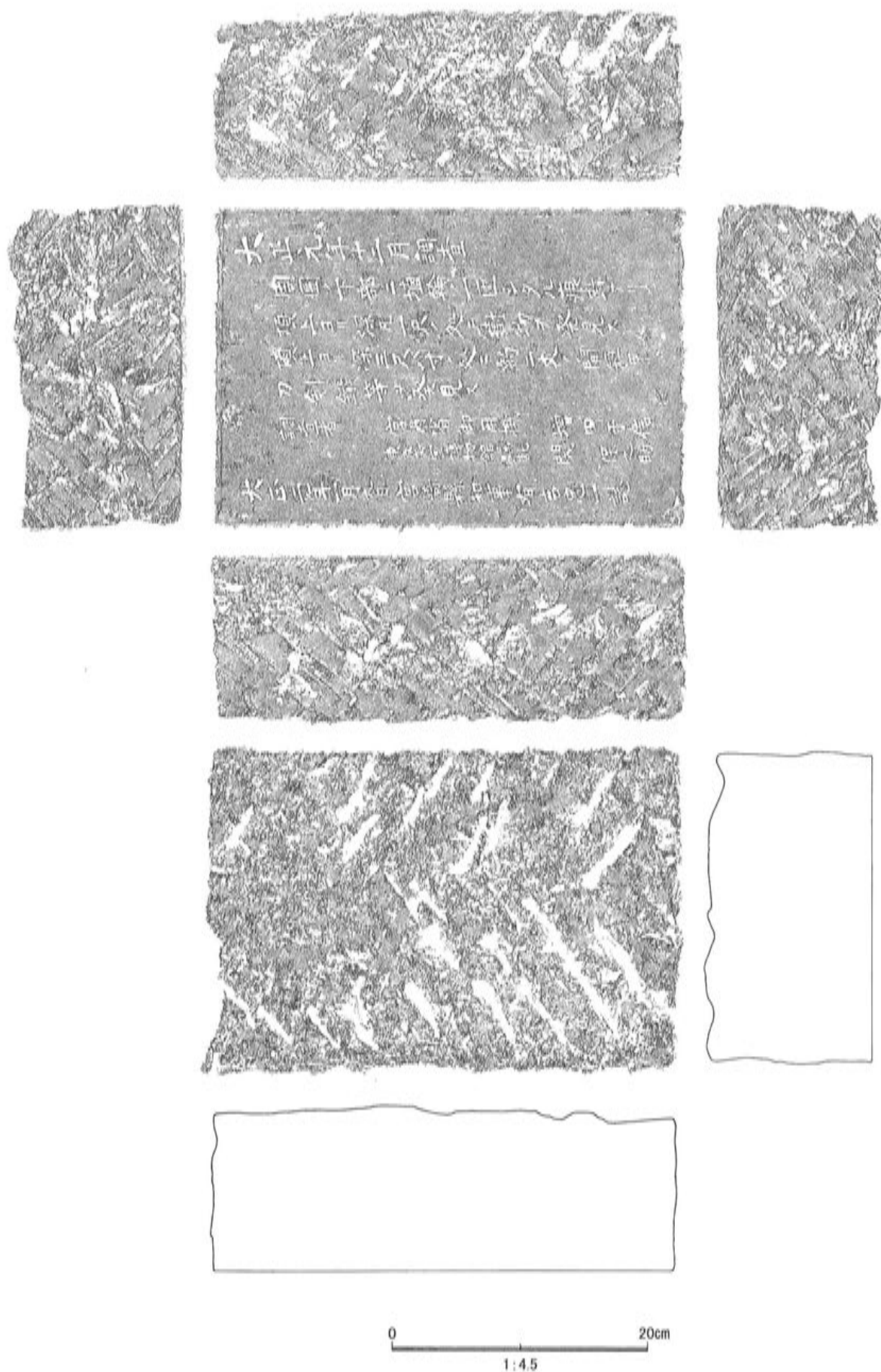
- 8) 宮崎県1915b文献41頁に記載されている「二十一號」は誤りで「十七號」が正しい。
- 9) 前掲註2に同じ。
- 10) 現地で見えた印象では、西都原284号墳〔旧「無号B塚」〕の「碑石」の碑文は、西都原170号墳・171号墳・202号墳と同じく端整である。碑文の巧拙については、本文中でも記したように、発注側だけではなく、受注側の様々な要因が介在しているのであろう。
- 11) 西都原古墳群における大正調査の全容については別稿で再検討する予定である。

【補註】

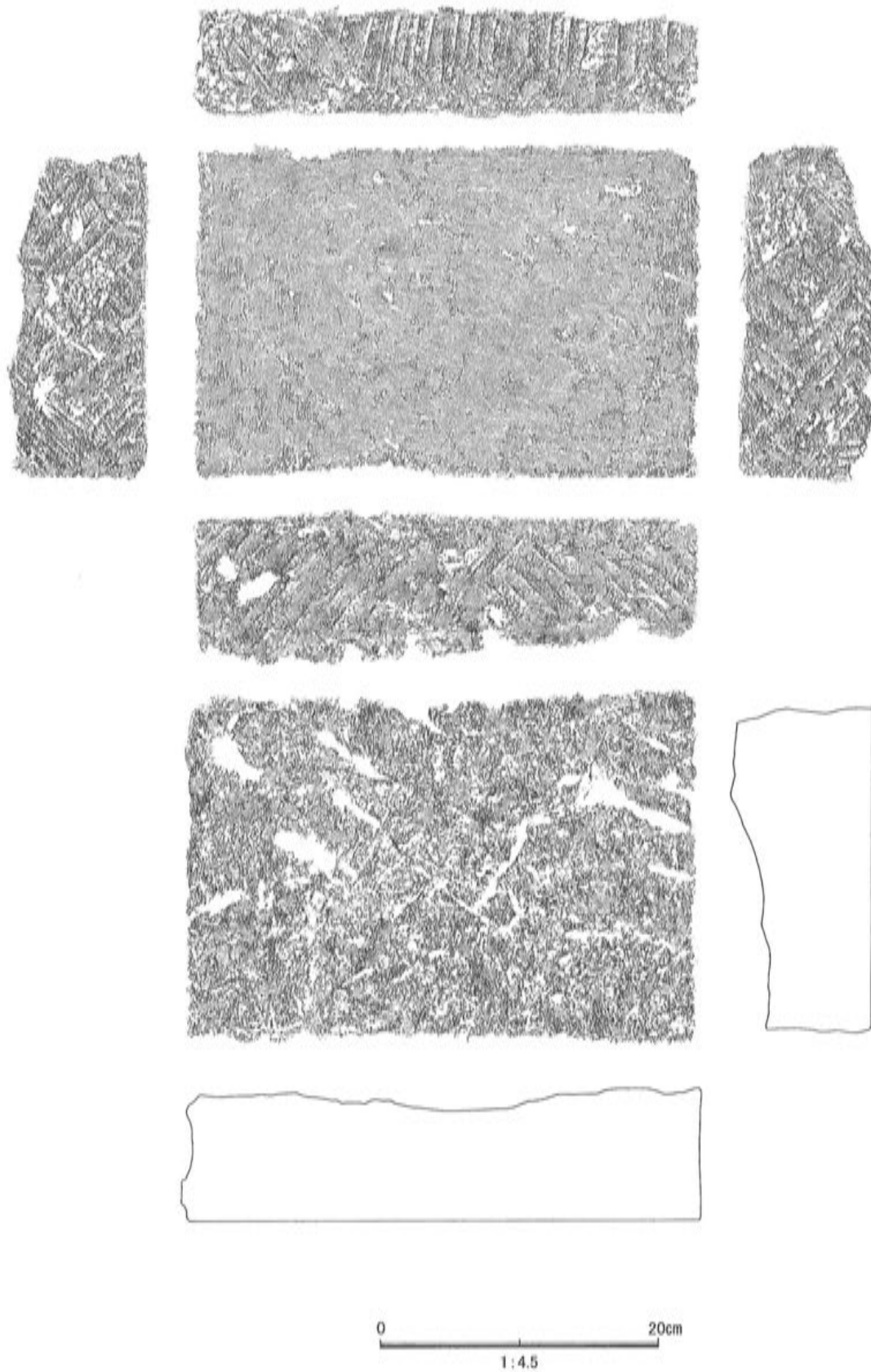
碑文が刻まれている本体とは異なり、本来、蓋石下面の天地は区別されていないはずであるが、小稿では、本体の上に蓋石を置く際の天地に基づき、蓋石の図面・拓本・写真を配置する。なお、西都原13号墳〔旧称：西都原2号墳〕に埋置された「碑石」については、蓋石の埋置状態が不明なため、任意に配置した。

【参考文献・関連文献】

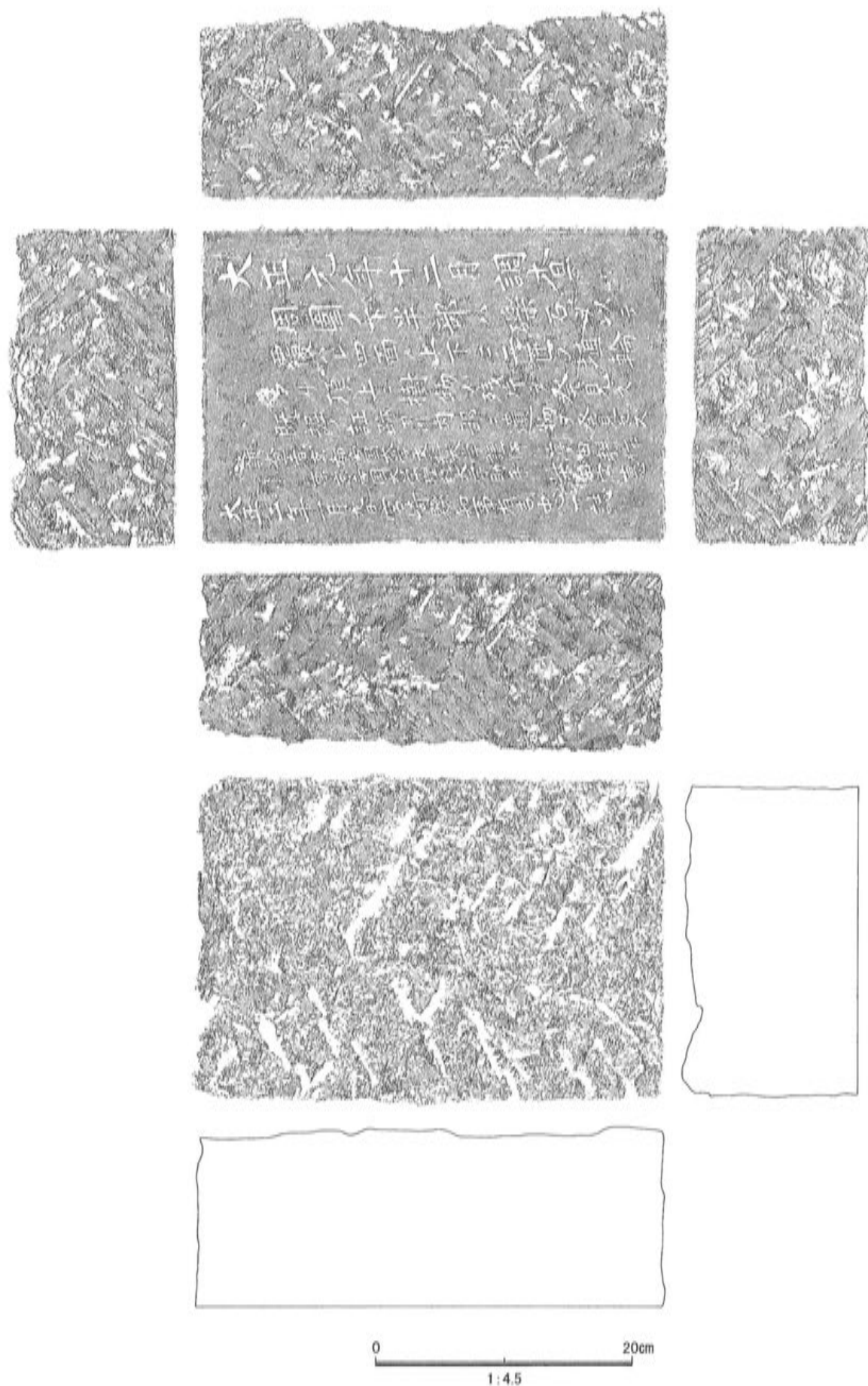
- 石川悦雄1988『西都原発掘75周年展図録』宮崎県総合博物館
- 石川悦雄2001『西都原13号墳（墳丘出土古墳時代遺物編）』特別史跡西都原古墳群発掘調査報告書第2集、宮崎県教育委員会
- 犬木 努2007「西都原の埴輪から見えてくるもの—カタチ・技術・工人・組織—」『巨大古墳の時代—九州南部の巨大古墳—』宮崎県立西都原考古博物館、44～48頁
- 犬木 努2012「埴輪からみた南九州と近畿—西都原古墳群を中心として—」『南九州とヤマト王権—日向・大隅の古墳—』大阪府立近つ飛鳥博物館図録58、大阪府立近つ飛鳥博物館、129～138頁
- 犬木 努ほか2008『西都原169号墳（遺構編）西都原170号墳（遺構編）』特別史跡西都原古墳群発掘調査報告書第7集、宮崎県教育委員会
- 犬木 努ほか2010『西都原169号墳（遺物編）西都原170号墳（遺物編）』特別史跡西都原古墳群発掘調査報告書第9集、宮崎県教育委員会
- 犬木 努・近藤麻美2012「西都原171号墳出土蓋形埴輪の再検討—立ち飾り部の製作技法を中心として—」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第8号、宮崎県立西都原考古博物館、23～34頁
- 犬木 努・近藤麻美・金行美智子2011「西都原古墳群出土埴輪の補足調査—宮崎神宮徴古館旧蔵埴輪を中心として—」『宮崎県立西都原考古博物館研究紀要』第7号、宮崎県立西都原考古博物館、45～57頁
- 斎藤 忠1983「解説」『宮崎県西都原古墳調査報告書』西都市教育委員会・西都原古墳研究所、1～30頁
- 高橋克壽1993「西都原171号墳出土埴輪について」『宮崎県史研究』第7号、宮崎県、39～59頁
- 内藤虎次郎・今西 龍1918「西都原古墳調査報告（大正五年一月）」『宮崎県史蹟調査報告第三冊』宮崎県内務部、62～72頁
- 長津宗重1997「西都原13号墳試掘調査の成果」『特別史跡西都原古墳群発掘調査・保存整備概要報告書（Ⅱ）』宮崎県教育委員会、2～3頁
- 藤木 聡・犬木 努ほか2013『西都原202号墳』特別史跡西都原古墳群発掘調査報告書第10集、宮崎県教育委員会
- 古谷 毅ほか2005『重要文化財 西都原古墳群出土 埴輪子持家・船』東京国立博物館
- 松林豊樹2003『西都原171号墳（第1分冊）』特別史跡西都原古墳群発掘調査報告書第4集、宮崎県教育委員会
- 松林豊樹2004『西都原171号墳（第2分冊）』特別史跡西都原古墳群発掘調査報告書第5集、宮崎県教育委員会
- 宮崎県1915a『宮崎県児湯郡西都原古墳調査報告』
- 宮崎県1915b「下穂北村古墳調査記録」『宮崎県児湯郡西都原古墳調査報告』3～48頁
- 宮崎県1917『宮崎県西都原古墳調査報告書』
- 宮崎県1918『宮崎県史蹟調査報告第三冊』宮崎県内務部
- 宮崎県1926『西都原史蹟調査報告書』



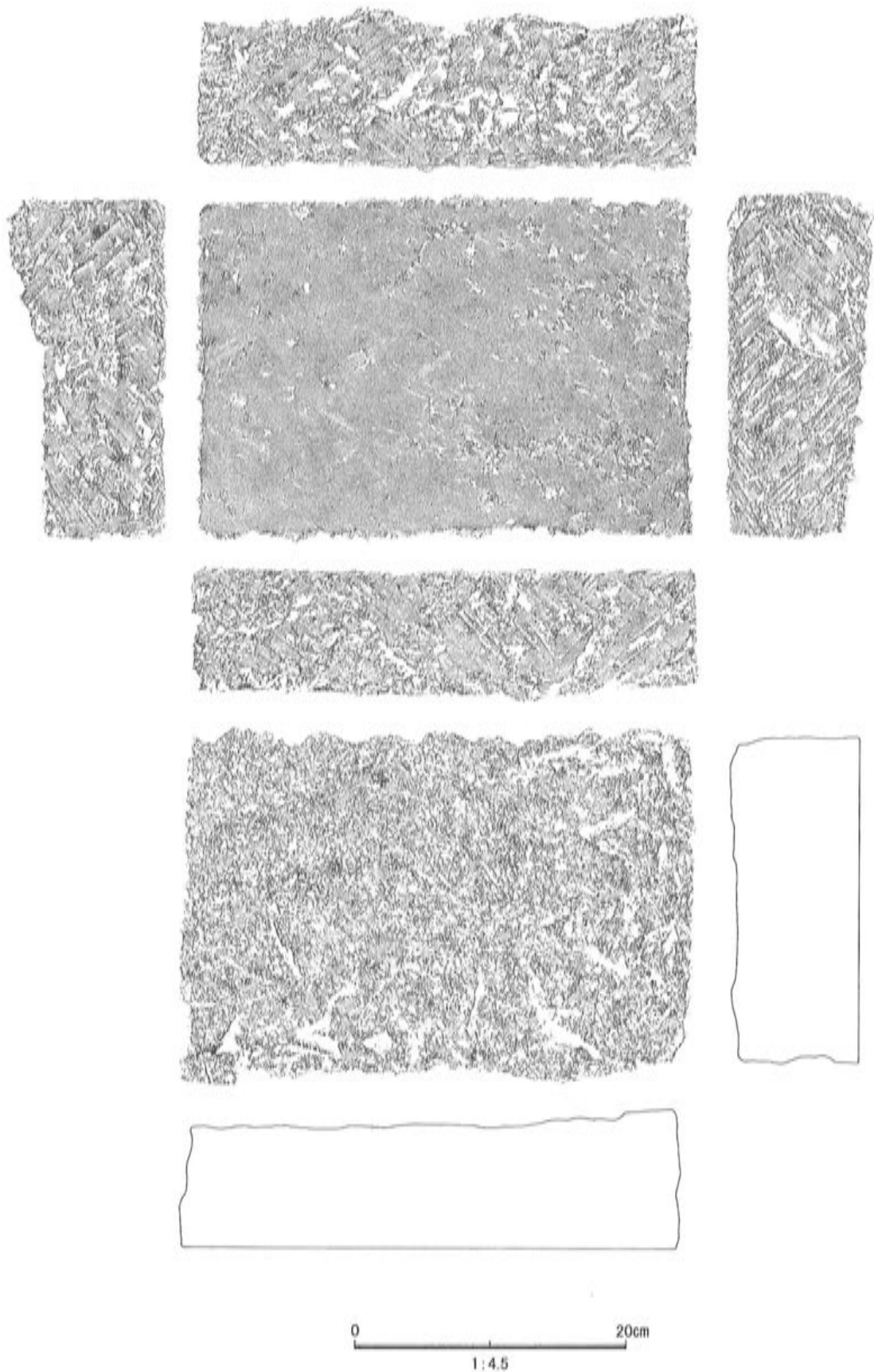
第1図 西都原170号墳〔旧称：西都原111号墳〕に埋置された「碑石」の拓本・実測図①（本体）



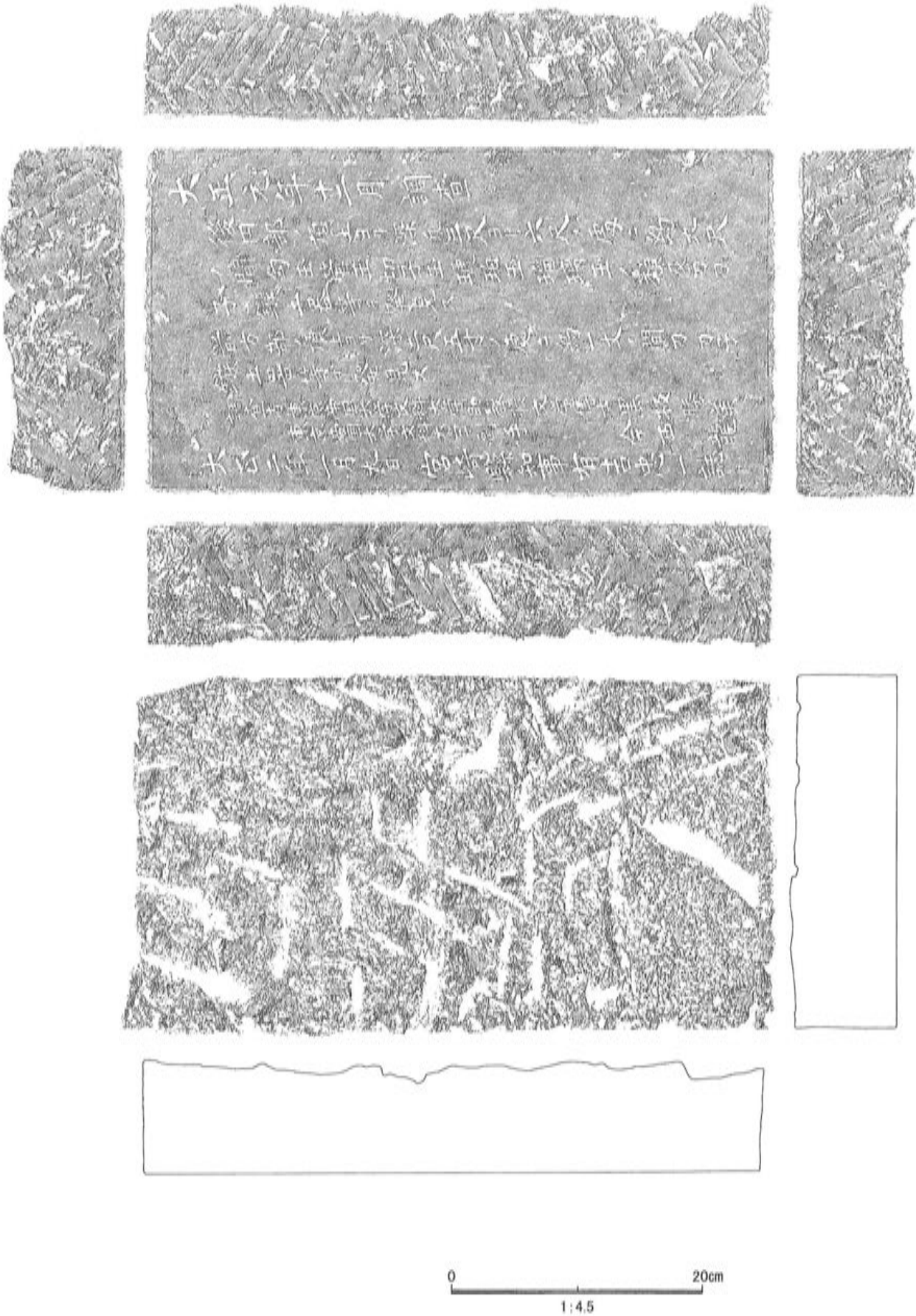
第2図 西都原170号墳〔旧称：西都原111号墳〕に埋置された「碑石」の拓本・実測図②（蓋石）



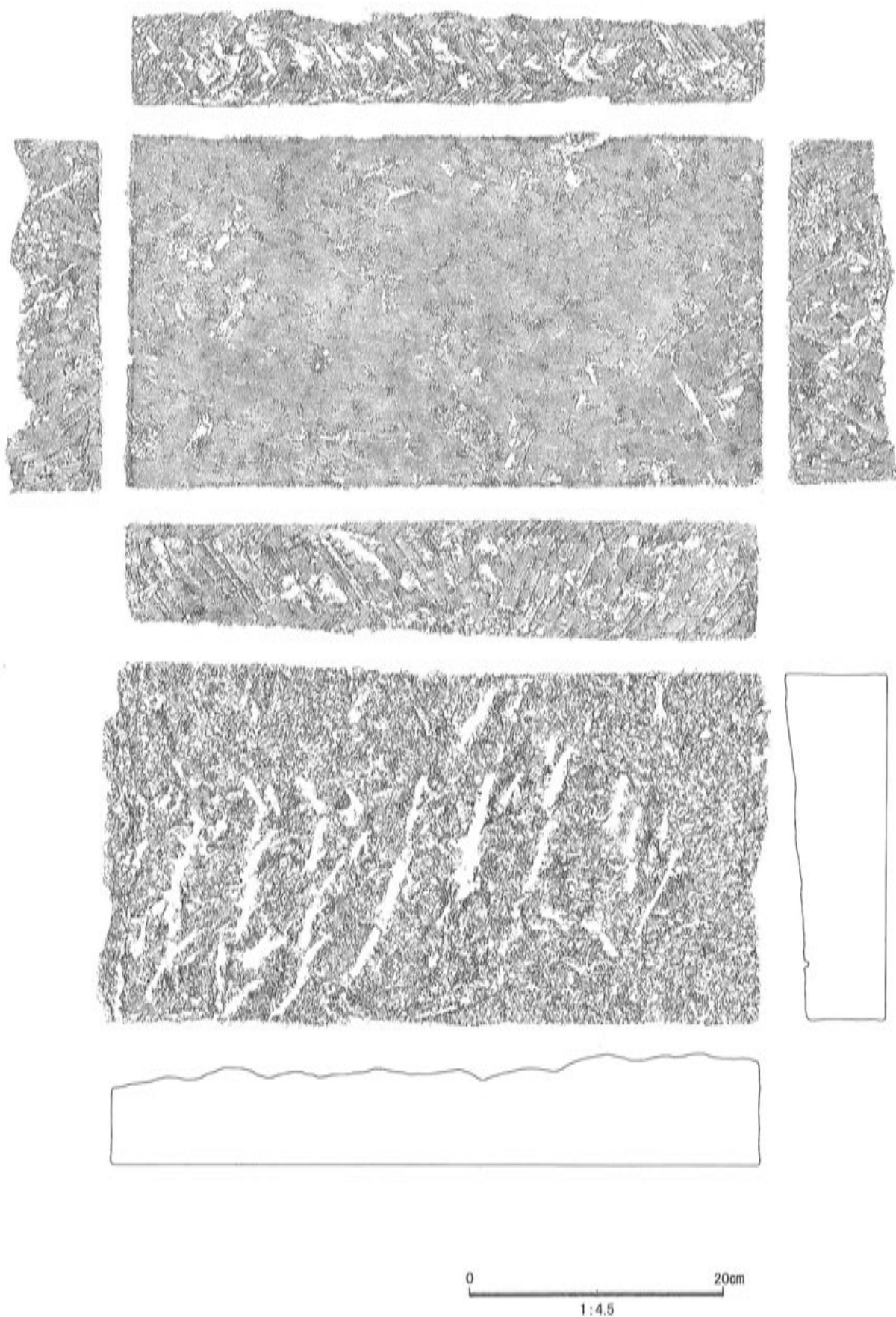
第3図 西都原171号墳〔旧称：西都原112号墳〕に埋置された「碑石」の拓本・実測図①（本体）



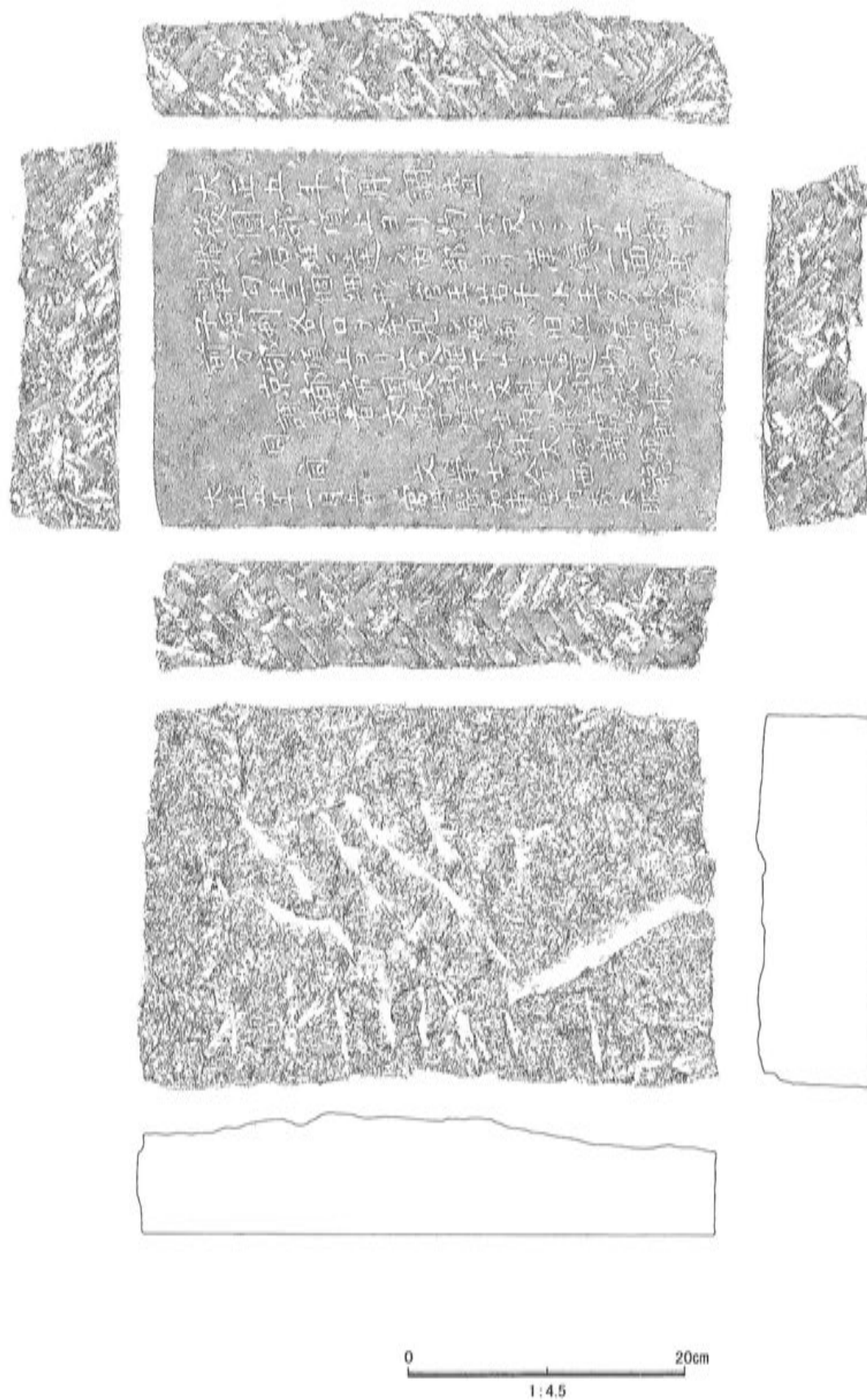
第4図 西都原171号墳〔旧称：西都原112号墳〕に埋置された「碑石」の拓本・実測図②（蓋石）



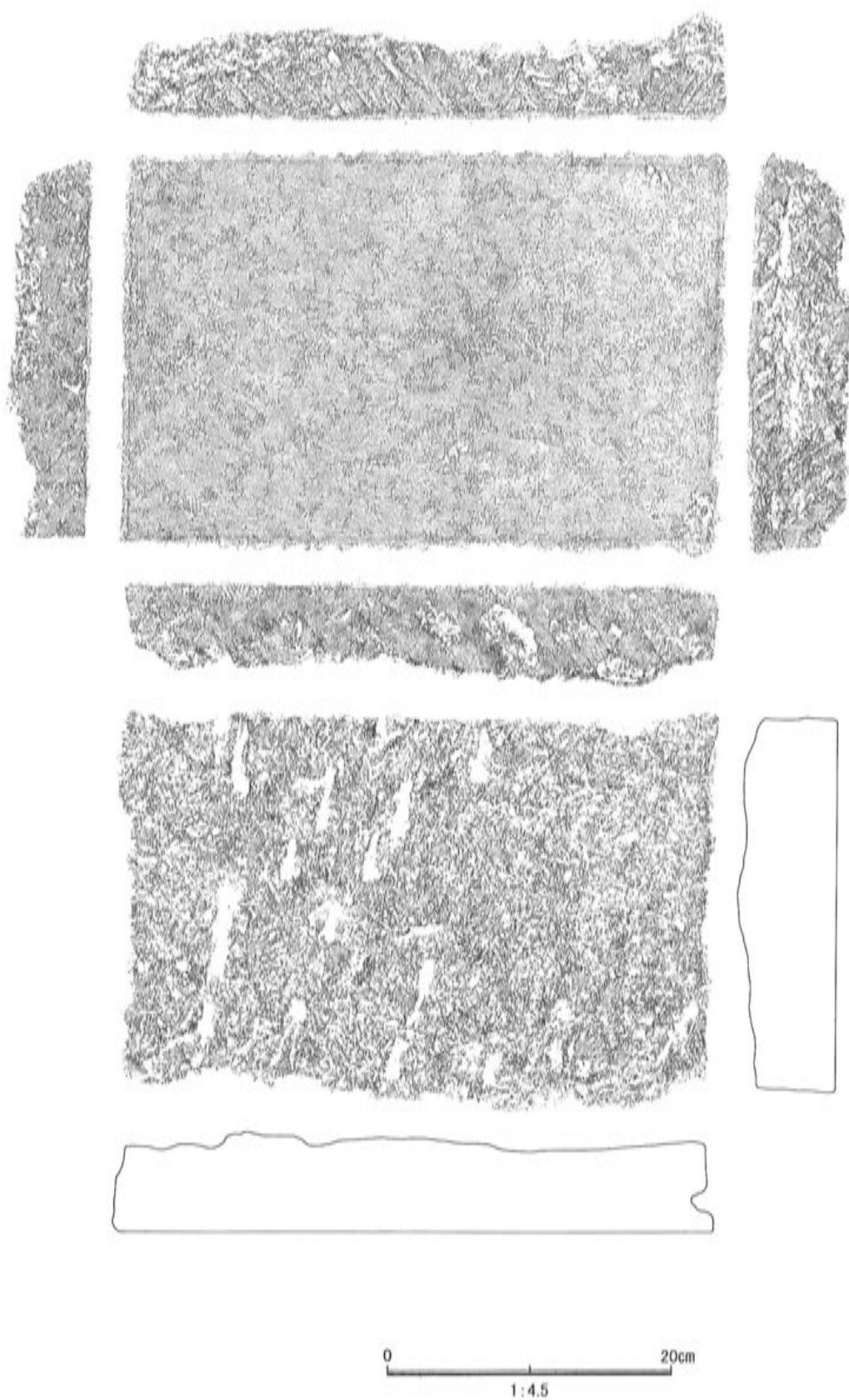
第5図 西都原202号墳〔旧称：西都原11号墳〕に埋置された「碑石」の拓本・実測図①（本体）



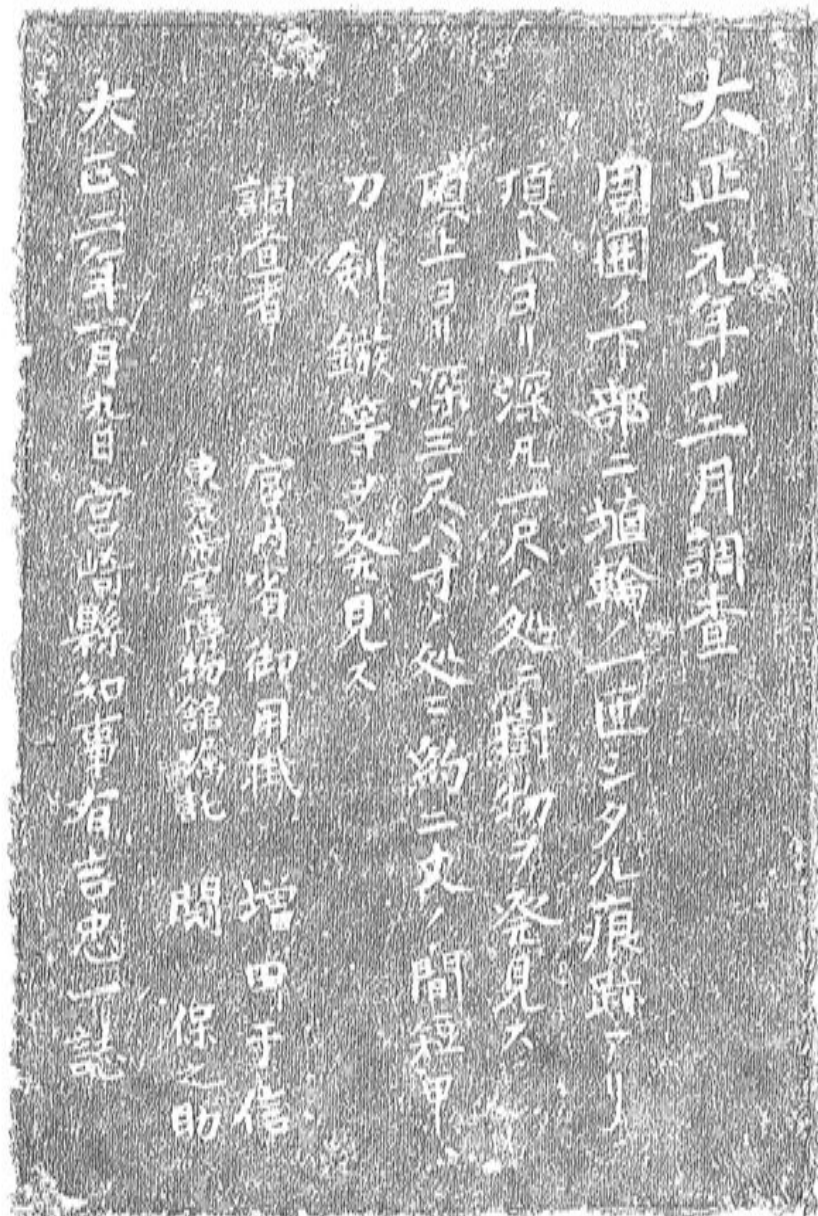
第6図 西都原202号墳〔旧称：西都原11号墳〕に埋置された「碑石」の拓本・実測図②（蓋石）



第7図 西都原13号墳【旧称：西都原2号墳】に埋置された「碑石」の拓本・実測図①（本体）



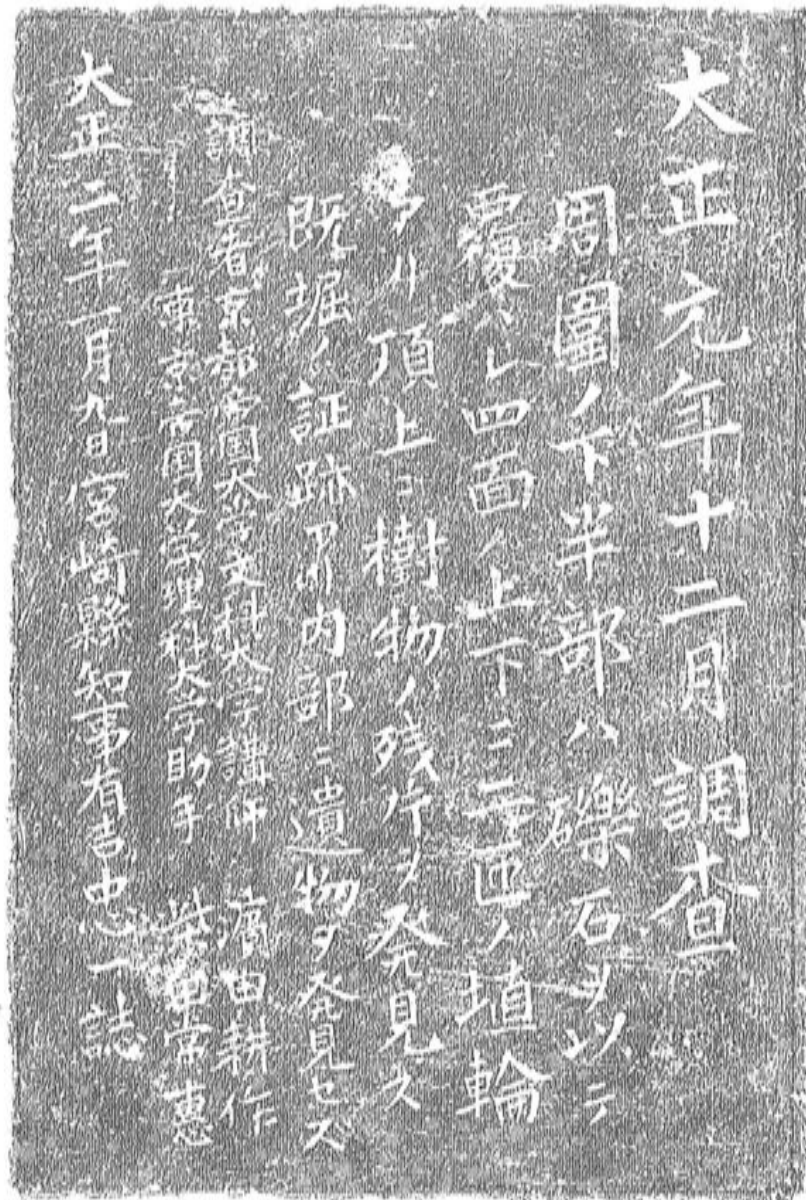
第8図 西都原13号墳〔旧称：西都原2号墳〕に埋置された「碑石」の拓本・実測図②（蓋石）



0 10cm
1:2.3

大正元年十二月調査
周圍ノ下部ニ埴輪ノ一匝シタル痕跡アリ
頂上ヨリ深凡一尺ノ処ニ樹物ヲ発見ス
頂上ヨリ深三尺八寸ノ処ニ約二丈ノ間短甲
刀劍鐵等ヲ発見ス
調査者 宮内省御用掛 増田手信
東京帝室博物館囑託 関保之助
大正二年一月九日 宮崎縣知事有吉忠一誌

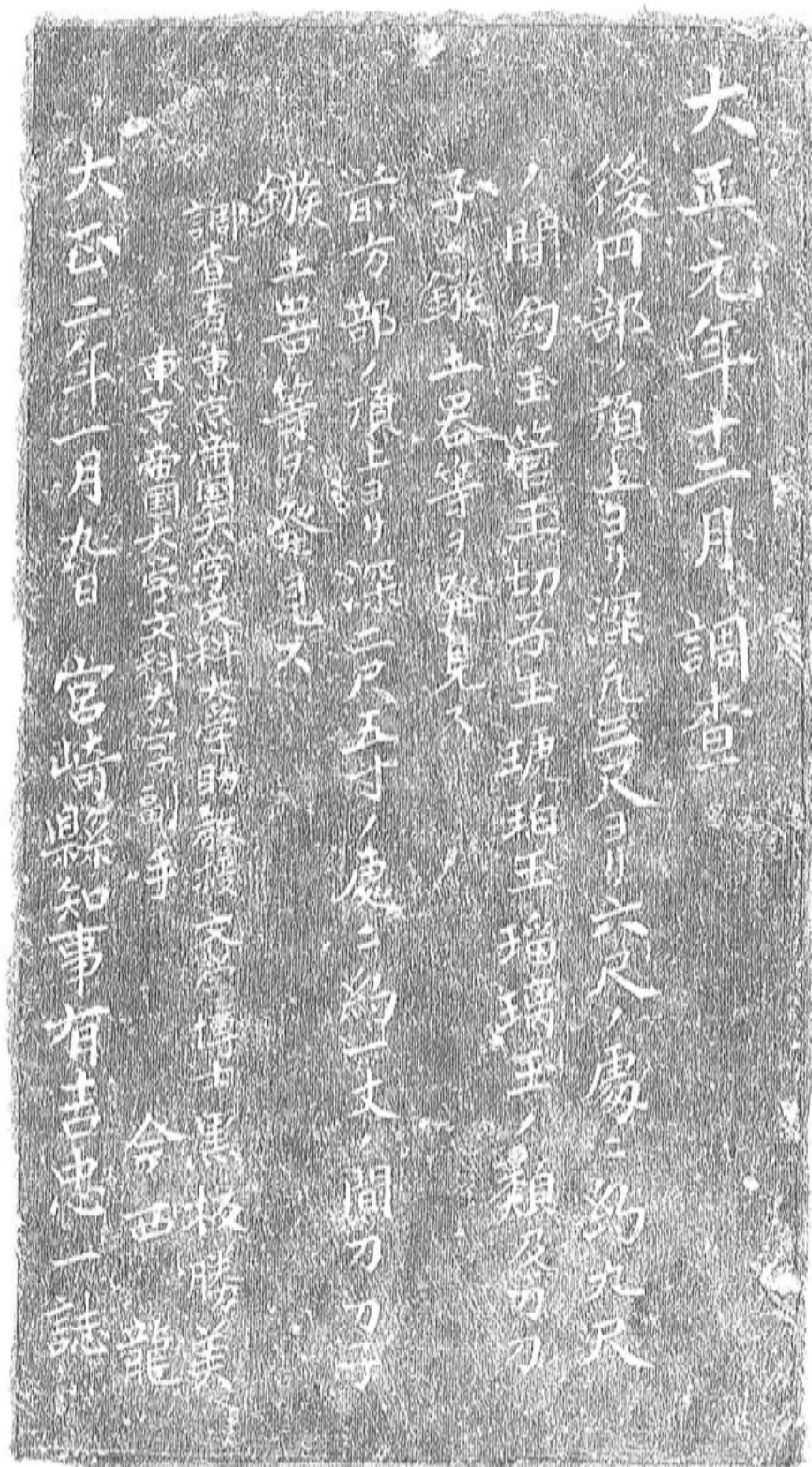
第9図 西都原170号墳〔旧称：西都原111号墳〕に埋置された「碑石」の碑文



0 10cm
1:2.3

大正元年十二月調査
周園ノ下半部ハ礫石ヲ以テ
覆ハレ四面ノ上下二二面ノ墳輪
アリ頂上ニ樹物ノ残片ヲ発見ス
既掘ノ証跡アリ内部ニ遺物ヲ発見セズ
調査者 京都帝國大学文科大學講師 濱田耕作
東京帝國大学理科大學助手 柴田常恵
大正二年一月九日 宮崎縣知事有吉忠一誌

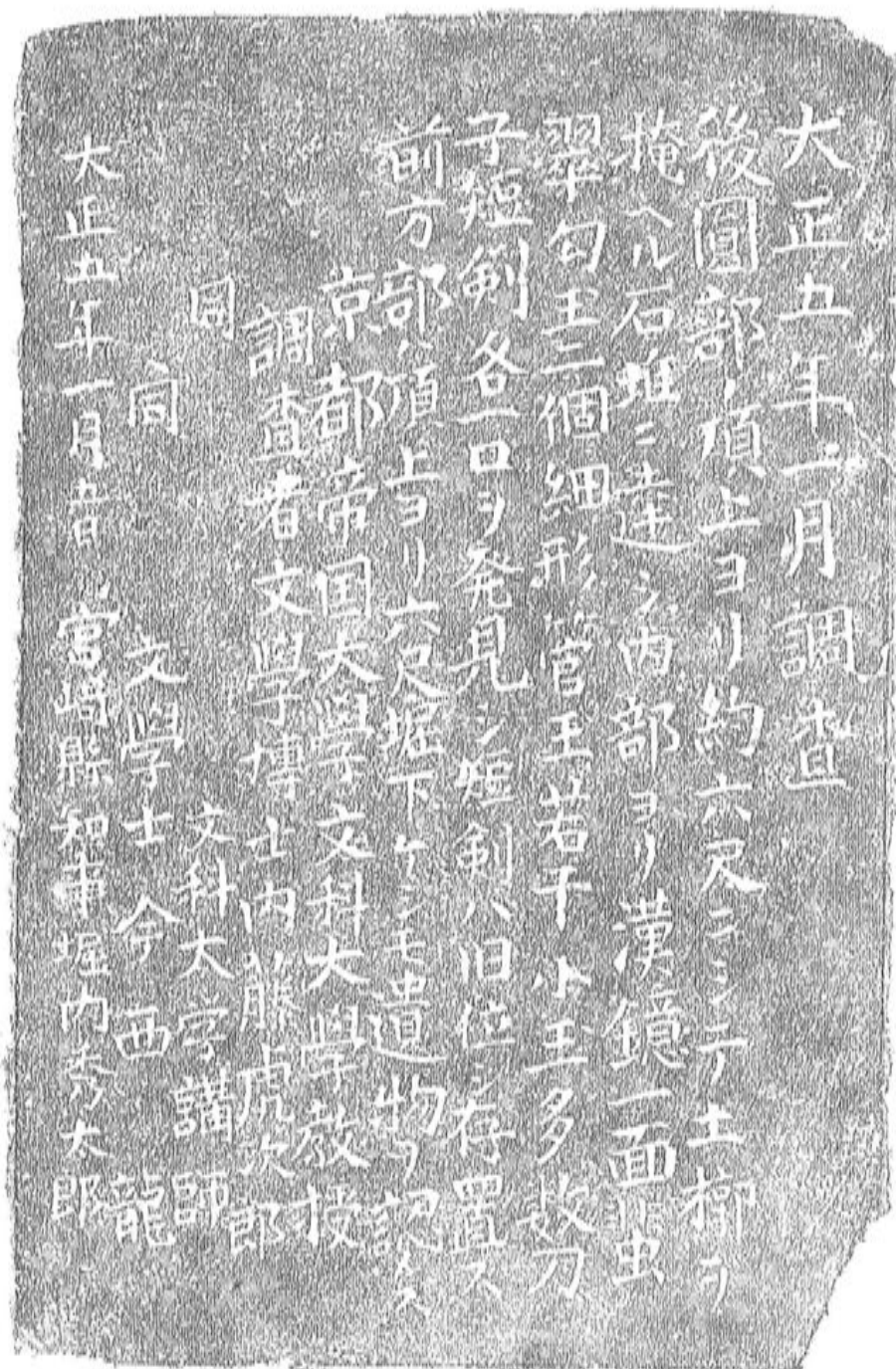
第10図 西都原171号墳〔旧称：西都原112号墳〕に埋置された「碑石」の碑文



大正元年十二月調査
 後円部ノ頂上ヨリ深九三尺ヨリ六尺ノ處ニ約九尺
 ノ間勾玉管玉切子玉琥珀玉瑠璃玉ノ類及刀子
 子鐵土器等ヲ発見ス
 前方部ノ頂上ヨリ深二尺五寸ノ處ニ約一丈ノ間刀子
 鐵土器等ヲ発見ス
 調査者 東京帝國大学文科大學助教授 文学博士 黒板勝美
 東京帝國大学文科大學副手 今西龍
 大正二年一月九日 宮崎縣知事有吉忠一誌

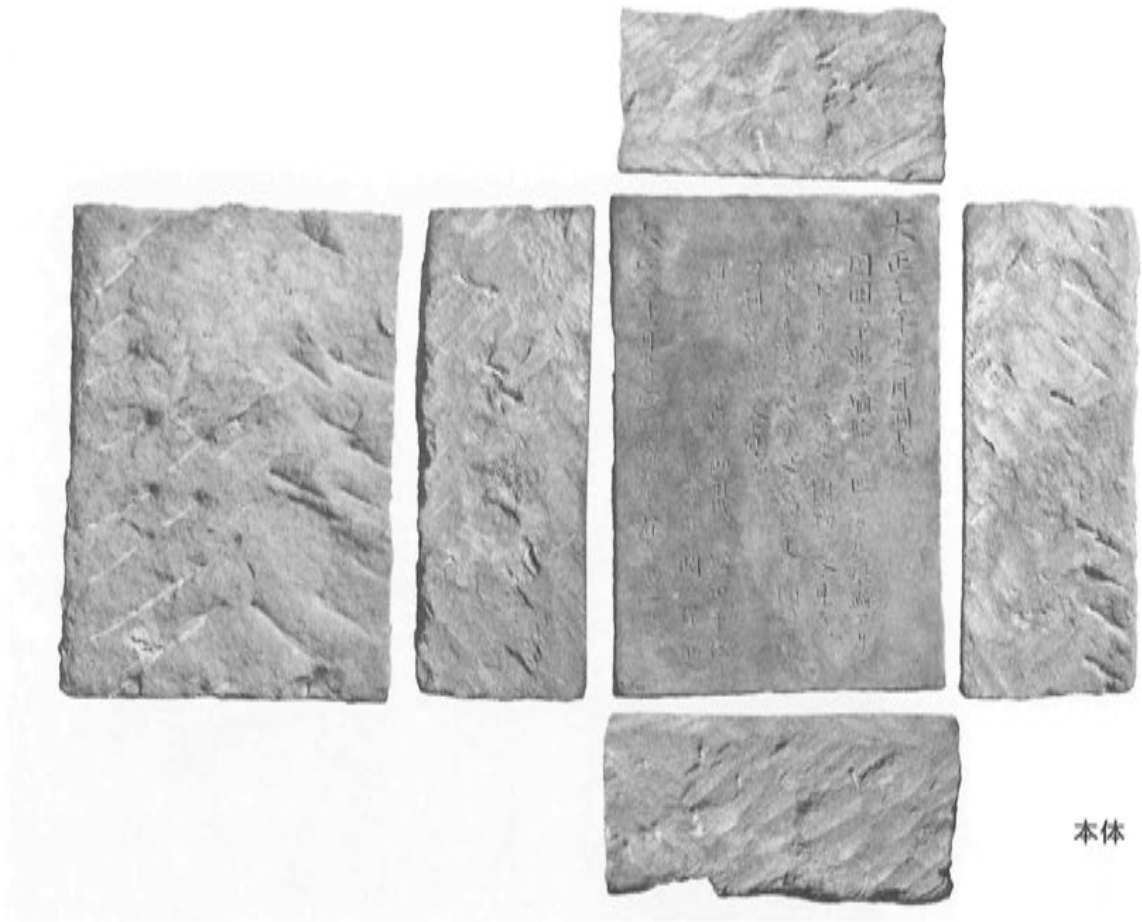
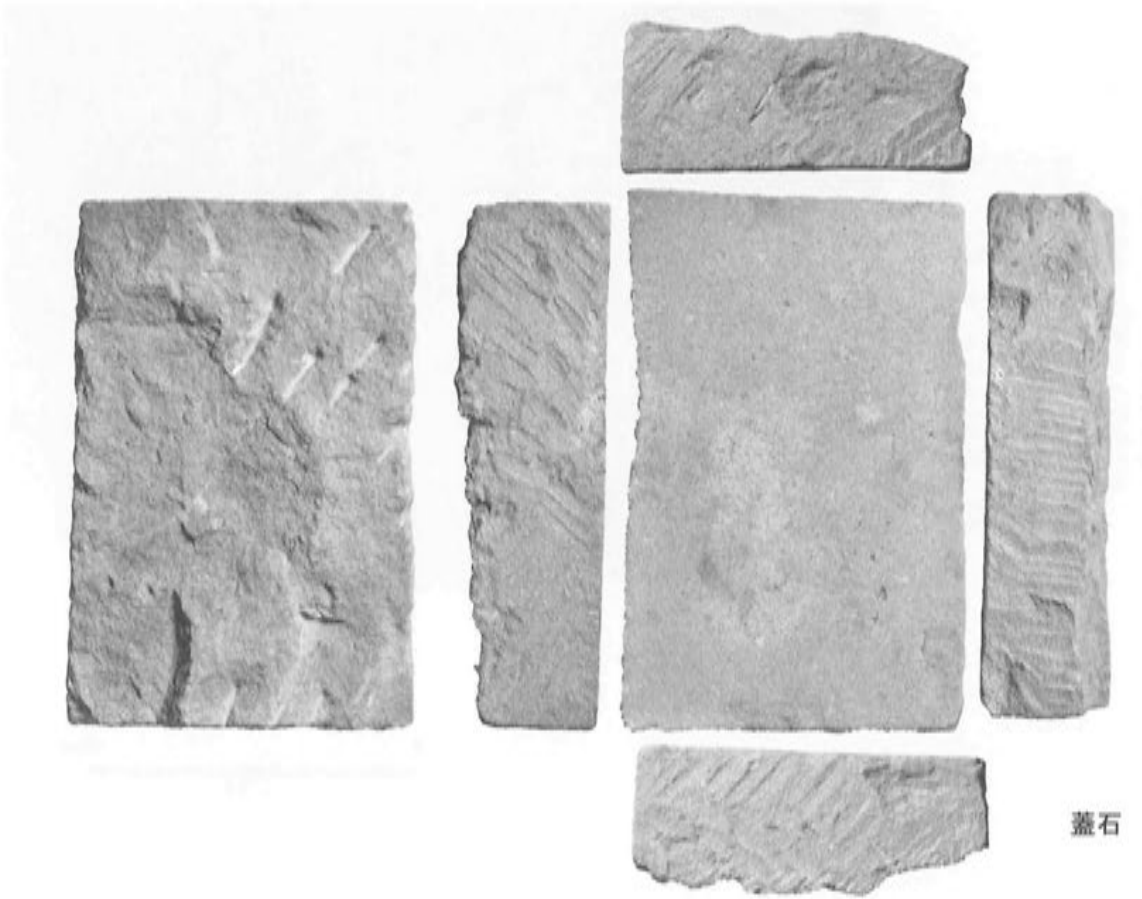
0 10cm
 1:2.3

第11図 西都原202号墳〔旧称：西都原11号墳〕に埋置された「碑石」の碑文



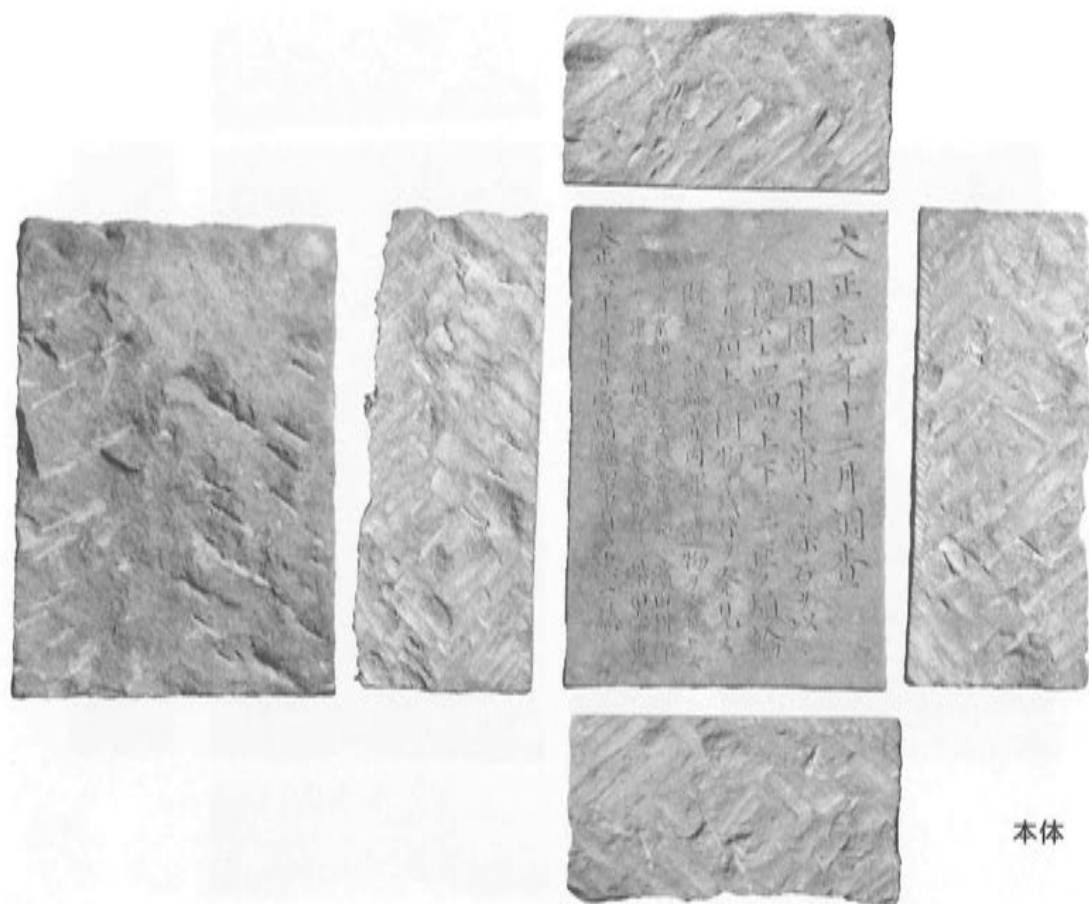
大正五年一月調査
後圓部ノ頂上ヨリ約六尺ニシテ土柳ヲ
掩ヘル石堆ニ達シ内部ヨリ漢鏡一面藍
翠勾玉二個細形管玉若干小玉多数刀
子短劍各一口ヲ発見シ短劍ハ旧位シ存置ス
前方部ハ頂上ヨリ六尺堀下ケシモ遺物ヲ認めズ
京都帝國大學文科大學教授
調査者 文學博士 内藤虎次郎
同 文科大學講師
同 文學士 今西龍
大正五年一月五日 宮崎縣知事堀内秀太郎

第12図 西都原13号墳〔旧称：西都原2号墳〕に埋置された「碑石」の碑文

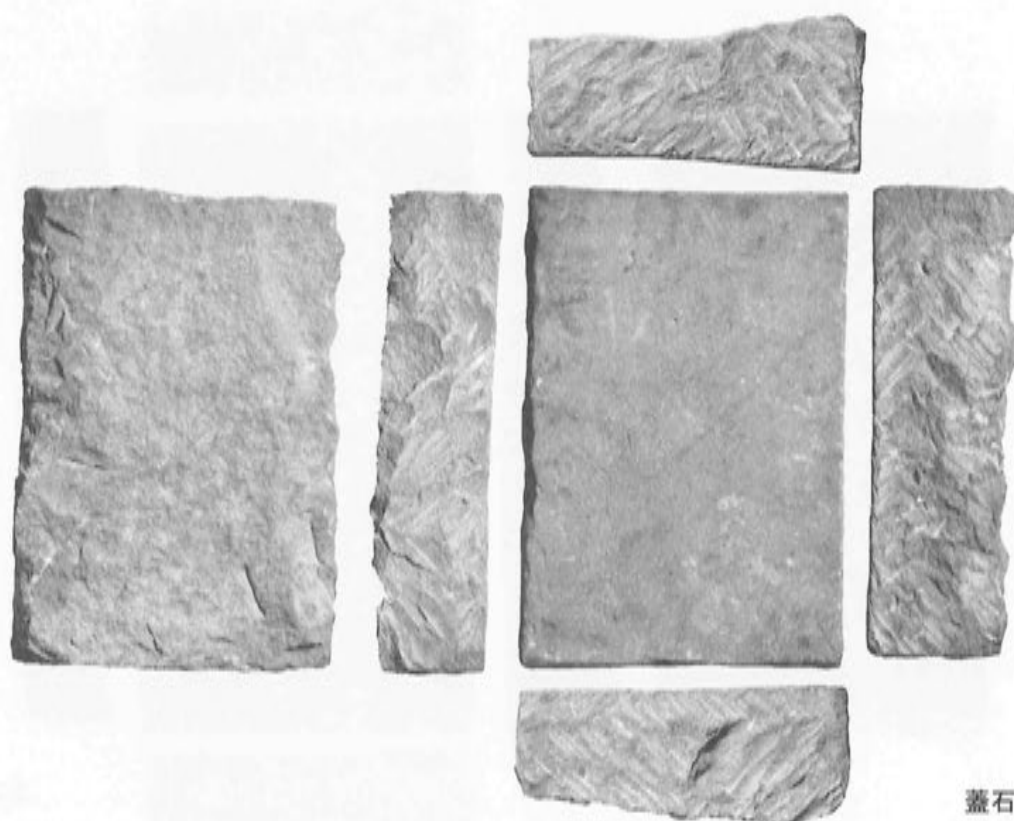


西都原170号墳 [旧称：西都原111号墳] に埋置された「碑石」

写真図版2

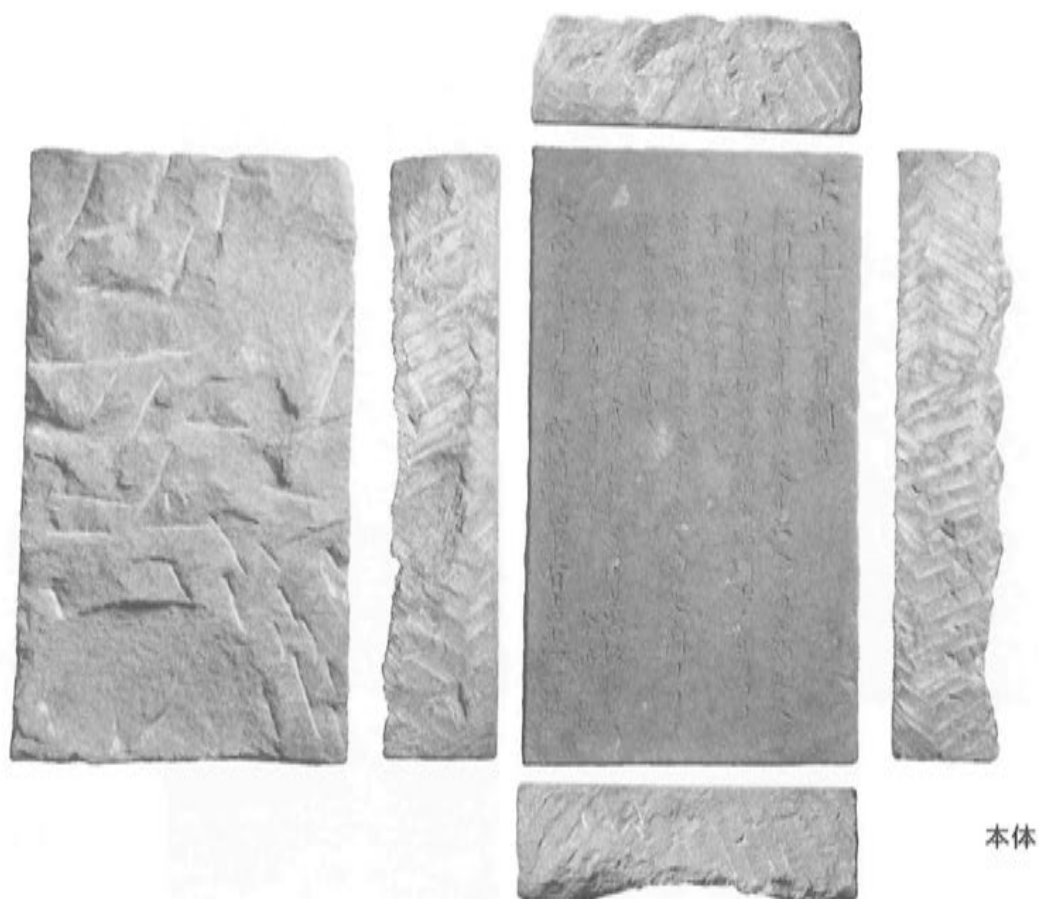


本体

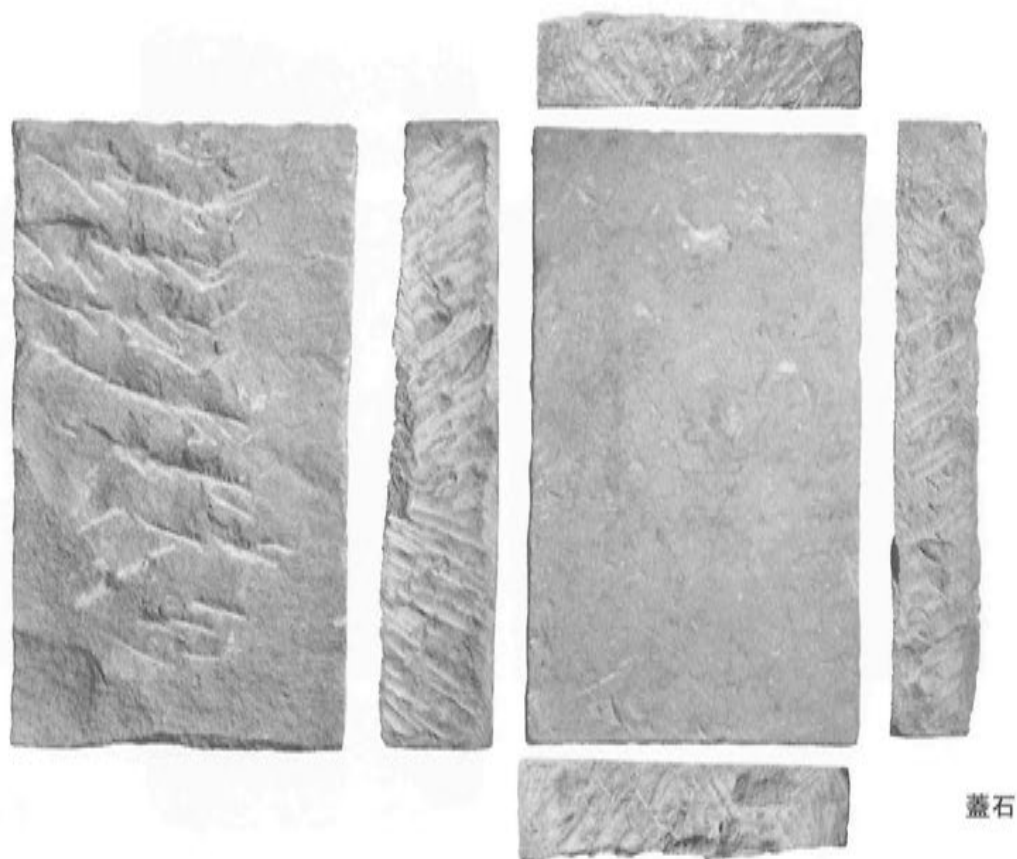


蓋石

西都原171号墳〔旧称：西都原112号墳〕に埋置された「碑石」



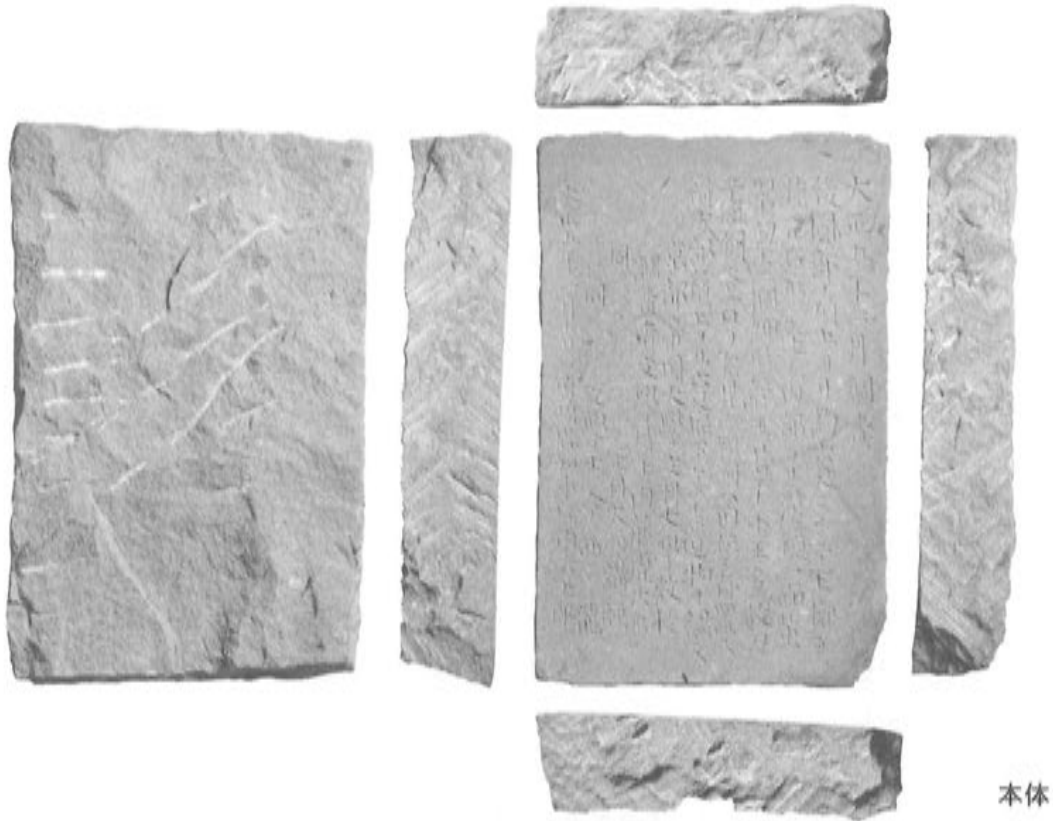
本体



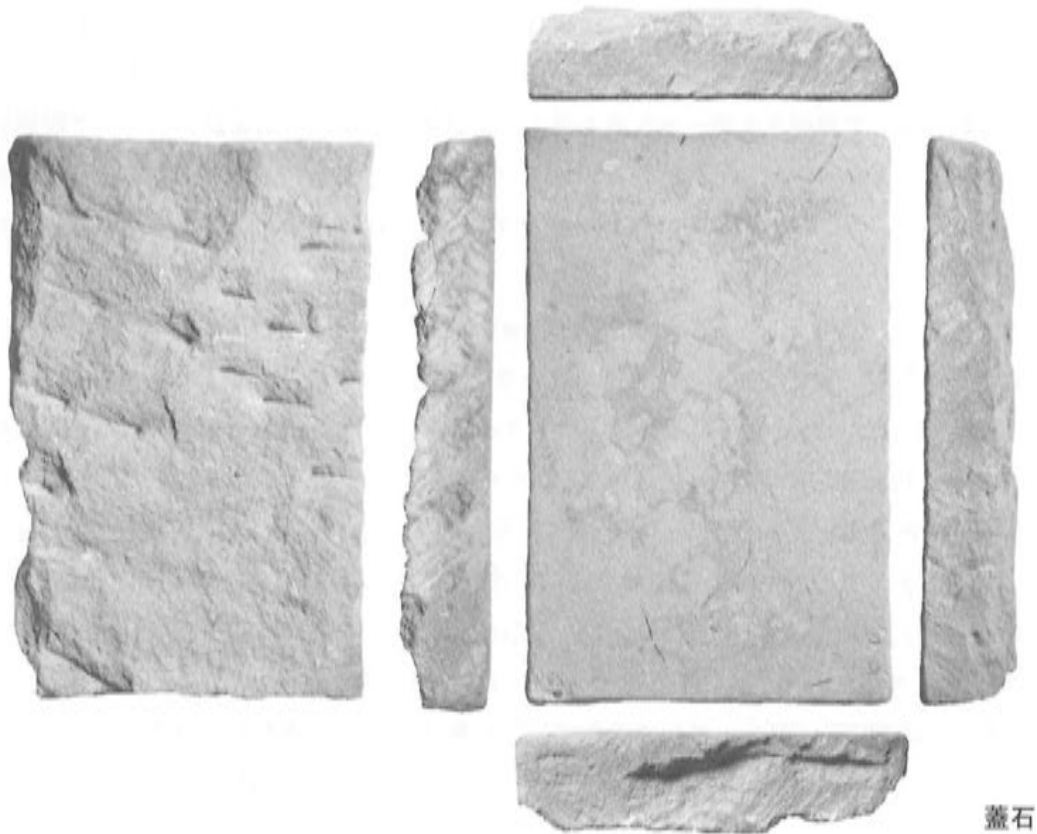
蓋石

西都原202号墳〔旧称：西都原11号墳〕に埋置された「碑石」

写真図版
4



本体



蓋石

西都原13号墳〔旧称：西都原2号墳〕に埋置された「碑石」

大正時代の西都原202号墳（姫塚）の発掘調査

藤 木 聡

1. はじめに

「日本現代の碩学が袂を連ねて来県し、連日、古代史の講演があったので、噂は遠近に伝え伝えて、西都原の発掘が凄まじい人気だが、訳の分からぬ輩^{てかい}の評判にかえって警句があって『神様を掘り出すげな』と言った百姓がある。成程おもしろい、三千年来隠れてござった御方を掘り出し申すのだからと感じ入った。そこで、この紀行に題して『土中の神』としようとも考えたが、知事の言われた『妻は日本のエジプト』あの斬新なそして深き深き思いに入る情趣から取って『土中の日向』としたが、一行の意気はあにただに『土中の日向』のみならんや、まさに『土中の日本』もしくは『土中の世界』を掘り出すにあると思う。」

冒頭で挙げた序文から始まる紀行文『土中の日向』は、今からちょうど100年前の大正元（1912）年当時、宮崎を代表する文筆家として活躍していた若山甲蔵が著したものである。同年12月末から実施された西都原古墳群の発掘調査のうち、おもに西都原202号墳の調査現場での見聞録として日州新聞紙上に掲載されたものである。

そもそも大正元（1912）年にはじまる西都原古墳群の発掘調査は、考古学史上において最初の本格的な古墳の学術調査として知られている（全体を詳しく整理したものとして、斎藤1983・宮崎県総合博物館1988・北郷2005）。西都原202号墳の調査は、大正元（1912）年12月25日から同27日までの3日間で実施され、正月明けの大正2（1913）年1月9日の復旧申告祭の後に、他の調査古墳とともに埋め戻された。調査の詳細については、発掘から2年後に調査者らの執筆による『宮崎県児湯郡西都原古墳調査報告』（宮崎県1915）が出されている。一方で『土中の日向』は、12月25・26日の調査現場における、博士自ら泥まみれになって発掘する様子や冗談を交えた会話等が、実に小気味良いテンポで臨場感たっぷりに描かれている。このように、結果的に硬軟描き分けられることとなった『土中の日向』と調査報告書とを合わせ読むことで、日本初の本格的な古墳の学術調査の様子について、より深い理解に導かれるものと期待されよう。

そこで、本稿では、大正元（1912）年における西都原202号墳の発掘調査について、『土中の日向』の紹介を中心に、報告書（宮崎県1915）の記載でその様子を補いつつ追いかけてみたいと思う。

その際、『土中の日向』に登場する多くの人物とその関係を知ることで、より一層発掘時の様子が伝わると考え、各人物の立場や年齢等について第1図中に列記した¹⁾。また、『土中の日向』の引用にあたっては、原文の仮名遣い及び漢字の一部を仮名に改めた。一方、表現のうえで今日的には適切でないと思われる箇所もあったが、当時の雰囲気や原文を尊重する意味で原文表記のままとした。また、『宮崎県児湯郡西都原古墳調査報告』（宮崎県1915）記載内容の大半を占める遺物の内訳・寸法や出土状況については、202号墳出土品（現在、所在調査中²⁾）の基礎的整理を意図した一覧表を作成した（表1・2）。同書所収の現場写真（図2・3）については、京都大学考古学研究室の御協力により元のプリント写真をいくつか入手でき、それによって引き出すことのできた多くの情報についても解説した³⁾。



左から順に、坂口昂・喜田貞吉・関保之助・黒板勝美・1人おいて今西龍・永友宗年（都農神社宮司）・三浦敏・1人おいて濱田耕作

氏名	(生没年)	役職・調査時の年齢
黒板勝美	(1874~1946)	東京帝国大学助教授・38歳
柴田常恵	(1877~1957)	東京帝国大学助手・35歳
坂口 昂	(1872~1928)	京都帝国大学助教授・40歳
喜田貞吉	(1871~1939)	京都帝国大学講師等・41歳
今西 龍	(1875~1932)	京都帝国大学講師・37歳
濱田耕作	(1881~1938)	京都帝国大学講師・31歳
増田手信	(1862~1937?)	宮内省諸陵寮・50歳
関保之助	(1868~1945)	皇室博物館・44歳
三浦 敏	(1854~1915)	宮崎県史蹟調査員・58歳
若山甲蔵	(1868~1945)	日州教育会書記長・44歳
有吉忠一	(1873~1947)	宮崎県知事・39歳
坂元重俊	(1862~ ?)	宮崎県会議員・50歳
松葉秀太郎	(1876~ ?)	宮崎県参事会員・36歳

斎藤事務官／市川事務官／新坂君（宮崎県属？）／江藤君（宮崎県土木課技手）／日州新聞の口藤君＝加藤七五郎（日州新聞主筆）か？／紫洞君（日州新聞に記事を書いている）

図1 西都原古墳群第1次調査時の写真と『土中の日向』へ登場する人物

2. 大正元（1912）年12月25日晴れ

若山甲蔵は、西都原202号墳の掘削開始より2時間半後の午後2時に西都原へ到着し、202号墳の調査現場へ向かったようである。

「(前略) 知事も斎藤・市川事務官もそこにおられ、坂元重俊・松葉秀太郎二君の顔も見た。大阪毎日・大阪朝日の記者をはじめ鹿児島支局・宮崎毎日からも来て、日州は口⁴⁾藤君がいる。主任は今西学士が一生懸命に探っている、氷のような土を握り揉む、掴む。黒板博士も両手を泥だらけにしている。三浦敏先生はヤレソレと気づかいての小言をつづけ、目に見えぬような土器の断片さえ拾わせる。

人夫は、スコップのような物で、ともすればうんと力を入れて掘りたがるのを、柴田学士等が傍らから注意して「静かに静かに、そっとそっと」の声がかかる。祝部のような物（筆者注：須恵器）や高坏のような物や、粘土のような物がたくさん出てくるばかり。夕日は早ほろほろとして、山の端の黒く空の鮮やかに美しくなる頃、カツンと音させる人夫の鍬に、それと一斉に叫んで、今西学士はだんまり的に忍び寄る。

利器は危険だということで、指先は細い篠竹で掘り出すのだから、一通りの苦勞じゃないが、いずれもただもう『土中の世界』を思い『土中の日本』を思い『土中の日向』を思い、また他意あるべく、トド抱き上げたのがホタル『ほとぎの一種?』という酒器のしかもくすり（筆者注：釉薬）口る見事なものである。欲びの情は人夫先生の顔にまで知られた。

それから勢いを得て、空ややほの暗くなるまでやっていたが、坂口教授が来る、関君が来る、増田先生がござる、濱田学士が来る、そうしていろいろ話の出るうちに「出た出た」の叫びが起こる。三浦先生はまたやかましく小言をやられる。一堂は笑い出す、出たというのは剣らしい。そうしてよほど長いものらしく、口に周囲を掘っているうちに「やっ」と叫ぶ今西の声。「まままま」例の小言が三浦先生の口から。知らず果たして何の叫びか、暮鴉（筆者注：カラス）淋しく鳴いて森に急げば、凍雲口かず天悠々（妻町日向屋にて）」

（かぎ括弧内ここまで『土中の日向（一）』日州新聞大正元年十二月二十七日記事より）



写真 1



写真 2



写真 3

写真 1 大正元年12月25日の後円部調査

実際に202号墳に立ち、写真の背景にかすかに写る山の端について一致する地点を検討すると、写真1は後円部からややくびれ部に向かって下がった位置より北方向に撮影されたとわかる。奥側に立つ人物4人目に隠れるあたりに鬼の窟古墳があり、3～4人目の間には同墳へ通じるマツ並木道が見える。マツの奥にかすむ森は、男狭穂塚・女狭穂塚であろう。

作業員8名はみな野良着で脚絆巻きである。奥に立つ山高帽の3名と座位の1名は学者等と見られ、少なくとも左端は黒板勝美であろう。また、新聞記者かと思われる烏打帽の2名や警察官であろう官帽の3名も見守っている。

左側（西側）より陽が当たっていることや作業員の足元があまり掘り下がっていない点から、正午から午後2時頃までとみられる。

写真 2 後円部の提瓶・鉄刀の出土状況

北西に向いて撮影されたもの。写真中央手前に2号提瓶が、そのすぐ右手には1号直刀がある。1号直刀は漆喰様の粘土に包まれており、切先は東南（写真手前側）、柄を北西に、刃は南に向いていた。左手前には、遺物回収用の篩が置かれている。調査坑は、地表下約4尺（1.21m）まで掘り下げられている。影の様子から、正午前とみられ、そうすると12月26日撮影か。

写真 3 取り上げた後円部の遺物を並べた様子

後円部の調査坑脇に広げられた簀の上に、15号及び10～14号までの遺物について、発見当時の配列で並べている。左3名の様子から、作業員の腰近くまで調査坑が掘り下げられているとわかる。また、右2名の足元には、廃土が積まれている。

図 2 1912（大正元）年の202号墳の発掘調査の様子（写真1は京都大学考古学研究室提供）



写真4

写真4 大正元年12月26日の後円部の調査

黑板勝美が担当した“甲号”にあたる。坏は手前より4号、5号、6号の順で、坏の上には刀子7号が載り、さらに7号直刀が接する。また、切子玉3点が斜めになって出土した。

写真5 大正元年12月27日の前方部調査

後円部方向へ向けて撮影。影を見ると東側（写真右側）より陽が当たっており、11時よりくびれ部調査へ移行するため、27日の11時までに撮影されたとわかる。写真左に斜めに向くのが直刀22号、坏は左より17号、18号であり、坏のすぐ脇に刀子21号がある。

写真6 大正元年12月27日のくびれ部の調査

写真は古墳東側より撮影され、右手が後円部となる。

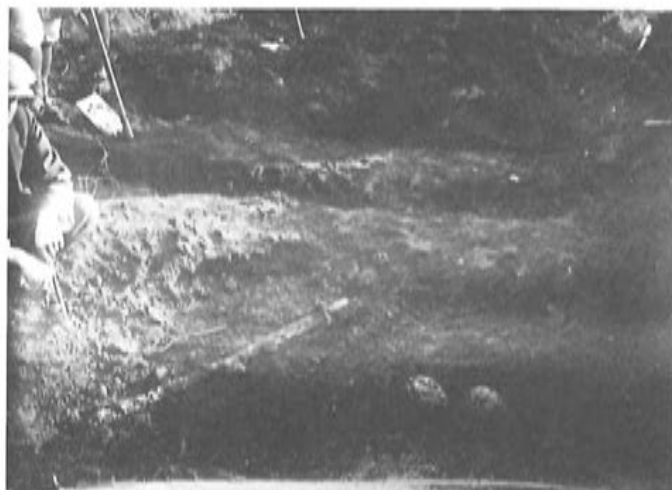


写真5



写真6

図3 1912（大正元）年の202号墳の発掘調査の様子（写真5は京都大学考古学研究室提供）

報告書から調査経過について概述すると、調査者は、黑板勝美・今西龍で、補助に三浦敏がたった。午前11時半、男狭穂塚・女狭穂塚前で執り行われた申告祭の終了後、直ちに調査が開始されている。調査では、後円部頂部に中心を定め、南北15尺（約4.54m）・東西24尺（約7.27m）の区域を設けて、古墳周辺の表土のような黒土に比べてやや黄色い土を掘り進めた。12時半頃には、鼠色の素焼きの土器・赤塗りされた黄色の土器片が出土しはじめた。出土位置に規則性なく散乱しているため、過去に発掘されたことがあるのではという考えも出されたが、同様の出土状況は他古墳でもあるため、継続して掘削した。土器破片は絶えず土中に混在していた。処々に黄色土（地層下部）が混じる。さらに、この区域の西北部の方、表土から深さ4尺（約1.21m）の地点に、直刀1振・提瓶1点が検出された。午後4時半に解散した。作業員は20人。

3. 大正元（1912）年12月26日晴れ

「昨日今西学士の叫んだ所へ往って見ると、三浦先生が人夫を督して霜柱をサクサクと掃かせていらっしゃる所で、碩学一行も既に来てられる。風は吹かずそう凍えもしないのは神慮のほどの畏くありが

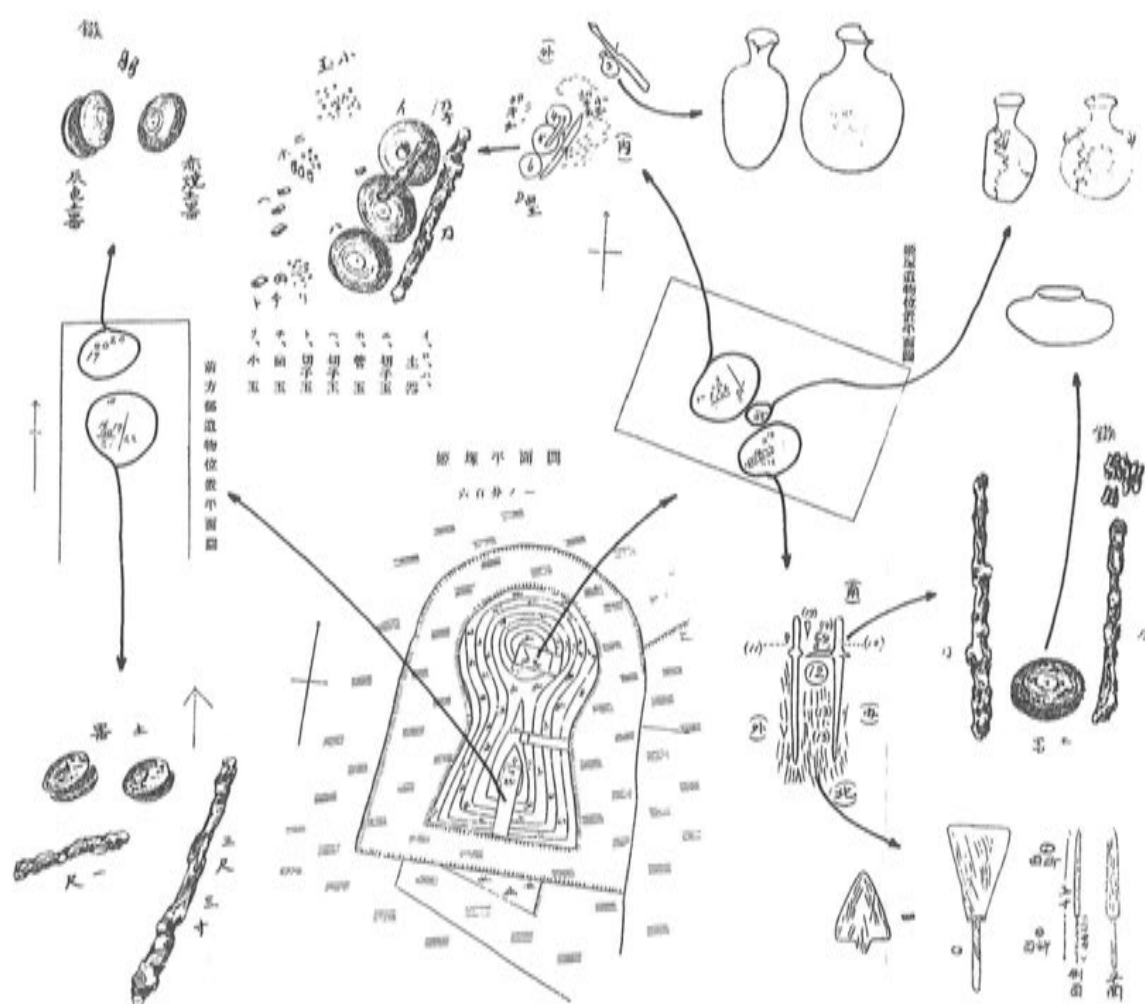


図4 大正時代の202号墳発掘調査の調査区と出土遺物（宮崎県総合博1988より転載）

たし。美しい旭^{あさひ}が上って、紅葉黄葉の榮えめでたく、午前10時ごろには小春日ののどかに、牛叱る農夫の声さえ厭には聞こえぬ。

僕の観たのはやはり姫塚だが、昨日、人夫の鍬の先の触れたるため、提瓶^{ひつびん}の半面を砕いた誤りに懲りてか、今西学士も大事を取って、容易に手を進めず。黒板博士は外套を脱ぎ上衣を脱ぎ、カブス（筆者註：シャツの袖口を留めるもの）を土だらけにして、土の中に膝折り敷きの両手で掻き出すやら、起って力限り掘り返していたが、『どうもシャベルるのは仕よいが、シャベルを使って掘るのは酷いね』と呼吸（いき）もきれぎれになる。喜田博士もマントと羽織を投げ出して、移植ごてで土を崩す。濱田学士も坂口教授も柴田学士も時々来て加勢をする。そのうちに長剣^{ちやうけん}一口と提瓶1個をはじめ、管玉・切子玉・瑠璃玉を幾つとなく得て、一行の欲^ほび一方ならず、人夫も『万歳万歳』を内々で唱える優しさ殊勝さ。

なおこの辺に何物かあるという見込みらしく、黒板博士はムダ口を利かなくなり、我を忘れ、周囲の人を忘れ、塚の外なる世界をも忘れたふう^{ふう}に掘りまわしていたが、三浦先生が『提瓶があれば蓋物のような土器があるはずだよ』と言われるに依^よじて『そう、いくら酒好きの御方であっても酒ばかりじゃ往

種別	番号	Tr	深さ	出土位置	出土状況	サイズ・器形等	写真
直刀	第1号	後円	約4尺 (1.21m)	中央よりやや西に寄った位置	漆喰様の粘土に包まれる。切先は東南、柄を西北。刃は南に向く。	長1尺8寸 (54.5cm)	
嚴瓮	第2号	後円			1号直刀の刃部に口縁が接する。	灰色。高6寸7分 (20.3cm)・直径5寸5分 (16.7cm)。両面に細く浅い渦紋を持つ。一面は左巻き渦紋、他一面は右巻き渦紋。肩部には円錐形の尖端である瘤状の突起であり、環が退化したものか。	写真2
嚴瓮		後円	約4尺 (1.21m)	1号直刀の背部。		口縁片	
嚴瓮	第3号	後円	3尺2寸あるいは3尺5寸 (0.97m) あるいは1.06m	1号直刀と直線の位置で、かつ直刀の中央より4尺 (1.21m)。	やや傾斜して立ち、内部には粒状になった土壌 (後に流入したものか)。	高約8寸 (24.2cm)・直径約6寸5分 (19.6cm)・肩部の環は環状、胴部の一面は平坦に近く、他一面は球面。製作時に作り箱 (はさ) めた痕跡を僅かに残す。球面側に焼台の痕跡あり。平坦面側から側面には軸あり。平坦面側には窯印あり。	
平瓮	第4号甲	後円	6尺 (1.81m)	1号直刀のほぼ中央より1尺 (30.3cm)。3点並列。	伏せた状態。	鼠色素焼き。つまみあり。直径4寸5分 (13.6cm)・高つまみ含め1寸3分 (3.94cm)。甲乙2枚重ねで甲が上。本来の組合せではない。	写真5
平瓮	第4号乙	後円				鼠色素焼き。つまみなし。直径3寸7分 (11.2cm)・外面に浅い左巻きの渦紋。甲乙2枚重ねで乙が下。	写真5
平瓮	第5号	後円				つまみなし。直径4寸9分 (14.8cm)・高1寸2分 (3.64cm)。外面に浅い左巻きの渦紋。	写真5
平瓮	第6号	後円				周縁に縁を持ち明らかに蓋。直径は内輪4寸3分 (13.0cm)・高1寸2分 (3.64cm)。外面に浅い左巻きの渦紋。	写真5
刀子か	第7号	後円		4～6号の東側、上部に接する。	平瓮に一部錆着。	両端は少し欠損。長6寸7分 (20.7cm)・幅5分余り (1.51cm)。	写真5
直刀		後円		平瓮の東側に接する。			写真5
瑠璃玉		後円		1号直刀と平瓮の中間。	※注意して掘削後、土壌水洗。		
小玉		後円					
水晶製切子玉7点		後円					
水晶製切子玉3点	第8号	後円		平瓮の西に、約4寸。	3点並列。		写真5
ガラス製勾玉1点	第9号	後円		6号平瓮の南約1尺。			
ガラス製管玉2点		後円					
琥珀製玉の破片		後円			水洗で回収。欠損面新しく、発掘時に破損。不正確ながら、他玉類とともにあったか？		
朱の痕跡		後円		1号直刀付近。			
直刀	第10号	後円	15号嚴瓮と同一平面 (4尺5寸か)	15号嚴瓮より約1尺 (30.3cm)。1・3・15号の3点がなす直線に対して直角の位置。	数多くの鉄鏃を積み重ねて並べ、その上に10・11号直刀を切先を北に向けて並行に置き、直刀の鐔の下に嚴瓮を伏せて置く。10号は直刀2点のうち、西側にあった。	長2尺8分 (8.48cm)、柄は約1寸8分 (5.45cm)。鐔は鉄製で宝珠形で長径2寸4分 (7.27cm)。透かし孔3箇所は貫通するが、他は錆で塞がる。	写真3
直刀	第11号	後円			10号に同じく、切先を北に向けて置く。11号は直刀2点のうち、東側にあった。	両端が少し欠損。現存長1尺7寸3分 (41.51cm)・柄部長2寸 (6.06cm)。鐔は非常に低く環状に近い。	
嚴瓮	第12号	後円			10・11号直刀の鐔の下に伏せて置く。口を下に、底を上に向けて出土。	甕形。座りよい。口径2寸8分 (8.48cm)・腹部径5寸 (15.1cm)・高2寸4分 (7.27cm)。底部中心より浅い左巻きの渦紋。	
数多くの鉄鏃	第13号	後円			10・11号直刀の切先の下に置かれる。多数あるのは11号の下。10号の下にもある。鏃の切先は南を向くものも数点あるが、腐食により全てがそうであるかは調査不能。	偏平で小刀様。全体の大多数を占める。 偏平で切先を展開する (図より見て台形)。数は少ない。 (図より見て三角鏃) 1点のみ。	写真3
鉄鏃様のもの	第14号	後円			10・11号直刀の柄の間には鉄鏃様のものがあつた。	腐食著しく全形不明。破片中に、鍍金された小鉄片があり、それには麻布も錆着する。	写真3
嚴瓮	第15号	後円	4尺5寸 (1.36m)	1号直刀・3号嚴瓮を結ぶ線上。3号嚴瓮より3尺5寸 (1.06m)。		2号に類似。	

表1 大正時代の西都原202号墳出土遺物の一覧表 (1)

種別	番号	T r	深さ	出土位置	出土状況	サイズ・器形等	写真
平盤	第16号	前方		22号直刀より約1尺 (30.3cm) 西。	碗2枚を重ねる。東西に並列のうち西側。2枚重ねの上側。	径4寸2分 (12.7cm)。鼠色素焼き。蓋形。	写真4
平盤	第16号	前方			2枚重ねの下側。	内径3寸7分 (11.2cm) で緑片あり。	写真4
平盤	第17号	前方			碗2枚を重ねる。東西に並列のうち東側。2枚重ねの上側。ややつれているため、上から見ると鳥打ち帽のよう。	径4寸2分 (12.7cm)。×印の窯印あり。	写真4
平盤	第17号	前方			2枚重ねの下側。	内径3寸5分 (10.6cm) で緑片あり。×印の窯印あり。	写真4
鉄鍬23本	第18号	前方		19号のそば。			
平盤	第19号	前方		16・17号より北で、22号直刀の中央より約8尺 (2.42m) の西北。	2組で並ぶうちの西側。重ねの下。	径4寸 (12.1cm)。赤色素焼き。	
平盤	第19号	前方			2組で並ぶうちの西側。重ねの上。	緑片あり。内径3寸2分 (9.69cm)。鼠色素焼き。	
平盤	第20号	前方			2組で並ぶうちの東側。重ねられる。	径4寸 (12.1cm)。	
平盤	第20号	前方				緑片あり。内径約3寸7分 (11.2cm)。	
鉄製刀子	第21号	前方		22号直刀より約1尺西。16号より南に5寸 (15.1cm)、17号より南に3寸 (9.09cm)。		全長8寸4分 (25.4cm)・茎長1寸7分 (5.15cm)。	写真4
直刀	第22号	前方	2尺5寸 (75.7cm)	平面位置は前方部の頂上。	切先は少し東に傾いて北に向く。刃は西面する。茎と鐔には鉄鍬様のもの付着。	全長3尺3寸 (9.99cm)・鐔の長さ2寸8分 (8.48cm) の宝珠形で透かし孔なし。	写真4

表2 大正時代の西都原202号墳出土遺物の一覧表(2)

くまいからね』と言うその言下に『出た出た、蓋物が出た』と聞く嬉しさ。すると小言奉行の三浦先生が『静かに静かに』とやり出して『割らんようをお願い申します』で一同が笑い出す。

傍観生もだんだん“古墳通”になって博士らに対してひとかど承知顔で説明をするのもあれば、盛んに“逆講演”をやるものもあるが、なかんずく新坂君の主張が面白い。それは穂北の農家や高岡地方では、霊舎に死人の好きなものを絵く慣習がある、例えば、酒好きには徳利を描き、煙草好きには煙草入れを描く。これは実物を入れる代わりだというのである。なるほど殉死に替える埴輪みたようなもので、一は経済問題、他は人情問題などと“逆”の“逆”をやるものもあったが、黒板博士が『君らの解釈の方がうまいよ』でまたまた大笑い。

笑っているうちに、また蓋物が並んで出る『やっ、出た』と言うほどもなく『また出たぞ』と言う。博士の帽子もシャツも泥まみれ。そしてその周辺には例の瑠璃玉や、切子玉や、水晶玉が続々と数知れず出る。出たといえば、県庁の江藤君がすぐ見取り図を作り、記録は紫洞君がノートに収め、実物は僕が萌黄の袋で受けるのだが、喜田博士は口が悪いので、それに“乞食袋”という名を命ける。しかし“こんな乞食”ならいつもしたいと思ううち『おい、袋』『おい、乞食』と右からも左からも声をかける。今年や乞食の当たり年。

蓋物の傍にまた長剣一口、その他方には水晶玉（六角あるいは八角で圭角の取れたもの、中には外から朱が入って美しい）が6つ出た。それを撮影していると、すぐ傍で掘っていた（同じ姫塚のうち）今西学士が『出た出た、凄しい物が出た』という。三浦先生もその方にいて、『出たのはいいが、毀さんように』と例の奉行を発揮し、ここで黒板の方を甲号とし、今西の方を乙号とし、出たものを別の容器に入れることを定めたので、記録と製図の忙しさ一方ならず。“乞食袋”も甲乙の2個となり、『おい、甲号の乞食』『おい、乙号の乞食』と呼ぶので『甲号の乞食』の時に『はい』と言って僕が行くのは、どうも『甲蔵の乞食』に聞こえるという人があったがどうだか。

閑話休題として、さて、その乙号の方からは馬具の一部（鉄環）鉄片、円釘、長刀、ほかに香炉形の蓋の無くなった土器（今よく焼酎を沸かす黒ジョカの浅いような形）が1つ、それと無数の鏝である。『どうもこの辺はヤジリが多いよ』と今西学士が言えは『余りに野次るべからず』と誰かが言って笑い出す。するとその辺にいる人が口々に野次りだしていろいろ斬新なのを出したが、『宮内省部では、家を掘り出した』という報告に対して『家の瓦だろう』と一人が言い『家の瓦の片の一つだろう』と一人が言えは『それでも家だといえはいえるだろう』とは知事様の傑作。

破るな、壊すなの声が始終に聞こえる『破ったら百年目だぞ』と知事が言う『千年目だ』と喜田博士が応じたのに対して『万年待ったとて分からぬようになるからね』はいよいよ出ていよいよ振るったが、一方また人夫が幾十人、その“前方”の方を掘っていたが、夕方（3時頃までに）出たのは3尺2寸の直刀を一口、他にまだこれというほどのものを見ぬ。（後略）

（かき括弧内ここまで『土中の日向（二）』日州新聞大正元年十二月二十八日記事より）

報告書から調査経過について概述すると、調査者は前日に同じで、午前9時に始業した。霜柱の除去から始まったが、若山甲蔵もその最中に現場へ到着している。作業員20人のうち、5人を110号墳（現在の169号墳）へ回し、3人で後円部の調査を進めた。その後の経過は、若山の記事どおりであり、前日の直刀・提瓶を取り上げた後、南方（甲号）・東方（乙号）に向かって掘り広げた結果、南方（甲号）では約6尺（約1.82m）表土下において、勾玉・切子玉・管玉・小玉・鉄刀・鉄鏃・須恵器等が出土、東方（乙号）では約4尺5寸（1.36m）表土下において、鉄刀・鉄鏃・須恵器等がそれぞれ出土した。小玉類は篩にかけて回収した。最終的には、甲乙とも、石槨の有無を探るため深く掘り下げている。前方部は、南方の墳裾側より掘り下げを開始し、頂部で遺物が出土した。

4. 大正元（1912）年12月27日晴れ

調査者は濱田耕作で、補助その他前日に同じ。午前9時に始業。後円部発掘区の区画は、深くなるにつれて平面積が小さくなったが、地表下約1丈1尺（3.33m）まで掘り下げた。その後、鉄棒で深さ4尺5寸（1.36m）まで探ったが、何らの遺物もなく、調査を終了した。前日に篩残した土壌は、さらに玉類を採取するため、宿である大阪屋まで馬3頭を使って送っている。埋葬施設の明白な痕跡は発見できなかったが、遺物の配列からは1基の埋葬施設の存在を考えている。

前方部については、後円部側に向かって掘り広げ、遺物が出土した。写真記録のうえ、取り上げ作業をする。午前11時から、くびれ部について、東側（墳裾）より幅6尺で掘り下げたが、何ら出土しなかった。202号墳の調査はここで終了し、午後より、作業員は21号墳（現在の72号墳）の調査へ移動している。

5. おわりに

ここまで、『土中の日向』に描かれた、当時の調査現場の人間味あふれる息遣いととも、大正元（1912）年の西都原202号墳の発掘調査について振り返ってきた。特に、若山甲蔵の文筆力の賜物といえる、関係者の人柄等を窺わせるような会話や立ち居振る舞い等については、考古学史の一側面を伝えるものとして非常に意味あるものであろう。少なくとも、日本初の、本格的な古墳の学術調査の様子につ

いて、より一層の理解に繋がれば幸いである。

最後に、西都原202号墳の最新調査成果について、大正時代の調査と関連する点を中心に紹介することで、結びとしたい。

大正時代の調査からおよそ100年後にあたる平成20～24（2008～2012）年にかけて、宮崎県教育委員会では、古墳の築造時期や詳細な墳丘形状と規模、大正時代の発掘調査の再検証等を目的に、地中レーダー探査と発掘調査を実施してきた。

特に、大正時代にあけられた調査坑については、後円部・前方部・くびれ部のいずれも再精査し、後円部においては、断片的に残された木棺直葬の痕跡が2基以上見出された。大正時代の調査に伴う土はすべて篩がけした。大正時代に見逃された琥珀製玉の残骸（表1参照）等はずいぶん発見には至らなかったとはいえ、多くの土器片や玉類を回収できた。これらの遺物から、202号墳について、6世紀後半に築造され、7世紀前半まで埋葬が行われたと判明した（宮崎県教育委員会2012他）。

謝辞 本稿を進めるにあたり、次の諸氏・諸機関に資料検索等でお世話になった。文末になったが、記して感謝の意を表したい（敬称略・五十音順）。

石川悦雄 犬木 努 堀口佳菜子 朽木郁朗 若山浩章 高鍋町立図書館 宮崎県立図書館

註

- 1) 人物の一覧の作成は、『西都原発掘75周年展』図録及び『宮崎県大観』による。
- 2) 調査から3年後に発行された『宮崎県大観』の「姫塚」の項で、「発掘物は徹古館に蔵めたり」と記載される。
- 3) 202号墳調査時の写真のうち、今回、収録したのは、発掘調査報告書（宮崎県1915）掲載写真のみとした。なお、写真1・5は京都大学考古学研究室提供、写真3・4は宮崎県教育委員会保管、写真2・6は発掘調査報告書（宮崎県1915）より転載である。
- 4) 『土中の日向（一）』（日州新聞大正元年12月27日分）について、管見の限り、宮崎県立図書館のみ原本を保管している。しかし、該当箇所について下端が各文列とも1文字分カットされているため、残念なことに全文を読むことが叶っていない。本稿では、前後の文脈で復元可能な箇所は文字を補い、それ以外は□とした。

主な参考文献

- 斎藤 忠1983「解説」『宮崎県西都原古墳調査報告書』第一書房
日本古文化研究所（濱田耕作ほか）1940『日本古文化研究所報告10 西都原古墳の調査』
北郷泰道2005『西都原古墳群 南九州屈指の大古墳群』日本の遺跡1、同成社
宮崎県1915『宮崎県児湯郡西都原古墳調査報告』（宮崎県1926『西都原史蹟調査報告』で再版、西都市教育委員会・西都原古墳研究所（斎藤忠編）1983『宮崎県西都原古墳調査報告書』第一書房で復刻）
宮崎県総合博物館（石川悦雄編）1988『西都原発掘75周年展』図録
若山光宣1983「若山甲蔵」『宮崎県大百科事典』宮崎日日新聞社
宮崎県大観編集部1915『宮崎県大観』（宮武喜三太1964『宮崎県大観』青潮社で復刻）
（多くの研究書等については列記できていない点をお許しいただきたい）

韓国江原道東海岸部の古墳見学記

甲斐貴充

はじめに

県立西都原考古博物館と大韓民国国立^{チョンウオン}中原文化財研究所は2008（平成20）年12月に日韓学術文化交流協定を締結した。この協定の柱の一つとして、古墳時代の南九州と韓国中原地域（忠清北道^{チュンギョ}忠州市周辺）両地域における多様性のある墓制の比較検討を掲げ、共同研究を実施してきた。特に、古墳時代の朝鮮半島及び日本列島を通じての横穴系埋葬施設の受容と展開の様相は、多様性のある墓制をもつ両地域に共通する大きな問題として挙げられる。

南九州における横穴系埋葬施設の受容は、古墳時代後期以降、東海岸部を中心に採用される横穴式石室の出現がその開始時期だと考えられてきた。しかし、近年では、古墳時代前期末～中期初頭頃、南九州の特有墓制である地下式横穴墓の発生に関しても、朝鮮半島からの横穴系埋葬施設の思想が影響したとも考えられるようになってきた。南九州における横穴系埋葬施設の受容と展開については、一元的ではない多元的な様相が想定され、日本列島だけでなく朝鮮半島も視野に入れた比較検討が必要と考えている。

今年度の韓国国立^{チョンウオン}中原文化財研究所との交流事業では、2012（平成24）年11月19日～22日の4日間にわたり、中原地域を中心とした三国～統一新羅時代の遺跡の現地調査を実施したが、今回はその中で、2012（平成24）年11月20日～21日の2日間、関東大学校博物館^{イサンヌ}李相洙学芸室長案内のもと、大韓民国国立中原文化財研究所の都義喆^{ドウィテョル}学芸研究士とともに、韓国嶺東地方にあたる江原道東海岸部の三国～統一新羅時代の古墳や山城などの遺跡の現地調査を行った。本稿では、その中でも特に、中原地方とは様相の異なる江原道東海岸部の横穴系埋葬施設をもつ古墳群（三陟^{サムシク}史直洞古墳群、江陵^{ヤンリョウ}領津里・坊内里古墳群、江陵草堂洞古墳群）について記述することとする。



第1図 現地調査を実施した古墳群位置図

1. 三陟^{サムシク}史直洞古墳群

三陟^{サムシク}市は、朝鮮半島北東部の江原道南部、韓国東部を縦断する太白山脈の東側の東海岸部に位置する。三陟地方は、6世紀初頭頃に新羅の悉直州が設置されるなど、5～6世紀頃における新羅の東海岸方面進出の上で、重要な位置を占めていたと考えられる。史直洞古墳群は、三陟市南部、海岸線から直

線で約2kmと海岸に近く、三陟市内を貫流する五十川南側の海拔約15～25mの丘陵東斜面上に位置する〔第1図-1〕。1994年に関東大学校博物館が地表調査を実施し、3基の古墳が分布することが確認された（関東大学校博物館・三陟市1994）〔第2図〕。

現在は、古墳群の位置する丘陵斜面裾部まで住宅が建ち並んでいる。今回の現地調査では、史直陵（悉直郡王妃）として整備^(a1)されている3号墳〔写真1〕前を通り、さらに丘陵上部にある1号墳を目指して急勾配の丘陵斜面を上った。現在、丘陵斜面は、3号墳周辺や畑地以外、草木が生い茂り、案内者がいなければ困難な状況であった。

1号墳は、墳丘の大部分が削平され、石室天井部が露出した状態で放置されていた。地表調査報告書（関東大学校博物館・三陟市1994）によると、

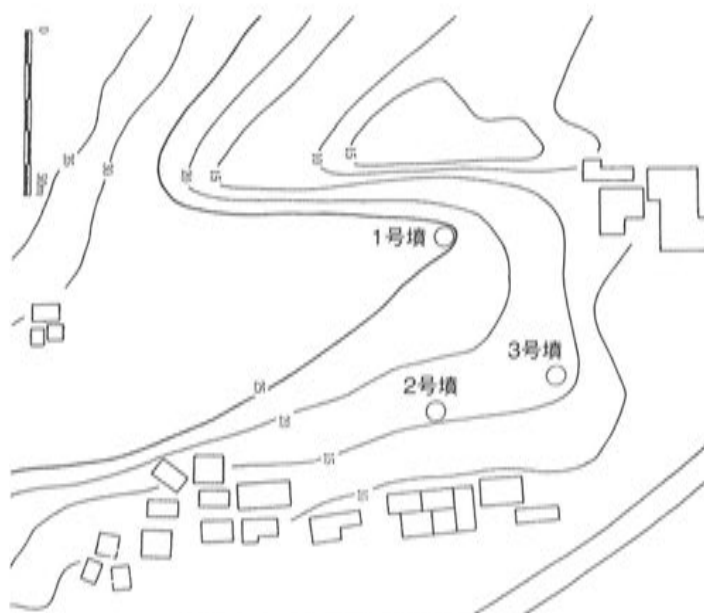
1号墳の墳丘盛土は、盗掘によってほぼ消失しているが、墳端部分が少し残存しており、直径約12mの円墳と推定している。また、トレンチ調査によって外護列石が確認されている〔第3図右〕。墳丘封土が消失しているため、天井石3枚を含んだ石室が露出している。石室は、全長約460cm・幅約190cm・高さ約165cm、平面形が長方形、西側の短辺部分に入口構造を備える竪穴系横口式石室の類と考えられる〔第3図〕。現段階で確認されている三陟地方の古墳の中で最大規模の墳丘をもつ古墳である。石室



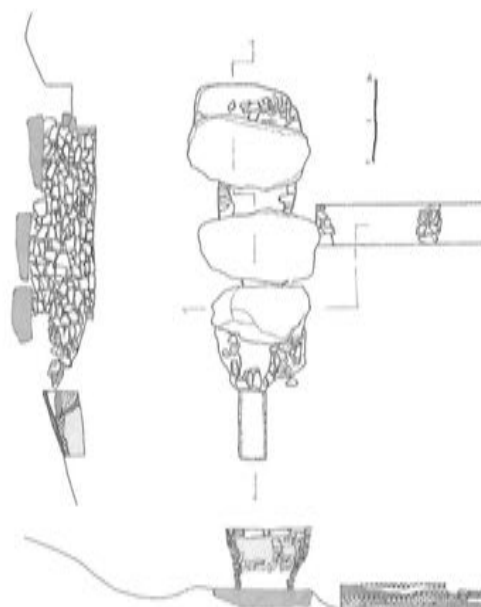
写真1 整備された史直洞古墳群3号墳



写真2 史直洞古墳群1号墳横口式石室内部



第2図 史直洞古墳群分布図



第3図 史直洞1号墳横口式石室

の側壁は、大部分が残存しており、小口状に割石を10～12段程度積んでいる〔写真2〕。石室は、側壁の下部が垂直気味に立ち上がっているが、上部は内傾している。しかし、穹隆状天井形ではなく、3枚の巨大板状の天井石が示すように平天井形となる。

先述したように、古墳は石室も含めて盗掘されていたので、遺物は確認されず、明確な古墳の築造時期を比定することができない。しかし、史直洞古墳群の周辺にある三陟市葛夜山古墳群や東海市秋岩洞古墳群などの類例を勘案すると、史直洞古墳群は5世紀後半頃～6世紀代に築造されたと考えられる。

この時期は、新羅が東海岸部方面に勢力の拡大を目指した時期であり、それに伴い横穴系埋葬施設が拡散する時期ともいえる。史直洞古墳群の調査成果は、悉直州が設置された時期と部分的に重複する可能性もあり、そうした政治的勢力の拡大と横穴系埋葬施設の伝播が重複する可能性も十分に考えられるが、中原地域をはじめ、受容する横穴系埋葬施設の形態が一樣であるとは言えず、詳細な検討は必要であると言える。

2. ^{カンヌン ヤンジンリ}江陵 領津里古墳群

江陵市は、江原道東部、三陟市より北方に位置する。江陵地域は、6世紀前半頃には何瑟羅州を設置したとされ、6世紀代には新羅の勢力下にあったと考えられる。しかし、6世紀後半の新羅の東海岸方面への勢力拡大以前は、高句麗の影響下の時期もあったと想定されている。古墳が築造される4～6世紀のこの地域は、新羅と高句麗の影響が複雑に入り組んだ地域であると言える。

領津里古墳群は、本来、西側に隣接する坊内里古墳群と一つの古墳群を形成していたのだが、近年の道路建設により丘陵が分断され、別の古墳群となっている。古墳群は、江陵市街地北部の連谷面領津里の連谷川左岸河口付近の標高約30mの丘陵上に位置し、丘陵東側は海岸部に面する〔第1図-2〕。

今回の現地調査では、国道7号線沿いから急な丘陵を上り、丘陵尾根上〔写真3〕に分布する石室墳2基を見学した。10号墓は〔写真4〕、前方部が破壊されており、詳細は不明瞭であるが、横口式の石室墓か石槨墓と考えられる。壁面は割石の小口積みで、内傾しながら立ち上がる側壁をもつ。天井形態は、大きな板石状の天井石を有する平天井形である〔写真5〕。明確には言えないが、



写真3 領津里古墳群



写真4 領津里10号墓

同行した李相洙氏によれば、6世紀後半から7世紀前半頃の新羅系と高句麗系の構造が混合した石室と言える。

報告書等（江陵大学校博物館1996・江陵大学校博物館・江陵市1996）によると、領津里・坊内里の両古墳群は、5世紀前半から7世紀代の長期間にわたり造営された古墳群である。中でも造営開始時期の5世紀前半は、江陵地域で古い段階のひとつと考えられ、土墳（木槨・木棺）墓を主たる埋葬施設として採用している。また、両古墳群は、土墳墓・石槨墓・横口式石槨墓・横口式石室墓などの多様な墓制から構成されており、概ね、土墳墓→石槨墓→横口式石槨墓・横口式石室墓といったある程度の時期的変遷が想定される。しかし、報告書によると、土墳墓と石槨墓は時期的に重複する例が多く、時期差だけでなく階層差であるとも想定している（江陵大学校博物館・江陵市1996）。

古墳群から慶州系新羅土器が多く出土することから、新羅の影響下に成立した古墳群といえる。しかし、慶州系土器を模倣した在地製土器が大部分を占めることから、完全な統制下ではなく、比較的柔軟性のある状況下であったと想定されている。江陵地域の周辺では、こうした地域の状況を下地として、横穴系埋葬施設は受容され、展開していったと考えられる。

3. 江陵 ^{チョクサンドン} 草堂洞古墳群

草堂洞古墳群は、江原道江陵市の北東部、鏡浦湖南側の標高40m前後の丘陵上と標高5m前後の低位砂丘上に位置し、海岸までは1km以内と近い〔第1図-3〕。現在まで、横口式を含む石槨墓を中心として、土墳墓（土墳木棺墓・土墳木槨墓）や甕棺墓など140基以上が調査されている。古墳群からは、新羅の中心地、慶州で製作されたと考えられる山(出)字形金銅冠や銀製翼形冠装飾、金銅製環頭大刀などが出土しており、新羅との深い関連が想起され、江陵地域の中心的な役割を担っていたと推測できる。特に、草堂洞B-16号墓から出土した山(出)字形金銅冠は、鹿角形立飾を持ち、慶州の王墓クラスと考えられる大型積石木槨墓の皇南大塚・金冠塚・瑞鳳塚・天馬塚・金鈴塚などから出土する例と類似点が多く、5世紀末～6世紀初頭頃に時期比定される（東1997・吉井2010）。草堂洞古墳群は、現段階でこの山(出)字形金銅冠が出土した北限地であり、新羅、特に慶州との関連性については、疑いのないものである^(註2)。

今回の現地調査では、低位砂丘上の4号墓を見学した。4号墓



写真5 領津里10号墓の内部



写真6 草堂洞4号墓付近



写真7 草堂洞4号墓の現況

は、現在、江原道教育研修院の南東方向の入口道路東側の松林内に位置する[写真6]。記録によると、この4号墓周辺の丘陵に、多数の古墳があったとされ、多くは盗掘の災禍を受けたとされている。現在、墳丘が一部残っているが、過去に盗掘され、石槨部と蓋石の一部が露出した状態であった[写真7]。報告書(江陵大学校博物館・文化財管理局・江陵市1995、江原文化財研究所2005・2006・2007)によると、墳丘の復元直径は約20m、埋葬主体部である横口式石槨は長さ約5.4m・幅約1m・深さ約1mである。石槨は壁面を割石と川原石を精巧に積んでおり、床には川原石が敷かれていた。出土遺物は、大刀や鉄製馬具類(鐙・雲珠・杏葉)などであったとされる。

草堂洞古墳群は、4世紀後半から造営を開始したと考えられ、領津里古墳群などともに、江陵地域における初期段階の古墳群と言える。古墳群の墓制は、三国時代の前段階の原三国時代における朝鮮半島東南部などで確認される土壙木棺墓や土壙木槨墓から系譜をひく土壙墓から石槨墓へと変遷する図式が成立すると考えられがちであるが、土壙墓は5世紀以降の土器類を副葬する例なども確認されることから、石槨墓の補助的墓制である可能性が指摘され、この図式は確定できない。しかし、先述したように、新羅との強い関連が指摘できる5世紀末～6世紀初頭頃の山(出)字形金銅冠などが出土していることから、少なからず当該期には、新羅との深い関係があったことが想定できる。また、6世紀代には、横口式石槨墓が築造され、草堂洞古墳群においても、横穴系埋葬施設が受容されていたことが看取できる。しかし、現段階で、横口式もしくは横穴式の石室墓は確認されておらず、同古墳群内での著しい展開性はなかったと思われる。

4. 三陟・江陵地域の古墳群から見えるもの

今回の現地調査において、韓国江原道東海岸部の三陟・江陵地域の3つの古墳群を見学することができた。見学を実施した墳墓は限定的であり、各古墳群の全容をも把握できない状況でこの地域の様相を概観することは困難である。しかし、臆気ながらも各古墳群における横穴系埋葬施設の受容と展開の様相を中心に概観することができた。

韓国の嶺南地方や嶺東地方などは、6世紀における新羅の勢力拡大と横穴系埋葬施設の受容がある程度の相関関係をもって展開されていたと考えられている。当館との研究交流事業を実施している韓国国立中原文化財研究所がフィールドの一つとしている韓国中原地方においては、墳丘や石室構造の類似性などから、6世紀半ばから7世紀初頭頃の新羅支配層の集団墓が想定される^{ミファムリ}棲岩里古墳群・^{ハクファムリ}下九岩里古墳群のように、新羅の中心地である慶州地域との強い関連性が古墳構造に反映されている。一方、時期は異なるが、今回現地調査を行った三陟・江陵地域において、横穴系埋葬施設の受容の様相をはじめ、慶州地域との強い関連性は古墳の構造からはうかがえない。しかし、短脚高坏をはじめとする土器類や、草堂洞古墳群で出土した山(出)字形金銅冠などの出土遺物などは、慶州地域との関連性を明確に示す。先述したような新羅の勢力拡大と横穴系埋葬施設の関連性は、必ずしも合致するとは現段階では断言できないが、三陟・江陵地域における横穴系埋葬施設の受容時期や新羅と関連性の強い出土遺物の時期は、5世紀後半以降に多く、新羅の勢力拡大時期と重なる部分は多く、無関係ではないと考えられる。

そのように考えると、三陟・江陵地域を含む嶺東地方は、5世紀後半から6世紀代にかけて、新羅の勢力拡大に伴い、より多くの新羅系文化を受け入れていった可能性がある。しかし、古墳構造から考え

ると、中原地域などと異なり、地域独自ともいえるような比較的緩やかな受容形態がうかがえる。こうした差違は、時期差に起因するものとも考えられるが、新羅による地域支配形態の差も反映していると考えられる。

日本列島の古墳時代において、こうした朝鮮半島の三国時代のような地域支配形態の確認は明確にできないが、中央勢力と地域勢力との関係について、地域間に差があることは間違いない。今後も日韓両国における古墳の様相を比較検討することによって、我々が研究対象地域としている南九州の古墳時代像に迫ることができればと考えている。そうした事を考える上で、今回の古墳の現地調査は重要な比較検討資料の蓄積となった。

おわりに

本稿を作成するにあたり、韓国国立中原文化財研究所の魚昌善・都義喆・金福喜の各氏及び韓国関東大学校博物館の李相洙氏には、現地調査時の案内や文献の提供など、多大な協力を賜りました。記して感謝申し上げます。

【註】

- (1) 史直洞3号墳は、現在、史直陵(悉直郡王妃)に比定され整備されている。しかし、悉直郡王妃は10世紀以降の人物とされ、古墳の築造された時代と一致しない。
- (2) 山(出)字形金銅冠について、慶州で製作されたものが周辺地域の首長にもたらされたとする考えや、慶州の製品を周辺勢力が模倣して独自に製作したと推定する考えがある(吉井2010)。吉井氏は、いずれにしても「新羅中央勢力が用いたのと同じ形態の冠を模倣・製作しようとした意図が存在したことを認めなければならないであろう。」と考えている。

【引用参考文献】

- 東潮1997『高句麗考古学研究』吉川弘文館
- 関東大学校博物館・三陟市1994『三陟 史直洞 古墳群 地表調査報告書』関東大学校博物館学術叢書6
- 江陵大学校博物館・文化財管理局・江陵市1995『江陵の歴史的文化遺跡』江陵大学校博物館学術叢書11冊
- 江陵大学校博物館1996『江陵 坊内里 住居址』江陵大学校博物館学術叢書6冊
- 江陵大学校博物館・江陵市1996『江陵文化遺跡発掘調査報告書(試掘・緊急収拾調査)』江陵大学校博物館学術叢書14冊
- 江陵大学校博物館2007『江陵 領津里古墳群』
- 江原文化財研究所2005『江陵 草堂洞遺跡Ⅰ』
- 江原文化財研究所2006『江陵 草堂洞遺跡Ⅱ』
- 江原文化財研究所2007『江陵 草堂洞遺跡Ⅲ』
- 国立文化財研究所(韓国)2001『영진리고분군(江陵 領津里古墳群)』『韓国考古学事典』
- 国立文化財研究所(韓国)2009『방내리유적(江陵 坊内里遺蹟)』『초당동고분군(江陵 草堂洞古墳群)』『사직동고분(三陟 史直洞古墳)』『韓国考古学事典 古墳篇』
- 吉井秀夫2010『古代朝鮮墳墓にみる国家形成』京都大学学術出版会

日向国の溜池に関する考察

安 藤 正 純

1 はじめに

昨年度の研究紀要で、筆者は、西都原台地の谷間の湧水について検討した¹。台地や丘陵の谷間からの湧水は飲水のみならず農業用水として広く利用されており²、特に水稻耕作を実施する際には、旱魃などに備えるために、溜池（ためいけ）という貯水施設をつくり、そこに湧水などを灌漑用水として蓄える場合も多い³。

しかし現状の溜池の存在数から見ると、近畿や中・四国地方といった高密度に分布する地域と比較すると、宮崎県を含む南九州では、密度が低いという特徴が見られ⁴、文献からの研究も進んでいないので、その実態について考えてみる必要があると筆者自身は考えている。

今回の研究紀要では、中世～近世の県内の古文書の中にみえる池・堤・溜池について客観的な検討を加える一方で、碑文や口伝なども補助的資料として活用することで、日向国の農業用水の問題、とくに灌漑用の溜池の実像に迫っていくことにする。

2 灌漑用の池に関する研究史

（1）溜池の歴史についての一般的理解

学術的な一般的な見解では、溜池は、台地や丘陵の谷間の奥で小さな谷や小川を堰き止めてつくった「谷池」に対して、平地に築堤し天水⁵をも蓄えることができる「皿池」（さらいけ）の2種類とし、谷池が皿池に先行するとしている⁶。

谷間に築堤された溜池は、『記・紀』の時代にもさかのぼる古い起源があるとも言われる⁷。日本村落史の研究者木村礎によると、『日本書紀』の崇神紀・垂仁紀において、灌漑用の「池」をつくると同時に「池溝」（水路）の造成が見られるとし、「条里制」が施行された畿内の平野部を中心とした範囲で、「山麓沿いに溝を掘ってそこに河川（中小河川）からの水を導き、それを微高地の池に溜め、その池水を下の平坦地に小溝をもって落とす」とする。また、『常陸国風土記』の行方郡の条における「夜刀の神」の話では、「壬生連麿、初めて其の谷を占めて、池の堤を築かしめき」の記載から、谷の開田は、谷の頂部の方に池の堤を設けて実施していたとする⁸。しかし、地域的には畿内や東国（関東）のことであり、神話の部類に属するものでもあるから、日向国に関して、このことから何らかの法則を導き出せるものではない。

一方の皿池は戦国時代末から江戸時代初期に築造が始まるとされ、「平地の十分に耕地化しうる良地をあえて毀して築造し、底は浅いため、一旦貯水が滞れば、降雨以外に、他の溜池水や河川水の補給を得なければ十分には機能を果たしえないもの」であるとされる⁹。

話は変わるが、農業用水の供給源を別のものに求める見方もある。前述の木村礎によると、中世日本の「台地と谷からなる村は、きわめて多く、日本の村のひとつの典型ともいえる」とし、このような村の用水は「台地から降りていく途中にある湧水による」としている。そして湧水が集合してできた「小河川が造成した小さな谷田（サコ田、タナ田）」が水稻耕作の場所となったと言う¹⁰。

その後、中世の終わり頃になって、一段低い沖積平野の開発が、戦国大名による河川の氾濫を防ぐ“治水”に伴って実施されたとし、その際に重要視されたのは、川幅が比較的狭く、水量がますます豊富で、氾濫も多くない河川から直接に用水をとることであった¹¹⁾。

さらに、日本の村落構造を研究した永原慶二によると、南九州のようなシラス地帯では、「沖積平地の美田は、みな江戸前期頃に普及した新技術によって、上流部から長距離水路を開設して造成した新田にほかならない」としている¹²⁾。つまり河川の上流部に井堰をつくり、そこから下流に向けて用水路を引くのである。西都市の杉安堰や宮崎市の松井水路などがこれにあたると考えられる¹³⁾。

永原の見解に関してはやや誇張した表現も見られるが、南九州の平野部の開発においては、溜池よりはむしろ井堰が重要であったとしているのであり、おおよそ歴史学界における一般的な認識になっていると思われる¹⁴⁾。

(2)『宮崎県史』と『新富町史』の“池がかり”

日向国の溜池に関しては、『宮崎県史 通史編 中世』(第1章 第2節「四 荘園の消長と荘域の比定」)と『新富町史 通史編』(第2章「中世」 第1節「新富地方の開発の歴史的概観」)に、前述の一般的認識とは全く違ったことが述べられている。

まず、『宮崎県史 通史編』によると、日向国の平野部では、大淀川、一ツ瀬川、小丸川などの大きな河川ごとに個々の文化圏が成立していたとされるが、海水が遡上しやすく塩害が起こりやすいことから、平野部では井戸を掘っても飲料水に適さない状況であり、また当然のことながら、灌漑にも利用されていない状況があったとされ、古来より、稲作よりはむしろ台地上での畑作が盛んであったとしている。そのような状況下でも、平野部に点在する台地(「原・はる」)に刻まれた谷(「迫・さこ」)では、そこからの湧水を利用することで、中世の水田開発が進んでいたとされ、「中世末までは、いずれも丘陵地帯に深くくいこんだ「迫」に池をつくり、そこから「溝」を整備し下流へ開発を進めるという形をとっている。したがって、荘園の開発と“池がかり”は、この地の開発では切り離せない」としている。

しかし、宮崎平野の荘園とその領域内の「池」及び「溝」との関係を示すデータを全て、明治時代に編集された平部嶠南の『日向地誌』から作成したとしていることは問題である。明治時代の状況からさかのぼって中世の池や溝の状況を推測する方法は科学的とはいえないし、また中世社会において、谷(「迫」)の湧水を利用した農業が実施されていたことは事実であろうが、谷(「迫」)があったから人工的な“池”もあった筈とする理論は客観的には否定せざるを得ないだろう。さらには、溝を整備して下流へ開発を進めるという大規模な土木工事が実施されていたということも、明確な根拠が示されていない。

同じようなことは『新富町史』にも言える。「谷」と「迫」の地形を利用して築造された「堰堤」(えんてい=堤防)で、古代・中世以来、“池”がつくられていたとするが、堰堤の出典も定かでなく、池の名称も『日向地誌』を引用したものである。

宮崎県内の近・現代の築堤では谷間に造成する溜池が多くなっているのも事実ではあるが¹⁵⁾、そのような印象を頼りに、古代・中世に関する何らかの法則を導き出そうとするのは危険であろう。

	地域	溜池名称	築堤以前の状態	完成時期	(世紀)	備考	出典
1	西都市妻町	稚児殿池	沼田で灌漑の便が悪い	正長年間	15世紀前半	築堤にともなう人柱伝説あり	『土地改良史』
2	宮崎市佐土原町	巨田の大池	「越網」による鴨取りが行われていた	天正年間	16世紀後半	旅の僧が人柱の娘を助けたという伝説あり	『碑が語る』
3	東諸県郡綾町大字入野	古屋溜池		慶長年間	16世紀末～17世紀初	鬼森神社の境内に弘化3年(1846)2月建立の田の神あり	『土地改良史』
4	宮崎市江平1丁目付近	江平東池		慶長年間?	16世紀末～17世紀初	築堤は延岡藩主が有馬氏(1614～92)であった時代より古いとみられる	『土地改良史』
5	宮崎市大瀬町	陀羅池	天水利用の農業	寛永年間	17世紀前半	1940 補修事業	『碑が語る』
6	東諸県郡高岡町大字穆佐	山田溜池		寛文元年頃	17世紀後半	上手からの土砂が堆積して貯水量が年々減少したので、昭和2年に揚水機灌漑に変更	『土地改良史』
7	宮崎市倉岡	浦田溜池		元禄年間(修繕工事)	17世紀後半	溜池は逐次新しく池を隣接地に築造して4個となっているが、古くなるにつれて樋替等の修繕を繰り返したり高上げ工事を行っていた	『土地改良史』
8	児湯郡高鍋町	檜谷溜池	水を引く大きな川がない	元禄14年か15年	18世紀前半	高鍋藩では1700年頃、集約的に井堰や溜池、用水路の完成をみている、この時は、上・中・下の3つの溜池がつくられた	『土地改良史』 『碑が語る』
9	北諸県郡高城町	観音池(定満池)	水田の灌漑用水が天水に依存していた	享保年間(『土地改良史』) 天保年間(『碑が語る』)	18世紀前半	造成にともなう漠然とした言い伝えはあるが、それを裏付ける文書は残っていない	『土地改良史』
10	東諸県郡高岡町	冷窪ノ池		享保年間	18世紀前半	毎年のように泥土が堆積して池が埋まり、灌漑用水が不足するようになった	『土地改良史』
11	宮崎市芳土	田池(狐池)		天保年間	19世紀前半	(元々の)池(沼)の真ん中に土手を築いて溜池にした	『土地改良史』
12	西臼杵郡高千穂町大字岩戸	岩戸溜池		嘉永元年	19世紀前半	天保10(1840)「鉄初」ともいう	『土地改良史』
13	宮崎市生目	新井出溜池		嘉永年間	19世紀中頃	「間越田用水路」と同じく、椎半七の築設という	『土地改良史』
14	串間市福島町	福島溜池		嘉永年間	19世紀中頃	嘉永年間に4ヶ所の溜池が築造されていた	『土地改良史』
15	北諸県郡山之口町	山之口の溜池		嘉永2年以降	19世紀中頃	花の木地区に順に7つの溜池をつくっていった	『土地改良史』
16	宮崎市下北方町	沖田溜池		文久2年	19世紀後半	大正5年の豪雨で堤防が50間にわたって壊されたので大修繕を加え、翌6年に竣工した	『土地改良史』
17	宮崎市島之内	植柱中之池		元治元年	19世紀後半	元治元年のことは「樋堀替修繕」という	『土地改良史』
18	延岡市	菰田池・新池	農業はほとんど天水にたよっていた	元治2年	19世紀後半	菰田池は面積が小さい割に水量が豊富で、よく氾濫し農業にはつかえなかった	『碑が語る』

第1表 宮崎県の代表的溜池に残る伝承

3 碑文・口伝からみる日向国の溜池

日向国の灌漑設備の歴史を考える上では、昭和53年発行の『宮崎県土地改良史』と平成9年刊行の『碑が語りかける水と土』（いずれも宮崎県による調査）は重要な資料である。県内を代表する溜池・井堰・用水路に関する碑文の記録、口伝などの民俗伝承を収集しており、この両書に掲載されているデータから溜池を抽出してみると第1表のようになる。

県内の伝承において、中世に起源をもつ溜池は15世紀前半の稚児ヶ池、16世紀後半の巨田の大池があるが、2つの溜池を実地踏査してみても、元々の規模がどの程度であったか判別できないのは勿論のこと、近世から近・現代にかけて修築を重ねていることから、中世にあったとされる姿を垣間見ることは当然ながら不可能である。つまり、築造伝承を簡単に信じることはできない。

むしろここで注目すべきは、堤防築造以前の状態に関する伝承の方である。稚児ヶ池では「沼田」を利用した農業、巨田の大池では「越網」による鴨取りが行われていたとする。前者は自然の沼地を利用した稲作が実施されていた可能性を示し、後者は狩猟の場であったことを示すものである。

また、近世起源の伝承をもつ溜池に関しても、宮崎市大瀬町の陀羅池、都城市高城町（北諸県郡高城町）の観音池（定満池）、延岡市の菰田池・新池では、それ以前の状況が「天水」（雨水）を利用した農業であったことを伝えている。

碑文や口伝の検討から想起される溜池利用以前の農業とは、天然の沼地をそのまま利用するか、または天水（雨水）に頼る¹⁶情景が浮かび上がることになる。九州では水田としても利用した沼地のことを一般的に「牟田（むた）」と呼ぶことが多いようであり、現状の地名としても多く残っている¹⁷。

4 古文書にみえる中世の池

それでは実際の県内の中世文書の上では、池はどのように記されているのであろうか。『宮崎県史料編 中世1』・『中世2』からそれらを抽出してみよう。

例えば、新名爪八幡宮文書の応永3（1396）年「新名爪別符内検取帳」では「池東」「池頭」、鬼束文書の応永32（1425）年「中郷西方本田市王丸内検馬上取帳」では「池袋」「池田」「松本池端」「赤池」、同文書の寛正6（1465）年「中郷西方木前取帳」では「池尻北」「池尻開河成」「池袋」「池ミテ」「池袋ノ南」、樺山文書の文明12（1480）年「三俣院南方并浮免坪付（折紙）」で「にし池」、野辺文書の天正5（1577）年「伊集院忠棟外四名連署坪付（折紙）」で「池ませ」の語句が見られる。つまり「溜池」という語句ではなく、単なる「池」ばかりである。

それでは、これらの池は実際には何を意味するものであろうか。注目すべきは、上記の「中郷西方木前取帳」に「二段（反）」の「池尻開河成」¹⁸があることだろう。池の隅（一部）を利用して水田としたが、洪水によって文字通りの河になってしまったのである。つまり、もとを辿れば、池の正体は河の氾濫しやすい低地にあった沼（三日月湖、河跡湖などを含む）であった¹⁹ので、大雨などにより元々の「河」にもどる訳である。池に流れ込む水がもともと湧水程度であるならば、河になる筈がないのである。

なお、溜池を造成する際には築堤を伴う土木工事が欠かせないが、それを県内の中世文書の中に見出せるのであろうか。

まず前提として考えなければならないのは、堤防には人工のものと自然のものがあることだろう。籠瀬良明（1989）によると、沖積平野に含まれる微高地を意味する地形用語を「自然堤防」と言い、昭和初期頃に国内の地理学会で使用され始めたとされ、その後、中世の城跡の地形をさぐる研究からこの語句は歴史分野でも認知されていったと指摘している。かつての洪水による河川の氾濫の結果、大地がえぐられ、流路の両岸にあふれ出した土砂が微高地（自然堤防）を築き、それに沿って集落がつけられたとするのである²⁰。

前述の中世文書の上で堤防を探してみると、例えば「新名爪別符内検取帳」では「坂堤」「堤尻」「堤内」「小堤」、「中郷西方本田市王丸内検馬上取帳」では「堤面」、「中郷西方木前取帳」では「つゝミノ面」の記載がありそれに併せて耕地面積が記されている。ただし人手により築堤を実施したという記録は無いので、これらは人工のものでなく、自然堤防だと考える方が無難である。「堤内」は自然堤防の内側、「堤面」は自然堤防に面した耕地ではないだろうか。

実際、これらは税を賦課する上での単位（地名）としての側面が重要なものであり、短絡的に堤防の人工造成に関連付けられるものではない。

5 近世日向国の溜池

先述の通り、（あくまでも）伝承上では、西都市の稚児ヶ池と、宮崎市佐土原町の巨田の大池が中世に人工堤防が築かれた可能性のある溜池であるが、確実な証拠がない以上は、日向国の築堤をともなう溜池の起源を中世にもとめることは無理がある。

そこで今度は、近世（江戸時代）の文書から溜池の出現期をさぐっていくことにする。まだ史料調査の範囲が広がっていないので、出典は『宮崎県史 史料編 近世』に限られ、また、高鍋藩・飫肥藩・（日向国）薩摩藩領に関しては、溜池の文書を見いだしていない。以下は現段階での経過報告として、延岡藩・佐土原藩・幕府領の文書を紹介する。

なお、参考史料として明治時代の『日向地誌』を引用している部分もある。

（1）延岡藩

（a）宮崎平野部

『宮崎県史 史料編 近世3』によると、正徳2（1712）年の「宮崎郡細江村差出帳」、延享4（1747）年の「宮崎郡細江村明細帳」に当時、延岡藩領であった宮崎市大字細江の「村況」が記載されている。

正徳2年「差出帳」においては、「隠山」と「彦野」に「用水溜池」があり、隠山の方は「潰地とてハ無御座候」であり、彦野の方は田地を潰（つぶ）して造成したとされる。前者は田地をつぶす必要の無い場所（村はずれ等）を利用し、後者は田地の多い（村の）中心部に立地したと思われる。

なお、溜池の形態を推測してみると、隠山のものは谷間に造成された谷池、彦野のものは平地の起伏を利用した皿池である。

その後、延享4（1747）年の「明細帳」では、彦野溜池の記述は欠けており、「字口ヶ迫」溜池の記述が加わる。なお、迫に造成されたことからすれば形態は谷池であることが想起される。

記述内容は正徳2年段階よりも詳細になっている。「字隠山」の「用水溜池」は元禄8（1695）年の

造成とされ、「土手」（＝堤）の長さが17間（1間＝約2mで計算した場合、約34m）で高さが4間（約8m）となり、一方の「字口ヶ迫」の「用水溜池」は元禄11（1698）年に造成されたとされ、「土手」の長さが18間（約36m）、高さが3間半（約7m）としている。池の広さは、横が13間から18間、長さが150間から180間としていることから、幅が30m前後、長さが300m程度であったことが判明する。それぞれ約10町（＝10ヘクタール）の田に用水を供給したことも記載されている。

ただし造成年代が“元禄年間”にさかのぼるとする記述は、特に「字口ヶ迫」溜池は正徳2年「差出帳」にその名称が無いことから、信憑性には欠けると言わざるをえない。

（b）県北部

一方、延岡藩では、（県北部の）臼杵郡の「村明細」も残っているので、「溜池」に関する記載がある村について紹介する。

正徳2（1712）年の庵川村（東臼杵郡門川町庵川）、三川内村（延岡市北浦町三川内）、古江村（延岡市北浦町古江）の「指出帳」（「差出帳」）、安政3（1856）年の黒木村（東臼杵郡美郷町黒木）の「差出帳扣」にはいずれも「溜池無御座候」とあり、いずれも当該期に溜池が無かったことが分かる。この4村に関しては、明治時代に編集された『日向地誌』にも溜池に関する記述は無いので、それが裏付けられる。

（2）佐土原藩

『宮崎県史 史料編 近世6』によると、幕末の文久元（1861）年7月11日の「田方定納申論之覚」（桑原家文書）の中に「山を越野を越御領内中無残御廻村、每名田畠溜池溝筋現ニ御見分被成下候上、勸農方彼是之儀御懇切ニ御教諭被下候儀」とあり、藩の役人が田畠（畑）・溜池・溝（用水路）を「見分」したことが記されている。『史料編 近世6』の解題によれば、この史料は勸農をすすめ、人倫を説いたものであるという。

溜池の具体的な所在地は不明であるが、佐土原藩は、江戸時代を通じて県央部、特に宮崎平野の中央部からその西側山間部にかけての範囲を領有しているため、この地域内のものである。ただし、「溜池」が谷池であったか皿池であったかは不明である。

（3）幕府領

（a）宮崎平野部

前述の延岡藩領細江村は、延享4（1747）年、幕府領と延岡藩領に分割されており、享和2（1802）年から文化3（1806）年にかけての「日向国那珂郡・宮崎郡惣代細江村庄屋諸覚綴」は『宮崎県史 史料編 近世6』で幕府領のものとして紹介されている。

享和3（1803）年の記述では、「宮崎郡細江村之儀、天水所ニ而少々之溜池等御座候得共、廿日余之旱魃ニ相成候得者旱損多」とあり、その後も旱魃が続いたので「難渋」しているとして、「新規溜池」をつくることを願いでるとしている。

簡略に言うと、宮崎市大字細江はもともと天水（雨水）に頼る農業をしているので、（既存の）小

な溜池では20日程度の旱魃にも耐えられないから、新規の溜池が必要だということである。

さらに文化元（1804）年の記述では、「新規溜池」をつくる場所を探すために「村中空地者勿論山間谷々御私領境迄場所御見分之上」とあることから、村の（中央部の）空地だけでなく、村境の山間部の谷間まで「見分」したとしている。つまり、当該期の細江村においては、溜池をつくる場所は、山間部の谷間よりは、むしろ平地の方が好ましかったと解釈できる史料である。

また西都市大字南方に伝わる「西都市南方生産森林組合所蔵文書」によると、寛保3（1743）年以降幕末まで幕府領であった穂北村と南方村の「年貢割付状」と「年貢皆済目録」（※年号は、宝暦6（1756）年、明和7（1770）年、安永4（1775）年、寛政12（1800）年、天保5（1834）年の記載がある）で「溜池床」の記載がみえる。

「溜池床」の記載の部分では、「溝成引」「溝敷引」の語句が付随してみえるので、干上がった溜池の跡に用水路を引いたことだと推測できるが、溜池の水が無くなって「床」が見えた原因が、洪水などで堤防が壊れたためなのか、日照りが続いたためなのか、または意図的に堤防を壊したのかは不明である。

（b）県北部

『資料編 近世6』の天保9（1838）年の「日向国臼杵郡七ヶ村明細帳」に、幕府領の臼杵郡7村（細嶋町を加えると8町村、現在はすべて日向市）の詳細が記されており、その中で各村の溜池の状況が分かる。一村ごとにまとめてみると以下ようになる。

- ①富高村 現日向市の富高である。溜池に関する記述は無いが、「井堰」と「用水溝」が「三ヶ所」づつ存在するとのことなので、河川から引水する灌漑を実施していたことになる。ちなみに『日向地誌』では、富高村の湖沼として「普通寺池」と「干蔵口池」の記載があり、その両池に堤防があったと記されているので、天保9（1838）年以降、幕末から明治初期の間に溜池造成がなされたのだろう。
- ②日知屋村 現日向市の日知屋である。「溜池囲仕立候場所無御座候」「溜池無御座候」の記述がある。つまり溜池をつくるような広い場所が無いので、造成できなかったのである。「用水無御座候、当村之儀年々旱損仕、百姓難儀仕候得共」ともあるので、井堰や用水溝も無く、農業は天水に頼る以外は無かったと思われる。ただし、『日向地誌』では「正手池」「長谷池」があり、明治初期までの間に溜池造成があったようである。
- ③細嶋町 現日向市の細嶋である。日知屋村に属した町であったが、独立した項目で「用水溜池無御座候」の記述がある。用水溝も溜池も無いということなので、日知屋村と同じく天水に頼る農業が想定される。
- ④財光寺村 現日向市の財光寺である。「長百貳拾七間（約230m）」「横三拾間（約55m）」「深サ壹丈（約3.3m）」の「溜池」が「壱ヶ所」の記述がある。七ヶ村の中で、唯一の溜池である。「井堰堤仕立候場所無御座候」ともあるので、この村は地理的に井堰造成に適した河川が無かったのである。よって、溜池を造成することで用水を確保したのであるが、谷池なのか皿池なのかは不明である。なお、『日向地誌』では池（溜池）は「池ノ内池」「平

山北ノ池」「平山南ノ池」の三ヶ所となり増えている。

- ⑤平岩村 現日向市の平岩である。「溜池無御座候」の記述がある。しかし、「井堰」が「三ヶ所」、「用水溝」が「五ヶ所」あるので、ある程度の用水は確保できていたと思われる。『日向地誌』でも溜池の記述は無い。
- ⑥塩見村 現日向市の塩見である。「溜池無御座候」の記述がある。「用水溝」「井堰」ともに「壱ヶ所」づつあるとのことなので、平岩村と同様の状況が窺われる。『日向地誌』でも溜池の記述は無い。
- ⑦坪屋村 現日向市東郷町の坪谷である。「溜池無御座候」の記述がある。数は不明ながら「井堰」があり、「用水溝」は「五ヶ所」あったとしている。平岩村・塩見村と同様の状況が窺われる。『日向地誌』でも溜池の記述は無い。
- ⑧下三ヶ村 現日向市東郷町下三ヶであり、坪谷の西部（山側）に位置する。虫損により、天保の「明細帳」の記録は欠如している。しかし『日向地誌』でも溜池の記述は無いことから、海岸部から離れた坪屋村と同じく、近世においても溜池は無かった可能性が高い。

天保年間においては、財光寺村の一ヶ所以外には溜池が無かったということなので、これらの地域では、19世紀前半の段階においても灌漑用水を溜池に頼ることはあまり無かったと言えるのではないだろうか。溜池をつくるような広い場所が無かったことも要因である。

また、日知屋村（細嶋町を含む）では、井堰・用水溝も無く農業はほぼ天水に頼る状況であったことが推測され、富高村・平岩村・塩見村・坪屋村の4村では、灌漑に井堰・用水溝を利用していることも特徴として挙げられるであろう。

6 『内藤家文書目録』にみえる溜池

明治大学所蔵の内藤家文書は全45,000点もの史料があり、近世延岡藩の詳細が分かる貴重な文書で、近世日向国の研究には欠かせないものである。ただし『宮崎県史 史料編 近世2』への掲載は75点のみで、そこに溜池の記載は無いようなので、それ以外の文書を点検していく作業が必要である。

しかし時間的な制約から、全史料の内容を吟味することは不可能であるので、木村礎を中心に編集された『明治大学所蔵内藤家文書目録』²¹の「普請」の項目において、文書の題名の中に「溜池」の記載があるものを第2表に抽出した。

文書の具体的内容については今後の調査に委ねられるが、造成時期と場所を示す程度の指標（参考）として掲載する。なお該当項目においては、内藤家が延岡藩主となる前に、江戸の「幸橋溜池」の「普請手伝」をしていたことを示す題名も多く見られるが、日向国のことではないので表には掲載しなかった。

18世紀前半のものが1点、19世紀前半のものが1点であり、残りのものは幕末である。掲載されている地名も「宮崎郡」「池内村」「上別府村」「瓜生野村」「下北方村」までが宮崎平野部のもの、慶応3（1867）年の「川嶋村」のみが県北の東臼杵郡（現延岡市）である。

延岡藩内藤氏の治世下において、溜池史料は宮崎平野部の方が時代的に古く、幕末において県北でも

その記述が見られるようになるという傾向は判別できる。

なお川嶋村の溜池の名は、目録上では「須佐門大内溜池」と「須佐門金ヶ池」であるが、『日向地誌』の「川島(嶋)村」の項目で確認できるは、「薦田池」「池ノ内池」「須佐東ノ池」「須佐西ノ池」「差木池」の5つである。「須佐」の語句に共通性が見えるものもあるが、慶応3年の溜池が、そのまま明治時代の『日向地誌』の溜池につながっていくかどうかは不明である。

ちなみに『日向地誌』では、「須佐東ノ池」は「縦凡二十五間（約50m）」「横二十間（約40m）」で堤の高さ、池の深さはともに「二丈七尺（約8m）」であり、「須佐西ノ池」は「縦凡八間（約16m）」「横七間（約14m）」で堤の高さ、池の深さはともに「一丈（約3m）」である。他の3つの池もおおよそ縦横の長さに大きなずれが無く、池の深さも「一丈二尺（約3.6m）」から「二丈五尺（約7.5m）」程度である。そのことからすると、これらは全て「皿池」であり、明治時代の「川島(嶋)村」の溜池に“谷池”は無かったと考えることができる。

史料番号	文書の題名	日付	西暦
普請 64	宮崎郡村々川除溜池普請ヶ所附帳	延享4年4月8日	1747
普請 74	宮崎郡村々溜池箇所付帳	文政10年	1827
普請 91	宮崎郡溜池御普請御備米書出	文久元年3月7日	1861
普請 92	池内村溜池御普請御入用	文久元年7月	1861
普請 93	上別府村池御普請御入用	文久3年7月	1863
普請 94	瓜生野村外八ヶ村溜池自普請入用小前帳亥七月	文久3年7月	1863
普請 95	宮崎郡溜池御普請御備銀書出	慶応3年7月	1867
普請 96	下北方村外十ヶ村溜池講川除自普請入用帳	慶応3年7月	1867
普請 101	須佐門大内谷溜池場内積書上帳 川嶋村	慶応3年正月	1867
普請 102	川嶋村新溜池御普請覚書	慶応3年6月	1867
普請 104	川嶋村須佐門大内谷溜池へ水掛諸普請正御入用	慶応3年3月9日	1867
普請 106	川嶋村須佐門大内谷溜池掛御普請勘定帳芳賀泰之助	慶応3年3月10日	1867
普請 107	川嶋村須佐門大内谷溜池並御普請入用押借銀返納銀穀台帳 掛合芳賀泰之助	慶応3年3月10日	1867
普請 108	須佐門金ヶ池溝普請見積書	慶応3年3月	1867
普請 109	須佐門金ヶ池普請諸入用品書上	慶応3年3月・閏4月	1867
普請 111	須佐門新溜池出来返上納銀穀延期願	慶応3年3月10日	1867

第2表 内藤家文書目録にみえる溜池

7 まとめ

本稿において、県内の近世史料を検討することで、筆者としては、溜池をつくる場所として、丘陵が多く平地の狭い県北部よりも、広い平地の多い県央部の方が適していたとの結論を得た。

また、県内の近世の溜池の構造としては、台地や丘陵の谷間につくられた「谷池」ではなく平地の起伏を利用することで造成する、底の浅い「皿池」が好まれていた可能性が高いと考える。狭い谷間で、ある程度の水量を蓄えようとすれば、高い頑強な堤防が求められるが、平地では、低い堤防でも広い場所を確保することでそれが可能になるからである。どうしても平地で場所が確保できない時に、台地や丘陵の谷間で「谷池」を造成していたのであろう。

さらに、「溝」（用水路）を引くことを考えても、もともと田地をつぶして造成される皿池は、その周囲の田地まで近いことになるので、溝が短くて済み、維持管理していく場合にも低コストで運用できることになる。

また、時期的な面からみると、日向国の溜池関連資料に関しては、現状では、中世や近世初期に該当するものが無いことから考えると、「谷池」であっても「皿池」であっても、その造成がなされ始めたのは近世初期よりも後の時代ではないかと思われ、さらに、それによって、天水（雨水）に頼る農業が廃れてしまう訳でもないと考えている。

【参考文献】

- 平部崎南 1929 『日向地誌』日向地誌刊行会
『明治大学所蔵内藤家文書目録』 1965 明治大学
永原慶二 「中世村落の構造と領主制—小村＝散居型村落の場合—」（『日本中世社会構造の研究』 1973 岩波書店）
喜多村俊夫 『日本灌漑水利慣行の史的研究』 1973 岩波書店
『宮崎県土地改良史』 1978 宮崎県農政水産部耕地課
木村礎 『村の語る日本の歴史 古代・中世編』 1983 そしえて文庫8
木村礎 『村の語る日本の歴史 近世編①』 1983 そしえて文庫9
『国史大辞典』第5巻・第6巻 1985 吉川弘文館
籠瀬良明 1990 『自然堤防の諸類型—河岸平野と水害—』 古今書院
『新富町史 通史編』 1992 新富町
『宮崎県史 史料編 近世2』 1993 宮崎県
『宮崎県史 史料編 近世3』 1994 宮崎県
農業土木研究会 1996 『大地への刻印～この島国は如何にして我々の生存基盤となったか～』 全国土地改良事業団体連合会
『宮崎県史 史料編 近世6』 1997 宮崎県
『宮崎県史 通史編 中世』 1998 宮崎県
『碑が語りかける 水と土』 1997 宮崎県農村建設課・宮崎県土地改良事業団体連合会
内田和子 2003 『日本のため池—防災と環境保全—』 海青社
内田和子 2008 『ため池—その多面的機能と活用—』 財団法人 農林統計協会
市川秀之 2009 『歴史のなかの狭山池—最古の溜池と地域社会—』 清文堂
安藤正純 2012 「日向国神代絵図」にみえる湧水について 『宮崎県立西都原考古博物館 研究紀要 第8号』

【註】

- 1 安藤（2012）より。
- 2 木村（1983）『近世編①』の「第2章 村絵図の世界」（八「さまざまな水(1)―飲水―」、九「さまざまな水(2)―用・排水―」）より。同書では、このような「小台地の中腹や下側部あるいは扇状地のつけ根あたりに集中的に存在している」湧水を「泉」として定義しており、「村人の飲水であり用水でもあった」としている。
- 3 木村（同上）。溜池の問題は日本農業の基幹である「稲作」と深く関わる問題としている。
- 4 内田（2003）による。なお、このデータは、中～近世以来の状況もある程度、反映している可能性が高いので、日向国では溜池が歴史的に身近なものでは無かったと推測することもできる。
- 5 『国史大辞典 6』（1985）の「皿池」より。
- 6 農業土木研究会（1996）でも註5と同じ記述がある。なお市川（2009）では「谷池」「皿池」の分類に詳しい。
- 7 『国史大辞典 6』（1985）の「皿池」より。
- 8 木村（1983）『古代・中世編』より。
- 9 喜多村（1973）より。
- 10 木村（1983）『古代・中世編』より。
- 11 木村（1983）『近世編①』より。
- 12 永原（1973）より。
- 13 『宮崎県土地改良史』（1978）によると、杉安堰が享保7（1722）年に第一期工事終了。松井水路が寛永17（1640）年完成としている。
- 14 木村（1983）『近世編①』で、静岡県掛川市の溜池に関して、「近世の築造になるものが多かったことは、村ごとの明細帳を見ていけばわかる」とし、中世ではなく近世の築造であることを強調している。冒頭で述べた通り、近畿・中国・四国地方以外は、溜池よりも井堰（とそれに連なる用水路）の方が灌漑用水として重要視されていたのではないだろうか。
- 15 農業土木研究会（1996）で、築堤技術が特に幕末以降、近・現代において発展したことが示されている。また、『宮崎県土地改良史』（1978）と『碑が語りかける 水と土』（1997）から見ても、現代の宮崎県内の溜池が特に、近・現代において修築が重ねられている状況が読み取れる。現代において、集落生活の邪魔にならない谷間に溜池を造成することが多いのは事実であろう。
- 16 木村（1983）『近世編①』では、昭和34（1959）年の静岡県掛川市内における水掛け状況は、河川灌漑52%、溜池40%、湧水・天水その他8%であったとし、現代農業においても天水が灌漑において重要な要素の一つであることを示している。
- 17 木村（1983）『近世編①』で、「湿田は一般的にはあまり良くない田である。谷田の多くは台地の下側部から出る湧水を利用した湿田である。その湧水の近くは水が冷たすぎてハゲタになる。（中略）また大河川沿岸低地の田の多くも湿田である。中には沼のような田もある。このような田には、ドロタ・ドブタ・アゼナシダ・アワラなど全国的にさまざまな呼び名がつけられている」とされ、湿田＝沼田の呼び名が多岐にわたっていることが判明する。なお『宮崎県史 通史編 中世』（1998）では、県内の低湿地で耕作可能なものを「牟田」（＝むた）と定義しているようである。
- 18 『国史大辞典 5』（1985）の「荒田」の項目で、洪水による荒廃田は特に「川成（かわなり）」とよばれたとする。中世の荘園や公領の土地検注目録には、見（現）作田と区別された各種の荒田がみえ、川成もその一つであるとする。
- 19 農業土木研究会（1996）では、「新田開発が関東平野に展開した近世は、（利根川の流れによってつくられた）湖沼と周辺の低湿地を対象に開発が進められ、水田地帯が形成された」としている。
- 20 農業土木研究会（1996）[96頁]では、「農民たちは古くから自然堤防などの微高地に集落と耕地をつくってきた」としている。
- 21 『宮崎県史 史料編 近世2』（1993）の巻頭解題より。

体験「カラムシから布をつくろうⅡ～紡錘を使って糸を撚る～」

島 木 良 浩

1 はじめに

「昔の人はどんなものを着ていたのですか。」という博物館を見学に来た小学生の素朴な質問がこの講座のきっかけとなった。4年前の春のことである。

1年間、試行錯誤を重ねながら、3年前に体験講座「カラムシから布をつくろう」を開講した。書籍やインターネットで調べ、繊維を採り、紐状の糸にして、アングリ織りでコースターを作成した。最初は、上手いかなかったが2年目、3年目になると少しずつ細くきれいな糸にすることができるようになり、受講者の満足度もあがったように思える。しかし、課題も見つかった。繊維から糸にする段階で、1年目、2年目は、手で撚りをかけていた。手で撚りをかけると時間がかかり過ぎて講座の時間内では仕上がらず、家に持ち帰り、撚りをかけて持参する参加者もいた。

そこで、3年目の今年は、紡錘を使って撚りをかけ糸を巻き取る方法に挑戦した。参加者にとっては、初めての紡錘だったので、失敗もあったが、しばらくすると上手に糸を撚ることができるようになり、時間内に糸作りまで終了することができた。

紡錘を使うにあたって、報告書や書籍で調べてみた。最初から紡錘車として使うことを目的として作るものと土器などを転用して使うものがあることがわかった。講座では、最初から紡錘車として使用する目的で、粘土で形をつくり、孔をあけ、焼成して作ったものを使用した。しかし、土器を転用したものは、どうなのだろうか。という疑問がわいてきた。そこで、紡錘車として作ったもの（専用紡錘車）と土器の底部などを転用したもの（転用紡錘車）は、どちらが使いやすいのか、作りやすいのかという実験も行ったので、その結果もあわせて紹介する。

2 体験講座「カラムシから布をつくろう」

「カラムシから布をつくろう」講座の詳細は、宮崎県立西都原考古博物館研究紀要第8号（2012.3）に詳しく掲載しているので、ここでは、簡単な流れのみを紹介する。

（1）講座の実際 一日目「カラムシから糸を作る」

- ①カラムシを刈り取る。
- ②刈り取ったカラムシの葉を取り除く。
- ③葉を取り除いた茎を水に約2～3時間つける。
- ④茎から皮を剥ぎ取る。
- ⑤剥いだ皮は小さく括って、再び水に約2時間つけておく。
- ⑥剥いだ皮を金具で引き、肉質部（緑色の表皮）をそぎ落とし繊維質を残す。これを「苧引き（おひき）」という。
- ⑦乾燥させる。
- ⑧細かく裂いて糸にする

※乾燥したものを細かく裂いたあと、一度、水で湿らせながら撚りをかけ糸にする。

(2) 二日目「カラムシのひもを使ってコースターをつくろう」

①アングインを使ってコースターをつくる

「アングイン」とは、縄文時代に使われた布のことで、縦糸は今回撚った糸、横糸は撚っていないカラムシをそのまま使った。参加者は、専用の道具を使い、横糸に縦糸を巻き付ける独特方法（ハの字織り）でコースター作りを行った。

3 糸を撚る

(1) 手で撚りをかける

1年目、2年目は手で撚りをかけ、糸を作ったので、その方法を紹介する。

ア、乾燥させた繊維を作りたい太さに裂き、撚りやすくするために水につける。

イ、水につけた繊維2本を取り出し、テープなどでテーブルに固定する。

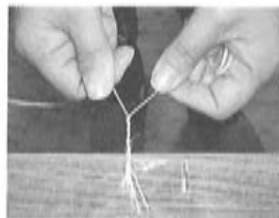
ウ、2本を同じ方向に撚りをかけていく。

エ、右回りで撚りをかけた場合は、撚りをかけた状態のまま、2本の糸を反時計回りに交叉させる。

左回りで撚りをかけた場合は、逆に交叉させる。



テーブルに固定



同じ方向に撚りをかける



交叉させる



完成した糸

(2) 紡錘を使って撚りをかける

①紡錘とは

回転運動によって繊維に撚りをかける道具が紡錘（つむ）である。回転軸とこれにはめ込む円盤状の弾み車からなる。回転軸を「紡莖（ぼうけい）」、軸にはめて回転に惰性を与えるはずみ車の役割を果たすものを「紡錘車（ぼうすいしゃ）・紡輪（ぼうりん）」と呼称する。

②専用紡錘車を作る。

ア、土器で円盤状の物をつくる。

※山崎上ノ原第2遺跡Ⅱ・宇都第3遺跡出土の土製紡錘車を参考に作成。（第1図・第1表）

イ、棒で真ん中に孔をあける。

ウ、乾燥させ、焼成する。

エ、紡莖を作成する。

※紡莖は出土していないため、孔経にあわせて箸や火起こしで使う棒で作成。紡莖の上端部分で糸をひとひねりして輪をつくってから上端にからませる方法もあるが、初心者には、輪をつくって上端にからませるのに時間がかかったり、外すときに紡錘を離してしまい失敗したりするので今回は、紡莖の上端部分に鉤を作った。



粘土を円盤状に成形



穿孔



専用紡錘車を使った紡錘

③転用紡錘車を作る。

ア. 土器を製作する。※今回は底部のみを製作。

※筆無遺跡出土の土器の転用紡錘車を参考に作成（第1図・第1表）

イ. 乾燥させ、焼成する。

ウ. 参考にする遺物の大きさにあわせて割っていく。

※割れないように慎重に石で叩き、形を整える。

エ. 石錐を使い、孔をあける。

オ. 孔径に合うように紡茎を作成する。



粘土で土器の底部を作成



石を使い円く成形して紡錘車を作成



石錐で穿孔



完成した転用紡錘車



転用紡錘車を使った紡錘

③紡錘の使い方

糸に撚りがかかるにあたっては、まず糸を湿らせておく必要がある。湿っていないと撚りはかからない。特に、カラムシなどの草皮・樹皮など植物性の糸を作る場合は重要である。

右利きの人が右手で紡茎を持ち、時計の回転方向に回すものと仮定する。

ア. 紡茎の紡錘車直上部分に糸の先端を結び固定し、紡茎の上端の鉤に糸をかけて紡錘ごと吊り下げる。

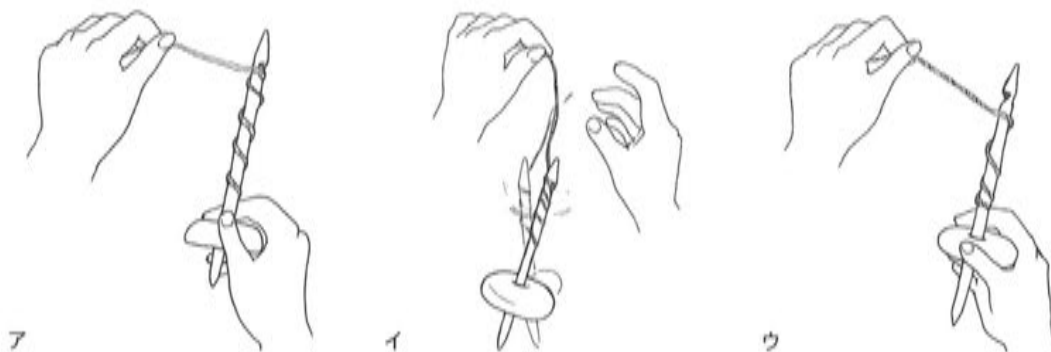
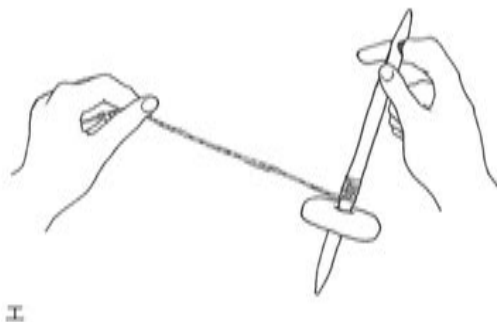
イ. 紡茎上端の30～40cm ぐらいの部分を手で指2本で押さえる。そして、右手で紡茎を回すと、紡茎の回転が紡茎の上端から糸に伝わり、下から順に糸に撚りがかかり、左手で押さえた部分まで撚りが

行き渡る。適当に右手で回転を続ける。

ウ、撚りがかかったら紡茎上端の糸を鉤からはずす。

エ、紡茎の紡鍾車直上部に出来上がった糸を巻く。

オ、紡茎の上端の鉤に糸を引っかけて紡鍾車を吊り下げ、イ・ウ・エを繰り返す。



巻き取った状態



完成した糸

4 実験の結果から

(1) 専用紡鍾車

参考にする紡鍾車の大きさにするために粘土の重さを量り、定規で直径を測り、円くしていき最後に孔をあけた。要した時間は約10分。3日ほど乾燥させて、今回は、窯で焼成した。今回の講座では、この紡鍾車を使ったので、参加者も上手く撚ることができた。

現在では、容易に粘土も手に入るし、定規や計りを利用して簡単に製作することができる。しかし、実際に粘土から作るとなると大変な手間がかかる。「土器を野焼きでつくろう」という体験・実験講座を行ったが、職員が粘土を手に入れ、砂などを混ぜて練り、何日も寝かせてまた、練り直すという作業を行い、ようやく講座で使用する粘土を完成させた。その間、約1ヶ月を要した。この講座の時にもいくつか土製紡鍾車を作ったが、土器を作るときなどに、一緒に紡鍾車を作ったのではないかと考えられる。ただし、土器は、乾燥に約2～3週間かかるが、紡鍾車の場合は2～3日で乾くので、食事を作る時の火でも焼成は十分可能である。

(2) 転用紡鍾車

参考にする転用紡鍾車よりも大きめの底部を3個作成し乾燥、焼成した。石を利用し、底部を割らな

いように慎重に細かく砕きながら円くしていった。思ったよりも簡単に円くすることができ、1個にかかる時間は約10～15分であった。しかし、3個目の底部は、やや分厚く作りすぎたため、参考とする紡錘車よりかなり重くなってしまった。軽くするため作業を進めている途中で高台部分が割れてしまい、高台無しの紡錘車にかわってしまった。完成までに約40分要した。

次は、穿孔である。1,2個目は、頁岩で石錐を作り、穿孔を試みるがなかなかできず、薄く作ったことで力を入れすぎて割れてしまった。3個目は、ホルンフェルス製の石錐を作り、挑戦した。約10分で孔をあけることができた。底部だけでなく、土器の体部を利用しての紡錘車も作ったが、やはり成形から穿孔まで約20分で完成した。早速、転用紡錘車を使って、糸に撚りをかけてみた。専用紡錘車と変わらず、撚りをかけることができた。

以前、古代食作りで使用していた土器が、割れたため倉庫に置いていたものでも挑戦してみた。体部は、前述したとおり紡錘車として転用することができた。底部は分厚かったが、もろくなっていたので、慎重に成形していたが、途中で割れてしまった。

土器がどのような状態であるかも考慮する必要がある。また、土器の厚さが均一な部分を使った方が、回転させた時のバランスがとれるので、土器のどの部分が紡錘車として活用できるのか見極めることも大事なことであろう。その点では、底部が最適であると考えられる。

5 おわりに

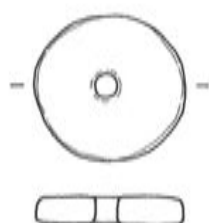
今回の実験で、専用紡錘車はもちろん、転用紡錘車も糸に撚りをかける道具としては、十分役立つことがわかった。今後は、上質のカラムシの繊維を採る技術や繊維を長くつなぎ合わせていく「績む（うむ）」方法も身につけたい。紡錘車に関しては、粘土の質や乾燥後・焼成後の大きさ、重さの変化の検証、穿孔に使う道具の工夫等さらに実験を重ね、「カラムシから子供服をつくろう。」に挑戦したい。

謝辞

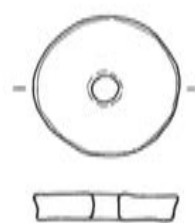
宮崎市教育委員会 岸田優子氏には、文献収集及び紡錘車資料についてご教示いただいた。文末であるが、記して感謝の意を表したい。

参考文献

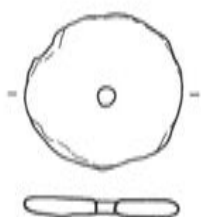
- 東村純子 2011 『考古学からみた古代日本の紡織』 六一書房
- 竹内晶子 1989 『弥生の布を織る 機織りの考古学』 東京大学出版会
- 大田区立郷土博物館編2002 『ものづくりの考古学－原始・古代の人々の知恵と工夫－』 東京美術
- 黒須亜希子 2012 『古墳時代の考古学5 時代を支えた生産と技術 機織り』 同成社
- 福田泰典 2004 『宇都第3遺跡・横井市中原遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター第85集
- 福田泰典他 2008 『筆無遺跡』 宮崎県埋蔵文化財センター第156集
- 柳田晴子 『山崎上ノ原第2遺跡Ⅱ』 宮崎県埋蔵文化財センター 第130集



1 山崎上ノ原第2遺跡Ⅱ



2 山崎上ノ原第2遺跡Ⅱ



3 宇都第3遺跡



4 筆無遺跡



第1図 参考資料実測図 S=1/3

番号	径	器高	孔径	重量	備考
1	5.9cm	1.1cm	0.9cm	43 g	片面が平らで、胎土が密。その反対面の孔の周辺がもりあがっている。
2	5.7cm	1cm	1.1cm	37 g	側面に指で強くなでられたようなあとが残る。片面の孔の周囲がわずかにもりあがる。
3	6.3cm	0.9cm	0.7cm	32 g	側縁部の欠損が目立つ。中心には、径約0.7cmの焼成前の穿孔が認められる。
4	7.1cm	1.8cm	0.9cm	56 g	黒色土器・高台付碗の底部を転用している。外周一部が欠損している。

第1表 参考資料計測表

【資料紹介】

都城市香禅寺地下式横穴墓出土鉄鏃に残る縫い目のある平絹

嶋 田 史 子

1. はじめに

宮崎県都城市高城町に所在する香禅寺地下式横穴墓は、1958年に宮崎県教育委員会によって発掘調査が行われ、地下式板石積石墓、地下式横穴墓が各1基検出されている。地下式板石積石墓からは、剣、鉄鏃、土器片が、地下式横穴墓からは、剣、鉄鏃が出土している（石川1959、鈴木1959、宮崎県1993）。その後、2009年に西都原考古博物館より刊行されているデータベース報告書において、香禅寺地下式横穴墓出土遺物についての報告がある^{※1)}。当報告書での掲載遺物は、2号地下式横穴墓と遺構不明分の計16点である。データベース報告書掲載遺物についての時期は5世紀代～6世紀代とされている（宮崎県立西都原考古博物館2009）。

今回取り扱う鉄鏃^{※2)}、当館の登録番号KO-016とされ、器種不明分として他2点の遺物とひとまとまりに扱われている。出土遺構は不明である。

この鉄鏃には錆化した繊維が良好に残っており、詳細観察した結果、織物の端部を縫い合わせた縫い目が残っていることがわかった。今回は織物の観察結果および、材質調査を行った成果報告を行う。

2. 繊維の観察

鉄鏃は鏃身部から頸部にかけて残存しており、残存長は6cmである。表面から両側面にかけて錆化した織物が良好に残る。表面に残る織物は左側面まで続き、右側面に残る織物の端部と縫い合わせた状況が確認できる（第1図）。縫い目は二目で縫い合わせており、およそ6mm間隔で4か所確認できる。

織物の糸の太さは、経緯ともおよそ0.3mmで、撚りはほとんどかかっておらず、1cm四方の織密度は、縫い目を挟んで右側で経糸31～33本、緯糸13～15本、縫い目を挟んで左側鏃身部で経糸38本、緯糸15本、頸部側面で経糸34本、緯糸13本である^{※3)}。経糸は鉄鏃の長軸に対して垂直、鏃身部では斜め約10度に通っている。一方で縫い糸には弱い撚りがかかっており、太さは0.5mm前後で織物の糸より太い印象を持つ。縫い合わせた双方の織物端部は経糸方向であり、織耳ではないことがわかる。錆化しており不明瞭な面もあるが、縫い目の下層にも糸が確認できることから、織物の裁ち目がほつれるのを防ぐため、内側に折り曲げて縫い合わせている可能性が高い^{※4)}。

また、織物を二目で縫い合わせる縫い方を復元したところ、一方の織物の裏面から表面に糸を出し、もう一方の織物下方（裏面）から表面へ糸を出すことで、遺物に残る縫い目と同様な状態になることがわかった（第2図）。一目で縫い合わせるより、しっかりとした縫い目となるように思われる。

3. 織物の材質について

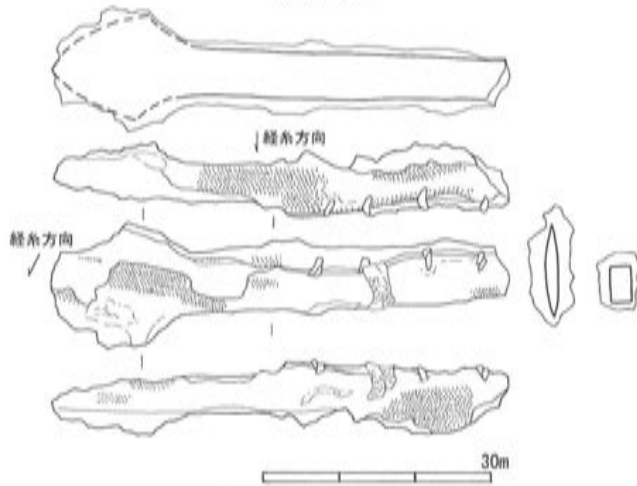
鉄鏃に残る織物の材質は、実体顕微鏡による観察から、糸に撚りがかかっていないこと等をふまえ、平絹である可能性が高いと思われた。さらに繊維のプレパート化により観察できた断面形状と、布目氏の断面模式図とを照合した結果、この織物は平絹であることが再確認された（第1図）。また、縫い糸についても、ごく微量をサンプリングし、断面観察を行ったところ、絹であることがわかった。



遺物写真



平絹拡大



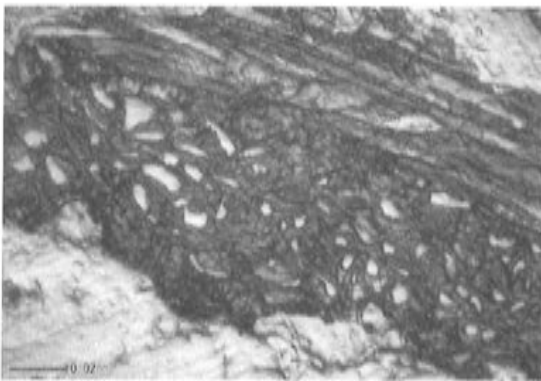
遺物実測図 (S=1/1)



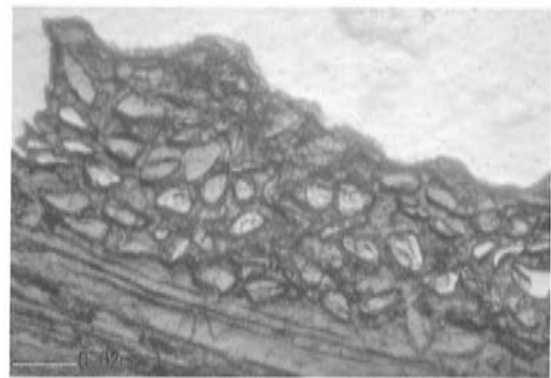
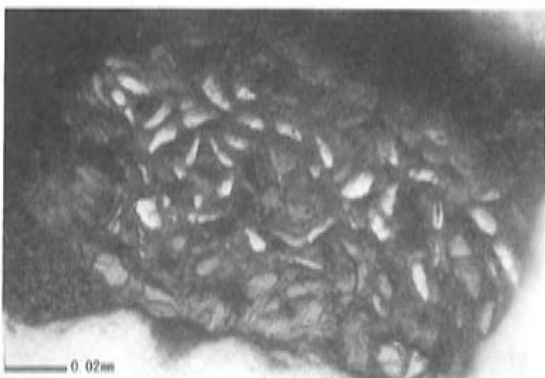
縫い目部分拡大



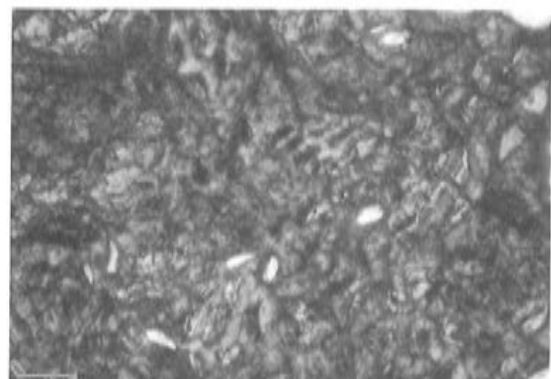
絹糸の断面模式図
(布目1988より転載)



経糸断面



緯糸断面



縫い糸断面

第1図 遺物実測図及び繊維写真

4. まとめ

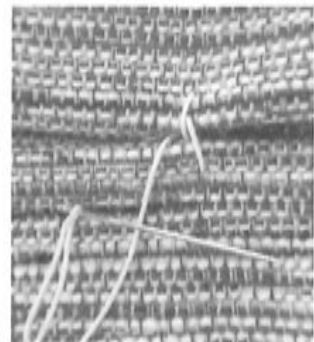
鉄鍬に残る織物の詳細観察から、平絹の端部を二目で縫い合わせている状況が確認できた。またプレバート化による断面観察から、その織物が平絹であることを再確認し、縫い糸にも織物本体と同じ素材の絹糸を使用して縫い合わせていることが明らかとなった^{註5)}。

地下式横穴墓より出土する副葬鉄器に織物が伴う事例は多く見られ（沢田2001、嶋田2009）、今回取扱った香禅寺地下式横穴墓出土の鉄鍬もその一例であろう。ただ、出土遺構や出土状況、共伴遺物等の詳細が不明であるため、袋状の平絹に遺物を入れた状態であったのか、遺物を巻き包み糸で留めた状態であったのか、具体的な副葬状況を復元することには限界がある^{註6)}。よって今回は、縫製痕跡を残す平絹の一事例にとどめておきたいと思う。

本項を作成するにあたり、東京国立博物館の沢田むつ代先生、山形大学の手代木美穂先生には多大なるご教授を頂きました。厚く御礼申し上げます。

参考文献

- 石川恒太郎 1959 「香禅寺遺跡」『宮崎県文化財調査報告書』第4輯 宮崎県教育委員会
石川恒太郎 1979 『地下式古墳の研究』帝国地方行政学会
鈴木 重治 1959 「香禅寺古墳の出土品について」『宮崎県文化財調査報告書』第4輯 宮崎県教育委員会
沢田むつ代 2001 「出土遺物に付着した繊維について」『島内地下式横穴墓群』えびの市埋蔵文化財調査報告書第29集
2005 「弥生時代の縫製方法の例」『季刊考古学』第91号
2005 「出土繊維の記録法」『季刊考古学』第91号
嶋田 史子 2009 「大萩38号地下式横穴墓出土遺物について～繊維痕跡を中心に～」
西都原考古博物館研究紀要第6号 宮崎県立宮崎県立西都原考古博物館
近沢 恒典 2005 『高取原地下式横穴墓』高城町教育委員会
布目 順郎 1988 『絹と布の考古学』雄山閣出版
宮崎県 1993 「香禅寺遺跡」『宮崎県史』資料編 考古2
宮崎県立西都原考古博物館 2009 『宮崎県内出土鉄製品データベース』宮崎県立西都原考古博物館調査研究報告書第1集



第2図 縫い目の復元

註1) データベース報告書刊行時、香禅寺地下式横穴墓の調査事例は1958年の1件のみと認識されていた。そのため、当報告書に掲載されている遺物を、石川1959、鈴木1959によって報告されている1958年調査関連の遺物として認識した経緯があり、出土遺構と遺物の照合は難しいと報告されている。しかしながら、その後の資料調査により1980年12月にも宮崎県教育委員会によって、発掘調査が行われていることが新たにわかった。よって、データベース報告書に掲載されている遺物は、1980年の調査時に出土した遺物である可能性も出てきた。しかし、調査の詳細については、今後さらなる資料調査が必要となる。

註2) データベース報告書で図面掲載は割愛されている。

註3) 織密度は、織物の残存範囲が限られているため、経糸は5mm以内での本数を、緯糸は2mm以内での本数を基に算出している。縫い目を挟んで左側では鍬身部と頸部側面の経糸の本数に差が見られるが、織密度の算出方法による誤差も考えられ、織物の観察からこれらは一連の織物であると判断した。

註4) 同様の事例については時期が異なるが、青谷上寺地遺跡での報告があり（沢田2005）、その報告を元に観察を行った。

註5) 沢田むつ代先生によると、飛鳥時代以降の織物では、織物と同素材の糸で縫い合わせている事が普通であり、また縫い糸について、通常絹糸は、織物として使用する場合には撚りをかけないが、縫い糸として使用する場合には、縫い進めていくと糸が細れて強度が弱まる可能性があり、撚りをかけているのではないかと、この御助言を頂いた。

註6) 平絹の重なりが頸部で断片的に見られるが、縫い目の上層で見られることから二次的な付着、もしくは別の織物であると判断した。

宮崎県立西都原考古博物館研究紀要 執筆要項（投稿規定）

1. 執筆者

宮崎県立西都原考古博物館職員及び共同研究者とする。当館からの依頼原稿についてはこの限りではない。（なお、執筆原稿の内容や頁数によっては掲載をしない場合もある。）

2. 執筆内容

- (1) 研究論文・資料紹介 (2) 調査報告 (3) 研究ノート
- (4) 体験・実験講座成果報告 (5) その他、編集担当者が適当と認めたもの

3. 原稿

- (1) 締切り 1月末日
- (2) 提出 原則、データ入稿とし、プリントアウト原稿を添付する。なお、画像はjpeg形式かpsd形式とする。

4. 執筆要項

- (1) 体裁
 - ・ A4版、横組み、45文字×36行、MS明朝体基本
 - ・ 版面（図・表・写真）はキャプション含め、縦24.5cm、横16.5cm
- (2) 表記
 - ・ 文字は、資料的なもの以外は、原則として現代仮名遣いで新字体とする。
 - ・ 度量衡単位は、cm、kg、mのように記号を、数量は算用数字（半角）を使用する。
 - ・ 年号は原則として西暦で表記し、和年号が必要な場合は()で併記する。
例：2013（平成25）年
- (3) 註、引用、参考文献
 - ・ 本文末尾に一括記載する。
 - ・ 註は、本文中の引用箇所には、文章の右肩に小括弧を付した番号を記入し、文章末尾にまとめて説明文を記載する。
 - ・ 引用、参考文献は、著者名、発行年、「論文名」、『書名』、巻号数、発行所、（できれば）頁数を明記する。
- (4) その他
 - ・ 本紀要のpdfファイルを作成する。（抜き刷りは原則、作成しない。）

宮崎県立西都原考古博物館研究紀要第9号 執筆者紹介

劉 益昌 (YI - CHANG Liu)	台湾中央研究院歴史語言研究所研究員
犬木 努 (INUKI Tsutomu)	大阪大谷大学 教授
近藤 麻美 (KONDO Mami)	大阪大谷大学大学院文学研究科 研修生
吉村 和昭 (YOSHIMURA Kazuaki)	奈良県立橿原考古学研究所 総括研究員
(五十音順)	

安藤 正純 (ANDO Masazumi)	宮崎県立西都原考古博物館	学芸普及担当	主査
甲斐 貴充 (KAI Takamitsu)	宮崎県立西都原考古博物館	学芸普及担当	主査
島木 良浩 (SHIMAKI Yoshihiro)	宮崎県立西都原考古博物館	学芸普及担当	主査
嶋田 史子 (SHIMADA Fumiko)	宮崎県立西都原考古博物館	整理専門員	
藤木 聡 (FUJIKI Satoshi)	宮崎県立西都原考古博物館	学芸普及担当	主査
(五十音順)			

宮崎県立西都原考古博物館研究紀要 第9号

Research Bulletin of Saitobaru Archaeological Museum of Miyazaki Prefecture
Vol. 9

2013年3月29日

編集・発行：宮崎県立西都原考古博物館

〒881-0005 宮崎県西都市大字三宅5670番
TEL：0983-41-0041 FAX：0983-41-0051

印刷：株式会社 印刷センタークロダ

〒880-0022 宮崎市大橋2丁目175
TEL：0985-24-4531 FAX：0985-27-9337



Saitobaru Archaeological Museum of Miyazaki Prefecture

